

---

# 十二世界の戦後史

次九なななな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十一世界の戦後史

### 【Zコード】

Z4920Z

### 【作者名】

次九ななな

### 【あらすじ】

意図せずして命を落とした十六歳の少年は即座に閻魔様の御前に引きずり出され……ることも無く、幽靈としてこの世をさまよつ羽田になる。

道中、やたら恐ろしい気配をまとった少女やら、まったくやる気の無い魔王（他称）やらと関わる少年。気付けば死人のくせに厄介事の真っ只中へ。

しかし、その最中に訪れた生き返るチャンス！ のはずが本人はまるでその気無し。「己の命もかえりみず、少年は何を望む？

「シ、シンヤが悪いんだから、ね。シンヤが 私を裏切つたりするから、だから」

それは女の声だった。登校中、不意に背後から聞こえてきた若い女の声。

僕は振り向いて声の主を確かめようとしたけれど、地面に崩れ落ちている体は僕の思うように動いてくれなかつた。それでも、なんとか首だけを動かして僕の心臓を抉つてくれた女を視界に入れる。女子高生、だつた。僕と同じ学校ではないけれど身に着けている制服には見覚えがある。どこにでもいるような、いわゆる普通の女子高生だ。刃物を握りしめていること以外は。

彼女は僕が見ていてることに気付いた様子もなく、僕というよりは自分の目の前にかざしている血塗れの包丁に向かつて話しかけ続けている。

「で、でも、大丈夫だよ？ あの女を片付けたら、私も、私もだから、ね？ ね？」

妙にうわずつた氣味の悪い声でそんなことを言つものだから、僕は最後の力を振り絞つて、言つてやつた。

「い、や……僕は……シン、ヤなんて……名前、じゃないん……だけどな」

びくり、と体を震わせて、彼女はようやく僕へ目を向けた。その双眸はこれ以上ないといふくらいに見開かれている。

僕、兎川遙、公立北明時高等学校一年C組、出席番号十七番は当然、人からシンヤなんて呼ばれることはない。僕にシンヤ的な要素は皆無だからだ。

では何故この女子高生が僕をシンヤと呼び、その上刃物までねじ込んだかといふと間違えた。

といつことなのだろ？ 多分、だけども。

……間違えるか普通！？ よく分からぬけど、要するに殺した  
いほど好きな恋人かなにかなんですよね！？ 失礼だけど、そんな  
だから裏切られるんじゃないのか、と思つた。

まあ、人を刺すような精神状態の人に普通を要求するのも酷な話  
なのかも知れぬけど。

でも、正常でなければ人様の心臓に風穴かざあなを空けても相手は死にま  
せん などということはないわけで、あのなんだか締まらない台  
詞を言つた直後、僕はとうとう力尽きた。

それを見た女子高生はここでようやく自分が引き起こした事態を  
把握したのか、握りしめていた包丁をその手から取り落とすと、僕  
に背を向けて、一田散に逃げ出した。

……めちゃくちゃ足速いなあ、あの子。さつきも一撃で僕の心臓  
刺し貫いたし、最近の女子高生は特殊な訓練でも受けているのだろ  
うか。どうでもいいけど。といつか……なんだこれ？

さつき死んだんじゃないのか、僕は。

死んだ僕が走り去る女子高生を見送つてゐる理屈は……んんー、そ  
れにしてもこの血を流して倒れてる人、僕にそつくりだなー。でも  
まあ世の中には似た人が三人はいるとか

やめよう。そもそも何に対する抵抗なのかも分からぬし。

あー、これは……やつぱりあれ、なんですかね？ 僕はずつとい  
ない派で通してきたのになあ。いる派を通り越してなる派になると  
はなあ。なる派？

いや、でも僕を見下ろしているこの僕は本当に僕なんだろうか？  
……なんか、こんなオチの落語があつたよつた。あーと、なんだ  
つたかな、確か

どうでもいいよ。なんでこんな時に落語について悩まなきやいけ  
ないんだよ。どう考へても僕が悪いけどさ。なんで僕はいつもこう、  
隙あらば脇道にそれでいくんだろうか。

まあ、じゅうやつていつも通りなんだから僕はやつぱり僕、なんだ

うつむき

それでいても、この科学万能の時代に幽霊とは……  
で、これからどうすればいいの？。

信じがたい現実との対峙。幽霊の実在というそれは、しかしそまだ始まりにすぎなかつた。

恐ろしいことに幽霊という存在は浮いたり飛んだりということはできないらしい。さらに言えば壁をすり抜けることもできないし、物を動かすこともできないし、人に乗り移ることもできない。この分だと人を呪うとかもできないだろう。する気ないけど。

そして、らしくないのはそれだけではなく、姿形に関してもそうだった。

結論から言つてしまえば生前から何も変わっていない。足は一本ともあるし、体は透けていないし、着ているのは学校の制服だし、刺された傷もないし、これじゃあ靈的なものが見える人が見ても幽霊だつて気付かないんじやないか、というくらい普通だ。

いや、見える人と見えない人がいる時点で普通とは言えないのか。そう、散々ブーブー言ひはしたけれど、どうやらこの状態は？認識されない？という要素だけは備わっているようなのだ。

僕が死んだ時、周りには誰もいなかつた。

あの場所は通学路ではあるのだけど、僕が登校する時間帯が他の生徒に比べてあまりにも早いことに加えて土地柄も地方の片田舎、車も人も絶対数が多くない。

僕は最初、自分が死んだ場所でじっと待つていた。

?お迎え？が来るのを。

なにせ幽霊だ。しかるべき裁きを受け、しかるべき世界に収まる……のかなあ？ という発想のもと、この方が相手にも分かりやすくそうだ、という理由で自分の死体に腰を下ろして待つていると、結構な時間が経過した後、遂にそれは現れた。

つまりは、警察の方々が。

まあ、来ますよね、そりゃあ。ここ一応法治国家ですし。過ぎた

時間を考えればむしろ遅いくらいだつたけど、朝早かつたしね。そういうえば誰が通報したんだろう？　あの女子高生が自首でもしたのかな。

経緯はなんにしろ、警察の方々は結構な大所帯でやつて来て、僕が間違いなく死んでいることを確認した後、いわゆる現場検証？というような作業を始めた。

?僕？の存在には一切触れずに。

僕には彼らの姿が見えたし、声も聞こえた。しかし彼らには僕の姿は見えなかつたし、声も聞こえなかつた。認識されないので当然彼らは僕にぶつかり放題だつたのだけど、それにも完全に無反応。触ることはできても小石一つ持ち上げることができない僕はそれに一切抗うことができず、地べたを這いする羽目になつた。

あれはどう考へても気付いた上で無視している、という様子ではなかつた。

わざわざ確認するために現場の写真を撮つている人の前で自分の死体の上に乗り、「イエーイ」と言いつつピースサインまでしてフレームに収まつたのだから間違いはないと思う。あれが気付いていない演技だつたというのなら　　の人達は完全に職業選択を間違えていいる。

……あの写真、幽霊の僕は写つてないよね？　自分の死体の上でピースつていうのは心靈写真史上類を見ない残念な構図だろうな…　もう少し方法を考えれば良かつた。かなり今更だけど。

結局、警察は終始僕には気付かないまま、僕の死体だけを連れて引き上げていつた。

その時に一緒について行くことはできたのだろうけど、そうする意味が見出せなかつたので、僕は大人しく彼らを見送つた。

?お迎え？なんて来ないな　　この頃にはもう、僕はそう思つようになつていたから。

別にあの世からの道案内と警察の仕事ぶりに何かしらの因果関係を見い出したわけじゃない。明確な根拠があるわけじや無いけれど

……ただ、あえて言つなり、やっぱり普通だからだ。見えなこと以外は。

うして、これはどうもこう感じではない、と決めつけた僕は、とりあえず家に帰ることにしたのだ。

僕がこうなつたのは学校に行く途中のことではあつたけれど、文字通り死んでも学校に行く？なんていつ真似をするほど僕の學習意欲は旺盛<sup>おっせい</sup>じゃない。

だから今、僕は来た道を戻り、駅に向かつて歩いていく。  
幽靈のくせに、だ。

あー、ようやく駅が見えてきた。いつもとほぼ変わらないわりに異様に疲れた気がする。

……幽靈つて、疲れるんですか？

駅のホームには思いのほか大勢の人人がいた。

通学通勤ラッシュが本格的に始まる時間ではあるのだけど、それでも妙に多い気がする。

なんにしろ、人が多いという状況は僕には都合が悪いので、できるだけ人が少ない乗り場を求めてホームの先頭へ向かつた。

人も物も触ることはできても動かすことができない僕が混んでいる車両に乗ることは難しいだろう。となれば、僕が電車に乗るためには人は少なければ少ないほどいい。

どこかいい場所はないかなー、と歩いていたら、結局ホームの端まで来てしまった。だけど、その甲斐あつてと言うか、そこは改札付近の人ばかりとは対称的に閑散かんさんとしていた。一脚だけ置かれている五、六人掛けの長椅子の端に人が一人座っているだけだ。

この分ならなんとか乗れそうだ、と一安心して、僕は長椅子の空いている方の端に腰掛けた。幽霊が疲労を感じるという驚愕ためらいの事実を知つてしまつた今となつては、樂することになんの躊躇ためらいいもなし。生前からそんなものはなかつた氣もするけれど。

「あーあ、しつかしなんなんだろうな。これ」

頭の後ろで両手を組んで、体重を背もたれに預けながら、僕は改めて途方に暮れた。

なんとか家には帰れそうだけど、帰つてもできることがない。かあさんが帰つてくるまでぼーっとすることしか。そして、かあさんが帰つても、できることはないだろう。

「だあーもあーーー、どうしろつていうんだよ！？ この先ずっとこの状態でその辺をウロウロしなきゃいけないの？ かんべー」「もう少し静かにしていただけませんか」

……怖ええ。

僕がここに来る以前から椅子の隅に座っていた女人が、すごい

目でこっちを睨んでいる。いや、見た目はすこべりかわいい  
な人なんだけど。でも、ものすごく怖い。

「……はい。すいません、でした」

恐怖のあまり思わず姿勢を正して謝ると、その人は無言で手元の本に視線を戻した。さっきまではまったく気にしていなかつたけど、よくよく見れば僕と同じ学生、のようだつた。

若干時代錯誤の感すらある黒を基調としたセーラー服に身を包んだ少女。その姿は無造作にまっすぐ伸びた黒髪とあいまつて、なんだか良家のお嬢様のような風情を織りなしている。

多分、高校生だろう。雰囲気が高校に上がって半年程度の僕なんかとは比べ物にならないほど大人びている。これで中学生なら……お姉さんがいれば紹介して欲しい。

……別に中学生でも問題はないんじゃないかな？ 僕だつてこの間まで中学生だつたわけだし。まあ、どつちにしる小心者の僕がこんな美人 というより、女子にそんな理由で声をかけることなんかできないんだけどね。

なんだっけ？ シンヤ君？ とやらなら別なのかもしれないけど、恐らくは高校生の分際で二股だか三股だか百股だか知らないけど、まつたく羨ま

「聞こえんの！？」

椅子を蹴り飛ばす勢いで立ち上がりながら、おもいつきり声をかけてしまった。静かにしろと言われた直後に大声で。

当然、今はさつきよりもさらに鋭い視線に射抜かれているわけだけれども。

「いや、えと、あのですね？ その、なんで僕の声が聞こえるのかなーと思つたもので、つい。あーと、そんなんですよね？ 聞こえてますよね？ 見えても、います？」

睨んでるんだからそりや見えてるだろ？ と聞いた後に気がついた。まあでも、そんなことはどうでもいいんですよ。それよりこれは 不幸中の幸い？ とでも言うのかな。

僕のことを認識できるってことはだよ？ つまりはこの人を介すれば、僕の意思を他の人に伝えられるってことだよね。それができるなら、もうどうにでもなるような気がしませんか？ 勝ったも当然ですよ。いや、よく分かんないけど。

……なかなか返答がないな、つてもうじつち見てないし！ あれ……？ もしかしてこの人、僕のこと幽霊だって気付いてるわけじゃないのか？ ただの変な人だと思われますかね？

困った、な。せっかくこの事態を開拓できる兆しが見えてきたといつのに、あっさりとそれを見失おうとしている。ここはなんとか誤解を解かないと。

……仮に誤解が解けたとしても、それはそれで面倒なことにならないだろうか？

幽霊、だもんなあ。そんなもんに「やあ、どうも」なんて話しかけられたら……僕は即座に逃げ出す自信があるぞ。

もう……でも幽霊だつてことを信じてもらえない限りはその後に繫がらないんだよなあ。ということは結局そこはどうにかしないといけないのか。「ううん、難しそうだけど、とりあえずやってみるか。「あの、幽霊つていると思いますか？」

「私に話しかけないで」

完つ全に初手を間違えましたね！ そりゃこいつなるよ。何をやつてるんだ僕は。

あー……これってまだ挽回できるのかなあ？ ええと、そうだ！ 何か 言葉であれこれ説明するんじゃなくて、見れば一発で僕が幽霊だつて分かる何かは……

無いんだよなーそれ。なんだよ、がっかりだな幽霊つて。それともあれなのか？ 単に僕が幽霊界きつての落ちこぼれなのか？ はつ、壁抜けもろくにできねえとか、引くわー。という感じなのか？ そうなのかな？

つてそんなことどうでもいいよ。なんで壁抜けできないとかっこ悪いみたいになってるんだ。むしろ気持ち悪いだろ、そんなことし

てる奴。僕が引く側だ！

いやだからそういう訳なくつてさー。真面目に考えててくれよ僕。

幽靈っぽいところか……ううん、考えるつて言つても見えない聞こえないを外すと残るのは？物を動かせない？だから、それに頼るしかないな。どうだらう、うまく伝わればいいけど。

「あ、あの、ですね？ 話しかけるなつて言われたのにこんなことを頼むのは、無礼だと承知はしているんですが、しているんですけど、ちょっと僕のすること見ててもらえませんか？」

黙々と本を読んでいた彼女は異様に恐ろしい雰囲気に反して案外いい人なのか頼んだら普通に顔を上げてくれたので、僕はすかさず長椅子の背もたれに両手をつけて全力で押した。

もちろん、ぴくりとも動かない。僕が以前の状態で同じことをすれば特別どこかに固定されているわけでもないこの長椅子は、人が一人座つていぐらいうらある程度は動いただろう。

しかし、今の僕ではいくら力を入れようが一ミリたりとも動かせない。承知の上で僕は十秒程度、うぐぐ、と歯を食いしばって椅子を押し続けてから、彼女の方を向いた。

「えと、どうです、か？」

どうですか、って言われても困るだらう。やっぱり言つてから気付いたけど。

案の定、訝しげな視線を向けられた。かなり控えめに言つて何がしたいんだよこいつ。馬鹿じやねえの？ といった感じだ。どうしたものか、と迷つていると、しゃんじゅん彼女は何か思い当たることがあつたのか、あなた と呴いてから逡巡し、続けた。

「この椅子を動かしたいの？」

「違います……」

やっぱりか。何も伝わらなかつた。思つた以上に難しいぞ、これ。僕はどことなく威圧レベルが増した気がする彼女から逃れるように視線を外した。そして、その際に視界の端にとらえたもので、ふと思いついた。

「あ、じゃあ次。次できつと分かると思いますから。見てて下さいクイズかよ。まあ、でも実際そういう感じになっちゃってるんだけどさ。

僕は彼女に背を向けて小走りで目標に向かつ。目指すは、僕らから少し離れた場所で電車を待っているサラリーマン風の中年男性。一人で立っている男性の下へたどり着くと、僕は背後からその人に抱きついた。

どれだけひいき目に考えたって、いきなり後ろから抱きつかれた人が完全ノーリアクションなのはおかしいだろう。ちょっとした騒ぎになつてもいいくらいだ。相手が女性だったら彼女が問答無用で駅員を呼びに行つていたかも知れない。

これを見ればさすがに彼女もなんか普通じゃないな……って、もう！ また見てないしあの人――！ なんの意味もなくおっさんに抱きついてる僕はなんなんだよ！

即座に男性から離れ、全速力で彼女の下へ戻るとその前に立つて、言つた。

「ちゃんと見ててくれました！？ 見てなかつたですよね！？」

「ええ」

「つ、見ててくださいって言つたじゃないですか……なんで見てくれないんですか……」

「氣味が悪いから」

くつそおおお！ 反論のしようがない！

あー、これはもう万策尽きた、のかな。やっぱりねえ、無理だよねえ、幽靈、だもんねえ。仕方ない。これ以上迷惑かけるのも悪いし、ここはもう大人しくしていよう。

僕は、はあああ、と深いため息をつき、うなだれながら椅子の隅へ戻つた。

先程と同じように身体を背もたれに預け、なんとなく空を見上げた。秋晴れと言うにふさわしい、澄みきつた空。絵に描いたような清々しい朝だ。死んでさえいなければ。

「どうしたもんかね……」

思わず呟くと同時に、不意に視線を感じたのでそちらを見る。彼女が、僕を見ていた。迷惑かけないようこじょうとした矢先に、これですか僕は。

「あ、はい、すいません……もうほんとに静かになります」

考えてみれば最初から迷惑かけっぱなしでもんなあ。ちゃんと謝った方がいいかな。

そんなことを考えていたら、意外にも彼女の方から口を開いた。

「あなた、結局何がしたかったの？」

「何がって言われると……」「う、なんと言うか」

さすがにここまでまた幽靈うんねん云々を持ち出す気にはなれなかつた。言つても信じてはもらえないだろつ、といつのがもちろん第一ではあるのだけれど、それ以外にも理由はある。

この人の視線に まあ大部分は不審で占められてはいるのだけど わざかに、心配するような気配が混じつている気がして、なんだか、それに対して幽靈がどうとか答えるのは失礼に思えた。嘘をついているわけじゃないから構わない氣もするけど。でも、する気にならない。

「僕の意思を人に伝えて欲しいんです。僕の代わりに。それを、あなたに頼みたくて」

目的という点では、こういうことだろつ。幽靈どうこうはあくまでこれをお願いするための前提であつて、それ自体は別に重要なことじゃない。ただ

「……どうして自分で伝えないの？」

「前提が成立していなければ、そう思いますよね。

「それは……その、僕は普通じゃないんですよ。僕の言葉は人には届かないみたいで。だから、誰かに代わりに伝えてもらえないかな、と」

なんとも要領を得ない説明しかできなかつた。そもそも僕自身が今の状態を明確に把握していないのだから、人に説明できるわけが

ない。

「申し訳ないけれど、その頼みごとは聞けない」

「……そうですね」

意味が分からぬでしょから。今会つたばかりの人にこんなこと言われて普通に「はい、分かりました」なんて返されたら、逆に僕が「え、なんで?」となることだろう。

でも、あれだけの奇行を繰り広げた人間の事情をあえて知りうとしてくれただけでも、やっぱりこの人はいい人なんだろうな。

「そういう想いは自分の口から自分の言葉で表さなければ伝わらないでしようから」

「……なんか、変な勘違いしてません?」

あれ? そうなつちゃいます? そういう感じに取れなくもなかつたかもしねりけど。

「あの、僕の好きな人に代わりに告白してくれとか そういう話だと思つてます?」

「……違うの?」

「違います」

今会つた人ですよ? 普通に伝言頼むことすらばばかる相手にそれは頼まないでしょ。

ふうん、と彼女が興味を失くしたように息を漏らして、僕と話すために変えていた体の向きを元に戻したので、僕は彼女がまた本を読み始めるのだと思った。でも彼女は本を脇に置いて、ほんのわずかに間目を閉じた後、だつたら と再び僕の方を見て言った。

「誰に何を伝えて欲しいの?」

……あ、やばい。具体的なこと何も考えてなかつた。

「ええと相手は、僕の母なんですけど……内容は、まあ、いろいろなので一口には……」

実は何も考へていませんでした、と正直に言えない僕は駄目な人間だなあ、と思う。だけど、そんなことを考へている間に具体的なことを考えるんだ僕! 何の確証もないけど、ここで何も言えなか

つたらものすいじへ恐ろじこ日にあひ、よつた気がするから。

「例えば？」

うぐぐ。畳み掛けてくるなあ。何も用意していないのを知った上で聞いてませんよね？

僕が目を泳がせて必死に思案していると突然に、音楽が鳴り響いた。機械的な音の、聞き覚えのある曲。それは、僕の携帯の着信音、だつた。

発信源となつていてる僕を見つめる彼女へ反射的に手の平を向けてから、ブレザーの内ポケットに入っていた携帯電話を取り出す。僕は、僕の死体から携帯を回収してはいけない。それ以前に、僕は物を動かせない。

……なにこれ？ 携帯の幽霊？

魔王。

意味が分からぬ。でも、携帯の画面に表示されている発信相手は間違いなく、魔王。

僕は、とりあえず一つ折りの携帯を開き、着信を切ることにした。

言つまでもないことだけれど、僕は携帯の電話帳に魔王の番号を登録したことはない。

……これつて、待望の？お迎え？なんだろうか？でも……仮にそうだとして、携帯に連絡していくつてどうなの？死んだ人が携帯持つてなかつたらどうすんのさ。

そんなことを考えている間に、携帯が再び音楽を奏で始める。掛けってきた相手は当然に、魔王だった。

これつて……出ないと延々鳴らされるパターンなんだろうな、きっと。

んんー、仕方ない。出よう。言つても電話だしね。一応話してみて、あまりにもあんまりな感じだつたら、まあ、携帯を投げ捨てるとかすればいいし。

僕は意を決して、通話を開始し携帯を耳にあてた。

『なんで切んのよ！』

聞こえてきたのは意外にも若い女性の声だった。そして僕にひとつはこちらの方が余程意外なことだけど、かなり怒っている。いや、普通は切ると思いますけどね。だって

「なんか怪しかったんで……」

『怪しい？あんた、死んだ後にまで詐欺に会つとでも思つてんの

?死人のくせに』

死人のくせに、か。さすがこんな携帯に掛けてくるだけあってお見通しなんですね。てことはやつぱり？お迎え？なのかなあ？て

つきりいないと思つたんだけど。もう少しあそこで待つてた方が良かったんだろうか。まあ、今更そんなこと

『あんた人の話聞いてんの?』

「はい。あ、いえ、その、だいたいは

『全部聞いてるつづーのよ。あんたに話してんでしょうが』

「はい……すいません」

すつげえ怒つてる。今のはまあ、僕が悪かったかな、と思ひますけど。

「ええと、それで用件の方は?」

『あんた……なんも聞いてねーじゃねーのよ…』

ばれちゃつた……いきなりそんな重要なことを話してるとは思わなかつたなあ。

『……あんたはもういいわ』

落胆したと言わんばかりの深いため息が聞こえてくる。こんなに短時間でここまで失望されることってそうないよね。

『あんたのいる所からそつ離れてねー場所に鳥文字新仁<sup>かじもんじあいひと</sup>って子がいるはずだから、その子にこの電話代わんなさい』

「え? カラス、モンジ……なんですか?」

『鳥文字新仁つ! 人の話聞けつつてんでしょ!』

「いや、そんな戦国武将みたいな人は……」

「いないだろ」とは思いつつ一応辺りを見回してみる。駅にはたくさん人はいるけど、この周辺に限ればさつき僕が抱きついたサラリーマンくらいしかいないから、あの人なのかな? いやでも、子つて言つてたしなあ。ううん、ということはやつぱり

「……いませんけど」

『はあ? あんたちゃんと探したの? 目え開けてんでしょうね?』

もうそんなところまでランクダウンしてたんですね。別にいいですけどね。くそつ。

「誰もいないですってば。どれだけ目を見開いても お?』

ふと視線を感じて目を向けた先、そこにはいないことが分かつて

いたから見もしなかつた方向から、さっきまで僕と噛み合わない会話を交わしていたあの人人が、僕を見ていた。

さすがにそれはないだろ、とは思いつつも、いつたん耳から携帯を離して尋ねてみる。

「あー、えっと、もしかして鳥文字……新仁さん？ なんですか？」

「ええ」

彼女は頷きながら答えると、相手に教えていないはずの名前を言い当てられたことに大して驚いた様子も見せず、続けた。

「確かに、私は鳥文字新仁よ」

思わず、うめいてしまった。気を悪くしただろうか。戦国武将とか言っちゃったし。

いや、でもそうだよな。なんせ幽霊がいるくらいだ。それに比べれば鳥文字新仁って名前の女の子がいるくらいのことはまったく普通 なんて思えないよ。

どう考へてもおかしいだろ。どうにか経験を積むと自分の娘に新仁なんて名前をつける選択肢が生じるんだ。現実は僕の常識を搖るがすのをそろそろ止めてくれないだろうか。

でも、僕がどう思つたところで実際に存在しているのだから、そういうもののなか。

「えつと、今電話で話してる人が鳥文字さんに代わって欲しいみたいなんですけど……」

そう告げてから、僕は手にしている携帯を鳥文字新仁さんに差し出した。

「……その相手の人は誰なの？」

「誰、と言われても……僕も知らない人なので。あ、でも無理には言いませんから。僕の方から断られました、って伝えますよ？」  
当然の反応として、鳥文字さんはあからさまに怪しい申し出に躊躇した。だけど、一体何が彼女をそうさせたのか、訝しげな目をしたまま、差し出された携帯を手に取った。

そして、手にしたそれを、すごい目で睨みつけた。

まあ、そうなりますよね。なんせ通話相手として表示されているのが？魔王？なんだから。怪しまない方がおかしいと思つ。

「ねえ」

だいたい登録されていない名前を表示させるつていうのはどういう技術なんだよ。魔王ってそんなに電子機器に強いのか？いや、これはそういうことでもない気が

「ねえ、と言つていいのだけど」

「はい？」

どうでもいいことを考えている間に鳥文字さんは睨む対象を携帯から僕に変更していた。

まあ、何を言われるのか大体の予想はつくけれど、言われたところでは僕にはどうすることもできない、と思つ。思うんだけど、この目を見てなお無視するといつがができるほど僕の精神は強靭ではない。

だから、とりあえず聞いてみる。

「えと、なんでしょう？」

「どのボタンを押せばいいの？」

親指と人差し指で眉間を押さえゆつくりとまぶたを下ろしてから、同じようにゆつくりと上げた。

すげえ！ 携帯電話の使い方を知らない女子高生だ！ 絶滅危惧種をこの目でとらえたのは初めてかもしけない。思わずテンションが上がつてしまつた。

「……聞いているの？」

「え？ あ、はい。えーと、別に何も押さなくてもそのまま話せます」

「これを聞いた鳥文字さんはすぐに「かわりました。鳥文字です」と電話に出た。

家の電話みたいに保留してるとか思ったんだろうか。確かに家のならそういうことするのが普通かな。そういうえば携帯に保留機能つてあるのかな？ 本気でどうでもいいけど。

……携帯か。そういえば僕の死体が持つたままの携帯はもう警察の手によって調べられているだろうか。かあさんの携帯番号は登録されてるから、連絡がいつてるかも知れない。

いや、でもまだ電車の中だろうから電話には出ないか……それ以前に寝てて気付かないって可能性の方が高いかな。いい加減、会社に近いところに引っ越せばいいのにさ。なんだつていつまでもある家に……あ、でも僕がいないなら、かあさんだつてもう

「私について来なさい」

「…………は？」

特にやることがなくなってしまったので、組んだ足の上に肘をついてぼけーっとしていると、いつの間にか鳥文字さんが正面に立つて僕を見下ろしていた。

そして僕が、なんですか？ と聞き返す間も無く、彼女は手にしている僕の携帯で魔王との会話を再開し、さうそう颯爽と改札の方に向かつて歩いていつてしまつた。

もおー、と子供じみた不満の声を上げつつも、僕は鳥文字さんの後を追いかける。

何の説明も無いのは気になるところではあるけれど、どうせこのまま帰つたところでどうにもならないのだから、それならいつそ事態が好転しそうな方に賭けてみるのもいい。今以上に悪化することもそうないだろうし。

僕は先行する鳥文字さんに追いつこうとするけれど、なかなか追いつかない。僕が駅に着いた時からそれなりに時間が経つてるので、その分の人が増えていて歩きづらいのだ。

しかし歩くの速いなあ、あの人！ むしろ僕を置いていくつもりなんじやないのか。それに、なんでもうほとんど小走りになつてる僕が、普通に歩いてるようしか見えないあの人一向に追いつけないんだよ。いくら人間と幽霊つていうハンデがあるにしたつておかしくないか？ あれか、身長差か、歩幅の差ですか。

鳥文字さん背高いもんね。百七十くらいあるのかな。いいよな

あ。僕なんて百五十六しかないつていうのに……いや、でもまあ、あれですよ。僕はこれからなんですよ。これから毎年十センチくらい伸びていきますよ。怖すぎるだろ。やだよそんなの……幽霊つて、身長伸びるのかな？

ああ、あの人もう改札出ちゃうよ。本気で容赦ないな。  
「鳥文字さん！ ちょっと待ってくださいよおー！」

冗談抜きで置いていかれる、という危機感を覚えた僕は思わず彼女を呼び止めたけれど、彼女は既に改札を出て僕の視界から外れているので、待ってくれているかどうかは分からない。加えて、魔王様との会話を続けていたあの人に僕の声が聞こえていたかどうか。

あのさ、これってあの人を見失つたらどうなるの？ 携帯は鳥文字さんが持つてるからもう魔王（自称）とは連絡取れないし。いやでも、さすがに放置つことは、ねえ？ 駅にいることは知ってるんだから、入口付近で待つてれば探してもらえ……いや待てよ、魔王様は僕を嫌つてるっぽいから、僕は別にいないならいいでいいかつていう感じに……

やつぱいですよ！？ このままだと絶賛放置プレイ実施中になるかもですよ！？

「待つてえええ————！」

恥も外聞も無く、情けない大声を上げて懇願した。どうせ周りの人達には聞こえないんだし。いやまあ、聞こえる状況だつたとしても同じことをした自信があるけど。

「鳥文字さん——ん！！ 置いてっちゃやだあ————！」

頭の片隅で、お前は三歳児か、という声が聞こえたような気がしがれど、当然のように無視した。僕に手段を選んでいる余裕など無いのだ。

ようやく改札までたどり着いた僕は自動改札機の上を乗り越えて駅のエントランスに出ると、必死になつて鳥文字さんを探す。

ベンチ、売店、券売機、時刻表、出入口……いない、よ？ ええと、マジですか！？

「あんなところを通りるのは行儀が悪いからやめなさい」「おわああああああ！」

泣きそうになっていたら、いきなり背後から声がしたので、僕は普通に、悲鳴を上げた。

「……もう少し静かにして」

「す、すいません。後ろにいるとは思わなかつたんで」

「待つてくれと言われたから待つていただけでしょ。どうしてそんなに驚くの」

ああ、ぱっちり聞こえてたんですね、あの辺のやつ。まあ、それで良かつたんだけど。でもなんか、こう うん、良かつたんだけど、ね。なんだろうね、この感じ。

「それから、これ。ありがとう」

そう言つて鳥文字さんが僕に差し出したのは僕の携帯だった。

ありがとう、ってこっちが無理矢理押しつけたんだから別にお礼なんか言わなくとも、とは思つたけれど、僕はそこには触れず、「いえ、どうも」というよく分からぬ返事をして携帯を受け取つた。こうじうものに対してあえてどうじう言つ必要はないだろ。むしろ、礼を言わなければいけないのは僕の方なのだし。

そう、だよね。考えてみれば僕は結局この人に失礼を謝つてもいなければ、待つていてもらつたお礼も言つていない。よろしくないなあ。うん。とりあえずお礼はちゃんと言つておこう。

「どうかしたの？」

「あ……あー、いえ、別に……」

駄目だ。なんか、この人にまっすぐ見つめられると、どうにも変な感じに……つて、なんだそれ。恋する乙女が僕は。気持ち悪いな。

「なら、早く行きましょう」

僕が場違いなことを考えている間に、鳥文字さんが再び僕に向かって手を伸ばす。でも、今度はそこに何も持つてはいない。空の左手だ。

えと、これってその 手を繋げって、ことですか？ さすがに

それは、ちょっと……

鳥文字さんの中では僕はもう完全に三歳児と同レベルの扱いになつてゐるということなのか。そりやあまあ、そう扱われても仕方がないことをしたのは僕なんだけれども。

僕が鳥文字さんと手を繋ぐことを躊躇していると、唐突に鳥文字さんが僕の視界から消えた。そして、彼女が立っていた場所には駅員がいていたんだけど、その駅員も僕が何か言う間もなく、僕の前を通り過ぎていった。

……なに？ どういうこと？ と、僕は軽く混乱しつつ、とりあえず鳥文字さんを探す。

彼女は、さつきの駅員が歩いていった方向、ここから少し離れたところへ倒れていた。

「だ、大丈夫、ですか？」

「ええ。大丈夫」

慌てて駆け寄った僕に、鳥文字さんはすぐ、実際まつたく問題は無いという風に答えると、スカートのすそを手で払いながら立ち上がりつた。

「人が多い場所に長居をするのはやめましょう」

そうして鳥文字さんは僕の手を取つて、何事もなかつたかのように出口に向かう。

いや……おかしいよね？

今起こつたことつて要するに、歩いてきた駅員が鳥文字さんにぶつかつて、結果鳥文字さんがはね飛ばされて地面に倒れた、ってことだよな。

駅の職員が利用客、いや例えそうじゃなかつたとしても、誰かにそんなことをした上に何も言わずに放つていくか？ それに駅員だけじゃない、周りにいた人達も一切今の出来事を気にしてる様子がなかつたし。

なんか……これによく似た状況をつい最近見かけた、ような気がするんですが。

「あの、鳥文字さん？」

僕の手を引いて歩く鳥文字さんと、必ず必ずと呼びかけた。こんなことを聞いていいものかどうかが、よく分からない。

「なに？」

鳥文字さんは振り返ることなく答えた。それは僕の意図を見越しての拒絶の意思表示なのか、それとも、単純に歩へりとに集中しているのか。気を付けて進まなければ、先程と同じことになりかねないから……

「えっと、なんと書つか……ありがと、『じやこます』

気付いたら、なぜかこのタイミングで、わざと書おうとしていたお礼を口にしていた。僕の小心者っぷりがよく表れてくる。それでも鳥文字さん、訳が分からぬだろうな。

「礼を言われるようなことはしていないでしょ。はぐれたら面倒だもの」

思いのほか、鳥文字さんは僕の脈絡のない言葉に困惑した様子もなくそう答えると、今までよつほんの少しだけ強く、僕の手を握り直した。

なるほど、そうなりましたか。別にそれについて書いたわけじゃなかつたんだけど。いや、いいんですけどね。それはそれで。自分でもよく分からなかつたし。

鳥文字さんに手を引かれ駅を出た僕は、その後も彼女に導かれるままに歩を進め、駅近くの駐車場へ向かつていた。

「これって、今更ですけど さつきの電話の人とのろに向かってるんですね？」

「ええ」

「あの人があの用があるのか、鳥文字さんは聞きました？」

「私も詳しいことは聞いていない」

「そうですか……」

不安が無いと言えば嘘になる。なにせ相手は魔王なんて名乗っているのだから。いろんな意味で怖い。

駐車場には十台以上の車が停まつていて、人も何人かいたけれど、目的の相手はすぐに分かつた。その人は大型のアウトドア車に寄りかかつて、僕らに手を振つていたからだ。

まだ少し遠目だからはつきりとは分からなければ、話した時の印象通り、若い女性だった。とは言つても僕らよりは年上なのだろうけど。二十歳くらいだろうか？

鳥文字さんにも劣らない長身、髪は肩に届くかという程度のショートヘア、身に付けている服は上下共にスポーツ選手が着ているようなジャージだ。

僕らは思わず歩く速度を上げ、程なくして彼女の眼前に立つた。

「……付き合つてんの？」

「いいえ……」

僕は鳥文字さんの手を離しながら、そう答えた。恐らく、かなり死んだ顔をしていると思う。初めて顔を合わせて、まず言つことがそれってどうなの？

だいたい、もしそんな関係だつたらさつきの電話で鳥文字さんの

名前を聞いた時に誰それ？ みたいな反応しないでしようよ。人のことをどうこう言つてた割にはこの人も人の話聞いてないじゃないですか。

「この子が迷子になりそつだつたので、念のためにです」「はあ、そう」

ああ、きっとまた僕のランクが下がつたんだろうなあ、これ。「ま、なんでもいいけど。揃つたんならさつさと行くわよ」

「え？ いや、ちょっと待つてくださいよ」

早速車に乗り込もうとする魔王を焦つて制止する。なんだつてこの人達は説明つてものをしないのかなあ。今のところ説明率0パーセントですよね。

「なによ？」

「魔王さんは今からどう……って言つか、なんで魔王なんですか？」

焦りから勢いあまつてどうでもいいことを聞いてしまつた。今更な感は相当強いのだけれど、あえて聞くまでもなくこの人 絶対魔王じやねえだろ。

うん、どうでもいいことでもないのか。この先なんだこれ、と思いつつ魔王つて呼び続けるのもなんか嫌だし。

「……あんた何言つてんの？ 初対面の人間に魔王呼ばわりされる覚えはねーんだけど」

「え？ いやでも、携帯に着信があつた時の名前が、その……魔王だつたので」

予想外の答えに、僕は携帯を取り出して着信履歴を見せながら説明する。自分でも改めて見たけれど、そこに表示されている名前はやつぱり 魔王、なんだけど。

これを見た魔王（仮）は心底うんざつしたよつて「あの馬鹿が……」と毒づいた後、

「まあ、なんつーか、私は人から魔王つて呼ばれることがあるから、それですよ」

「はあ……そ、なんですか？」

「どうやらあの携帯の表示はこの人の意図したことではなかつたみたいだけど……でも魔王は魔王つてことなのか？ 結局よく分からぬ」

「あの、ちなみに「じゅじゅじゅ」とあると魔王なんて呼ばれる」と云ふるんですか？」

「「じゅじゅじゅ」……んー、そおねえ……まあ、説明はやめとくわ」

魔王（他称）はうつむき、腕を組んで、一瞬悩んでいるようなやつぱり悩んでいないような素振りを見せてから、もう一度僕を見て、

拍手した。

「……人に言つとなんかまざい内容なんですか？」

「んや、めんじくせーから」

「そ、そつ……ですか」

もちろん強制なんてできないことだからおかしな反応ではないけれど、そこまではつきり言わると腰が引けてしまつ。電話で話した時から思つてはいたけど、この人なんか苦手かも。

まあそれはそれとして、今後のためになりあえずこれも確認するべきだろつな。

「あー、で、魔 あなたの名前は？」

「人に名前を尋ねる時は、まず自分が名乗るのが礼儀つてもんでしょうが」

めんじくせいなあ、もづ。どうせ知つてるでしょつが、僕の名前くらー。鳥文字さんの名前は知つてたんだからやあ。

「や、あんたの名前は知らねーわよ。なんか普通のようで案外普通じゃねーって感じだつたのは覚えてつけど」

世間ではそれを忘れたつて言つんだよー。あと、なんで普通に人の心読んでんの！？ 魔王だから？ すげえな。一度とやらぬでくださいね！」

「……兎川遙、です。僕の名前は」

「加賀晴子よ。ハルちゃんつて呼んだら殴つからね」

呼ばねえよ。僕の『近所での呼ばれ方とかぶつてるし。

「それで加賀さん。加賀さんは、幽霊の僕らを迎えてきたついでいいんですか？」

本人から聞いてはいけないけど、鳥文字さんが僕と同じ状態なのは疑う余地がないと思う。

僕の姿が見える、僕の声が聞こえる、僕の携帯でこの人と話して、僕の手を引いて歩いて、そしてなにより、駅でのあの出来事、この結論に至るには十分な根拠。

あれ？ そう考へると……この加賀さんも同じじつことになるのかも。いや、でも、そつなると……どうなるの？ あれ？ 分かんなくなってきた。

今更ながら正体を計りかねて、僕は加賀さんをじっと見つめた。その加賀さんは僕の質問には答えずに、なぜか僕と鳥文字さんを交互に見比べている。

加賀さんは何度も僕らの間で視線を泳がせた後、首をかしげながら言つた。

「なに？ 今なんつったの？」

「だから、僕らを迎えて来たんですか、と」

「そこじゃねーわよ。その前」

「……幽霊の僕と鳥文字さんを、だつたと思ひますけど」

それがどうかしたんですか、と言おうとした矢先、加賀さんは僕をとらえている両の目をすうと細め、発言する機を逸した僕としばらく無言で見つめ合つと、不意にその視線を鳥文字さんに移す。

「……こいつ、何言つてんの？」

「私に聞かれても困ります」

え、何？ 僕なんか変なこと言いました？ ううん、あれかな。

やっぱり、って言つのもあれだけど、鳥文字さんは幽霊じゃないのかな？ やはり、でもなあ、どう考へても

「あんた、自分のこと幽霊だと思つてんの？」

「はあ？ え、ええ、それはまあ、そうですけど……」

僕？　鳥文字さんじゃなくて？　僕は間違いないだらう。だって死んでるんだし。

加賀さんは、片手で顔を覆つてから、一度大きくため息をついて、恐らくは不思議そうな顔をして自分を見ている僕に、言った。

「幽靈なんているわけねーでしょうが。あんたいい歳して何言つてんの？　大丈夫？」

……大丈夫じゃあ、ないです。僕の存在全否定ですし。えーと、これは、だから……

「いないの！？」

「……どうして私に聞くの？」

混乱して反射的に鳥文字さんに助けを求めたわけですが、実に的確な回答をいただいた。

「今日び、子供だってそんなもん信じてねーわよ？　それを大の男が真顔で、僕幽靈ですけどなにか？　とか。本気でうぜーわね」  
「あ、まずいなこれ。大丈夫かな。僕、泣いてなきやいいけど。  
「ええっと、じゃあ、僕は……なんなんでしょうか？」

「そういうことは人に聞くんじゃないくて、自分で答えを見つけるしかねーと思うわよ」

「そういうことじやなくて……状態を聞いてるんですよ。生きてるとか死んでるとか」

「状態？　はあ、状態……ねえ。ふうん、そおねえ、一言で言ひつな

ら

そこまで言つて、加賀さんは腕を組み空を見上げて、んんー、としばし唸うなつた後、上に向けた手の平に逆の手で作った拳をぽん、と乗せるという古風な仕草を見せて、続けた。

「幽靈ね」

「めんどくさがりましたよね！？」

「ああ？　失礼な奴ね。考えてみれば幽靈つてのも案外的を得てんのかなー、と思ったのよ。いきなり聞いた時は、こいつ残念な子なんかいらっしゃって思ったのは思つたんだけど」

そんなことはこちいち報告してくれなくて結構です。自分で分かつてますから。

「じゃあ、それで……結局加賀さんは何をしに来たんですか？」

「人を暇人みてーに言ってんじゃねーわよ。用があるからに決まつてんでしょうが。これ以上ねーつてくらいの大つ事な用があんのよ」

「大事な用、ですか」

「そーよ。でなきやこんな朝つぱらから」「んなとこ来ねーわよ。こんな朝つぱらから！」

急にキレられても、そこは別に僕らのせいではない、と思つんですけど。

「まあいいわ。とりあえず続きは移動しながらにしてくんねーから? 人待たせてんのよね。それに……」

「それに?」

「ここだと周りから私が、一人で延々喋つてる残念な奴だと思われんでしょう」

「……そういえばそうですね」

かなり今更な気はしますけどね。あ、でもそれならこの人は僕らみたいな? 幽霊? ジゃないのか。ふうん、結局なんなんだう、この人。

「じゃあ、とつとと行くわよ」

僕と鳥文字さんは、そう言つてさつと車の運転席に乗り込んでしまった加賀さんを見て、どうしたものかと顔を見合させた。

「なによ? まさか、ここまで来て怖気づいたなんて言わねーでしょーね?」

まるで車に乗るうとしない僕らに加賀さんはドアを開き、半眼で言つただけれど

「いや、そういうわけじゃなくて、ですね」

「? だったらなんだつーのよ?」

「僕ら自分でドア開けられないんですけど……」

「ほんつとめんどくせーわね!」

一度車から降りて後部座席のドアを開けながら、加賀さんはそう  
言った。そして、運転席に戻った後、僕らがドアを閉めないのを見  
て、もう一度言った。

「だから、カーネルに対してプライオリティの高いコールが頻発して、通常のタスクがプールされる間にリターンアドレスが破壊されてデッドロックが起きたって感じつつたわよね？　さすがにこれで分かつたわよね？」

「だから、全然分かりませんってば」

僕と鳥文字さんが加賀晴子さんの運転する車に乗つてから一時間程度が経過しただろうか。その間、加賀さんは僕らの身に起こった事象を説明してくれたのだけれど、僕にはその内容が微塵みじんも理解できなかつた。

「これだけ噛み砕いて説明してんのに分かんねーってなんなの？殴られてーの？」

だつてさ、説明に使われてる単語単語の意味がもう分かんないんですよ。そんなものでいくら細かく説明されたって理解できるわけないんですつて。

「もうちょっと、こう　普通の人にも分かる表現つてないんですか？」

「ねーわよ。つづーか今のがそうよ

「いやでも、僕分からないですし」

「それはあなたの頭がわりーからでしょうが」

あーあ、言つちやつたよ。そりやあ僕だつて自分が出来のいい方だとは思わないけどさ。でもほんとに普通の人分かるの？　今のただの一つも分からなかつたけどなあ。

「この子は今の状態の仕組みを知りたいのではなくて、自分が置かれている状況の概略を知りたいのだと思います」

この一時間ほど黙つて僕らのやり取りを聞いていた隣の鳥文字さんが唐突に会話に参加したので、一瞬妙な間ができた。でも、その発言内容に関してはまさにその通りだったので、僕はバックミラー

越しに加賀さんに、「うんうん、と大きく頷いた。

「というか、今までのは状況の説明じゃなかつたのか……てつきりそなんだと。むしろこには鳥文字さんに代わりに話してもらつた方が効率が良いのではないだろうか もう窓の向こうの景色見てますよ。

「あー……そういうこと。なら最初つからそつと言えつづーのよ」  
そう頼んだつもりだつたんだけどな。案外物分り悪いなーこの人。僕の言い方が悪かつたのかもしないけど。あとハンドル離して手を打つのやめてもらえませんか。

「おねえ。分かりやすく例えるなら……RPGなんかでキャラのHPが0になつてまったく行動はできなくなつたんだけど、でもなぜか死んだ扱いにはなつてねーつていうバグが起きた、ってどこかしらねえ」

「？ あーるぴーじーで……えいちぴーが、なんですつて？」

「この人の分かりやすいが本当に分かりやすかつた試しは一度もないな。というより、むしろ分かりにくいんですけど。前半部分でもうついていけなかつた。

「だからRPGよ。ドラクエとかFFとかいろいろあんでしょ」

「あー、なんかそういう名前は聞いたことがありますけど。テレビゲームですね？ そういうのがなんか関係あるんですか？ 僕そういうのやつたことないんでよく分から」

「あんたマジで言つてんの？」

「は？ はあ、マジですが……」

僕はまた何か変なことを言つたんだろうか？ 車中に漂う雰囲気からほんの少し前にあつた幽霊発言の際の加賀さんを思い出す。

「あんた、確か高校生よね？」

「高校生？」

「そうですけど、と僕が答える前に、景色を眺めていたはずの鳥文字さんが僕に疑わしげな目を向けて呟いた。

「ええ、まあ。これでも一応高校生なんです、が

……鳥文字さん、僕のこともっと子供だと思つてたんですね……

ランドセルを背負つてないからさすがに小学生だと思われてはいなかつただろうけど。たまにいるからな、僕より背の高い小学生……

鳥文字さんは僕の回答に特にこれといった反応も見せず、また景色を眺める体勢に戻つた。あの、別に怒つてるわけじゃないですか？なんか、若干怖いんですが。

「高校生のくせにろくにゲームもやんねーなんて……そんなんでもう高校生面してられつわね」

僕の心配をよそに加賀さんがなんだか妙な言い掛けりをつけてくる。いやまあ、確かに僕の周りでもゲーム好きな人は結構いるけどれ……くせに、つてなに？

それに、完全にただの偏見ではあるけれど、どう考えたって普段そういうことをしないけど普通の高校生然としておられる方が僕の隣にもいらっしゃるのですが。

「鳥文字ちゃんだってゲームくらいすんでしょう？」

また僕の心の内を読み取ったのかどうかは知らないけれど、それに対抗するよつに加賀さんが無謀な賭けに出た。まったく、この人がするわけな

「しますよ」

すんの！？ なにこの裏切られた感。絶対しないタイプだろ、この人。

「ほら、やんでしょうが。今日びゲームやんねー高校生なんてあんただけよ

だけ、つてことはないと思いますけど……いや、でもこの鳥文字さんですら嗜むたしなむというのだから、本当にそれに近い、のかもしけない。

……ええ？ ホントに？ ホントにゲームするの？ この人が？ にわかには信じられないんだけど。

「あの、ホントにゲームなんかするんですか？ 鳥文字さん」

「……ゲームなんか？」

怖いってばだから。めちゃくちゃ怒つてらっしゃるよ。もー、それならそつと、あらかじめゲーム好きそうな感じをもうちょっと表現しといてくれないかな。

「ちなみに鳥文字ちゃんはどんなのやつてんの？」

「そうですね、最近では……と、たつた今まで怒り心頭だったのが嘘のように、鳥文字さんは加賀さんの問い合わせに對して平素の様子で答え始める。なんだよ、ゲーム大好きじゃん、この人。あの、このまま普段やつてるゲームの話になつたりしないでしちゃうね？」

「サラダの国トマト姫ですね」

「「なにそれ……？」」

僕と加賀さんがまつたく同じタイミングで思わず聞いた。なんと「……」まつたく内容が想像できないんだけど。まあ、少なくとも僕はゲームをしない人種だから分からなくて当たり前なんだろうけどさ。

「ご存知ありませんか」

「おねえ。それはちょっと知らねーわね」

「そうですか……」

すっげえ寂しそうですね！ なんなんだよこの人は……僕の中で築き上げてきた鳥文字さんの人物像がここに来て急速に壊れ始めているのですが。

「んで、ゲームなんかやる氣にもならねーって言うあんたは、じゃあ普段何やってんのよ？ 当然、さぞやこ大層なことをなさつていらっしゃるんでしょうねえ？」

加賀さんのニヤニヤしている顔がバックミラーに映つている。なんだつてこんなにアウェーな感じになつてているんだろ。

「何つて……これといって打ち込んでいるものはないんですけど……」

「はあん、何それ？ あんた学校から帰つたらひたすらぼーっとしてんの？ 怖ーわね」

「いや、そういうわけじや……僕の場合帰つたらまず食事の用意とか、家事をしなくちゃいけないんで。それが終わつて次に宿題やつ

たら一日が大体終わってるんですよ」

正確には家事は義務ではないのだけれど、と言つつかむしり、かあさんはそんなことをしている暇があるなら勉強しろと言つのだけれど、でも会社勤めをして家計を支えているかあさんに家事まで押し付けるのは、家族としてはどうにも居心地たぐいが悪い。それに、そんなことを言つ割にかあさんは異様に家事の類たぐいが下手なのだ。正直あの姿は見ていられない。

「家事い？ 健全な男子高校生が家帰つたらまつ先に家事つて。なにそれ？ あんた優等生？ あつたまわりーくせに。ますますひざーわねー」

僕そんなに悪いことしますかね？ 別に褒めてくれなんて言う氣きはさらさら無いですけど。でも、うざくはない、と悪づけどなあ……こや？ いや、ひどすぎるだ！ よくよく考えたら。頭悪いこと関係ないし。それに

「つてなんですかこれ！」

「つせーわねー。せめーんだからでかい声出すんじゃねーわよ」

加賀さんが例のめんどくせー、とこうの気配を丸出しにして抗議しきたけれど、そんなものは知ったことではない。

「だつて、ただの世間話になつてるぢやないですか。現状の説明はどうなつたんですか」

「はあ？ それもう終わったでしようが。あんたやつぱり全然人の話聞かねーわね」

「終……ええ！？ い、いつ？ いつ終わつたんですか？」

困つた時になぜか鳥文字さんに聞いてしまう僕だった。今回はちゃんと聞いていたつもりだつたんだけど、でも、僕だからな。普通に聞き流している可能性を否定できない。こついう時は第三者に意見を求めるのが……いつ見てもくれないよ。やつさんのことまだ怒つてるのかなあ。

「だから、ヒットポイントがゼロになつて死んだけどでも死んでねーんだつてば。何度も同じこと言わせんじゃねーわよ」

「だから、それ分かんないって言つたでしょ？」「

ヒットポイントつてなんだよ。ちつきそんなこと言つてなかつたじゃないかよ。そのポイント貯めるとどんな良いことがあるんですか！「ゲームなんですよね？」その例え。僕は普段ゲームしないって言つたじゃないですか。そういう例えで説明されたつてちひぱり分からないんですけど」

「んもおー、我ままな奴ねー。そんなのあんたがゲームやんねーのがわりーんでしょうが。それを人のせいみてーに言つてんじゃねーわよ」

「すいません……」

……なんで謝つてるんだ？「僕が悪い、のかなあ？ 教えても立場だからそんなに強くどひいは言えないけど。でも今は、なんか違う気が……」

はあ、と肩を落としてため息をつく。「どうがんばつてもこの人とうまく会話ができるない。この際僕も鳥文字さんみたいに景色でも眺めていた方がいいのかな、と思い僕はふと窓の外に視線を移す。

そして、目にした光景に、絶句した。

僕らが乗る車はしばらく前から高架橋と言つのか 高速道路のようなところを走つているのだけれど、その下に広がる街が、なんと言つか……おかしい。

「あの、加賀さん。聞きたいことがあるんですけど」

「また？ あんたほんといい加減にしなさいよ」「

「いえ、さつきまでのとはまた別の話です」

「じゃあなんだつづーのよ？」

前にいる加賀さんは僕を見ていないのでからそんなことをしたつて意味はないのだけど、でも僕は思わずそれを指し示して、聞いた。

「あれ、なんですか？」

ん？ と加賀さんは一瞬不思議そうな反応を見せたけれど、ああ、とすぐに僕の指したもの理解すると、顔をわざかにそちらへ向けて言った。

「穴でしょ」

確かに穴だつた。どう見ても、穴にしか見えない。でもあれはそんな風に その辺の道端にできた小さくぼみでも説明するような言い方で表現できるものじゃない。

端が、穴の向こう側が、見えない。それに底も。手前の端自体がここからそれなりに離れた位置にあるとはいえ、それでも僕らは今地上から何十メートルも上の位置にいるのだからかなり遠いところまで見渡せるはずだ。なのに穴の先には、やっぱり穴しかない。

あんなものが近所、とはいからまでも自分が暮らしている地域に存在してて知らないわけがない。でも、僕はあんなものの話を一度だつて聞いたことはない。多分、僕だけじゃなくて？誰も？なんだらうけれど。

「そういうことじゃなくて、なんであんなものがあるのかってことを聞いたんですよ」

「あんたはなんで私がそんなこと知つてると思つの?」

「なんでって、それはこつ……あれですよ。加賀さんはなんかすごい人なんですよね？」

「あつたま悪そうな表現ねえ。確かに少なくともあんたよりは物事知つてる方だとは思うけど。でもだからって私に聞けばなんでも教えてもらえると思われても困るのよね」

「じゃあ、加賀さんもあの穴のことは知らないんですか？」

「知つてるわよ」

……なんか回りくどいなあ。意図がさっぱり掴めない。

「私はあんたの親や先生じゃねー一つつてんのよ。なんでもかんでもそんな風に脊髄反射で人に聞いてねーで、少しは自分で考えたら？」

疑問符を浮かべていた僕に加賀さんは呆れたように説明した。それを聞いて僕は、なるほどそういうことか、とようやくこの人が言わんとしていることを理解した。

「めんどくさいんですね？」

「そういう言い方もあるわね」

加賀さんの言つとも一理あるとは思つけれど、でもあんな常識外れものは僕の手持ちの物差しでは計りうとこう氣すら起きない。要するに考えるのが面倒くさいとこうとか。人のことをどういつと言えなかつた。

「だいたい、なんこと聞いてどうしようつてのよ？　あんたがなんとかしてくれんの？」

「いや、そういうつもりでは、ないですけど……」

「さつきまではまあ、あんたに関係あることだつたからまだしも、あんなもんあんたに何の関係もねーでしょうが。ほつとおやいのよほつときや」

そう言われてしまえばその通りなんだけど、それでもあれを気にするなつていうのはかなり難しいんですが。あきらかに異常なんなもの。

「まつたくの無関係、なのですか？」

またも突然に鳥文字さんの発言。この人さつぱり興味なさそうな感じを出してる割には会話の内容をしっかり把握しているから侮れない。

「あー、まー、ほんのちょっとかすつてると言えばかすつてるけど。でもまあ、やつぱり関係ねーわね。なに？　鳥文字ちゃんもあれが気になんの？」

「あの穴そのものは気になりませんが、あれに対する周りの反応には興味があります」

……そうだ。言われてみれば、そうだ。確かにおかしい。  
普通すぎる。

百年前からそこにはあつたとでも言ひよひよ、周りがあの穴をまったく意に介していない。あれを除くすべてがただ日常を続けている。街の建造物をこそぎ落として存在しているのに、その姿が当たり前だと認識しているとしか思えない反応。

そこにあるのに、気付かない。それはまるで

「言つとくけど、全然ちげーわよ」

「はえ？」

思考に割り込まれるよくなかたちで加賀さんに断言されて、僕は妙な声を上げてしまった。しかし、僕の動搖などそれこそ何もないかのように一人は会話を続ける。

「私達の状態とは別なのでですか」

「そう、全つ然。残念だけど かどうかは知らねーけど、あれは意図的にそういう風にしてるだけ。対して鳥文字ちゃん達のは純然たる不具合だから。一緒にしたらあの穴に失礼ね」

「そうですか」

失礼つていうのはよく分からぬけど……今、なんかすごいことを

「そういう風にしてるって、そんなことでき いや、しちやつて大丈夫なんですか？」

「大丈夫つて、何がよ？」

「だつて気付かないつてことは普通にあの穴に落ちる人がいるんじや、つてことですよ」

僕らみたいな幽霊相手ならぶつかつたところで僕らが倒れる程度ですむから別に問題はないのかもしれないけど、あれは……

幸い今のところそういう現場を目の当たりにはしていいけれど、だからといって誰も落ちていないとということにはならない。むしろ、あれだけ広大な空白に気付くことができないのなら既に誰か、それにこれからもそうなることは避けられないと思うのだけど。

「ああ、その辺はまあ一応処理してるわよ。実際やつたのは私じゃねーけど」

「処理つて……あー、やつぱりいいです」

どうせ理解できないことを言われた挙句怒られるだけなんだろうなあ、と思い質問するのはやめた。人に害がないのなら、もうそれでいいような気がするし。

「私は何がどれだけ落ちようが別にいーでしょうが、つつったんだ

「 けどね」

「 そうですか……」

良くはないと思うけどなあ……大惨事でしょ、そんなの。もつともあの穴が空いた時点で既に大惨事ではあるのだろうけど。

僕は改めて街の真ん中に空いた巨大な空間を眺める。街をクツキーの生地にでも見立てて円形の型で抜いたような空き方をしている。本当に、何をどうしたらあんなことになるんだろうか？ 空いた場所にいた人達は、どうなったのだろうか？

……考へて分かることじゃないよな、やつぱり。それに、考へてみたら今の僕は人の心配をしていられる身分でもなかつた。

あれ？ そうだよ。僕、結局なんにも分かつてないじゃん。

「 はい！ はい先生！ 最後にもう一個だけ聞きたいことがあります」

それだけはどうしても聞いておきたかったので、特に意味はないけれど学校で先生に質問するように手を挙げて加賀さんに問い合わせた。

「 あんたは……私は先生じゃねーつづってんでしょうが……何よ？」  
加賀さんはうんざりした様子を見せながらも、質問には応じてくれた。

答えてくれる内容はまるで理解できないけれど、いつもやつて答えようとしてくれるのだから、この人案外面倒見が良いのかもしれないな。

「 加賀さんは僕らにどういう用があつて迎えに来たんですか？」

「 はあ？ それ言つてねーんだつけ？」

聞いた覚えない、ですよ？ と思いつつ僕は相変わらず鳥文字さんの方を見てしまつ。そして、相変わらず彼女は興味がないという風に外を眺めている。いや、なんで興味ないの？

「 まあ、なんつーの？ あれよ、あれ。あんたもそれくらい知つると思うけど」

「 あれ？」

と言われても、当然分かるわけもなく、僕は首をかしげることしかできなかつた。加賀さんも「えーと、あれなんつうんだっけ」と言いながら僕同様に首をかしげている。加えて腕を組んでいる。なんで隙あらばハンドル離しちやうのかな！ 思わずそう言おつ

としたら、加賀さんが馴染みの手を打つ仕草を見せて、言った。

「ああ。そう、捨て駒。捨て駒にしようと思ったのよね」

「……はあ？」

捨て駒って……僕の知ってるあの捨て駒のこと？ それで合つてるとしたらなんと言うか、ずいぶんと加賀さんの言い方が軽い気がするんだけど……僕が思つてるとは別に、なんかそういう表現があるのかな？

「捨て駒って、ええと、世間一般で言つあの捨て駒、ですか？」

「そ、捨て駒」

この人、捨て駒の意味分かつてゐるのかなあ……まあ、あれだ。とりあえず、面倒見が良い人説は保留といふことで。

「ここに、住んでいらっしゃるのですか……」

「何よ？　ずいぶんと不満そうじゃねーの。なんか文句あんの？」

「いえ、そういうわけではないんですけど」

僕らが加賀さんに連れてこられた場所、彼女が居住しているという高層マンションの前で、僕は口を開けたままその頂上を見ていた。ここで僕らにしてもう一つことがある、らしい。

それにも関わらず、何階まであるんだろう、ここ。敷地の面積もやたら広いし。入口自動ドアなんだなー。うわあ、奥になんかホテルのフロントみたいがあるんだけど。ついでに何人も警備員がいるし。とにかくすごい浮き方をしている。当然物理的にではなく、周りの環境から、という意味で。ここは首都の一等地ではなく、ありふれた片田舎の一角なのだ。農家と田んぼが点在しているような土地に建造されるものじゃないと思つ。日照権とか大丈夫なのか？

「なに、ほけえーっとしてんのよ。さっさと来いっつーの！」

普段まったく縁の無い世界を前にして半ば呆れていた僕を、既に入口に達しようとしていた加賀さんが呼んだ。当然と言ひべきなが、鳥文字さんは平然とその隣に立っている。

「はい！　今行きます。ちょっと待ってください待ってくださいって言ってんのに！」

加賀さんは僕の返事すら待つことはなく、早々に自動ドアをぐるうとしていた。あれが閉まりきつたら僕にはどうすることもできないつて分かつてやつてんのかな、あの人……分かつてやつてるよなあ、間違いないく。

「あああもう！」

野球選手がヘッドスライディングするような格好で入り口に飛び込み、なんとか自動ドアが閉まりきる前に中へ入ることができた。しかし、挟まっていたらどうなつていたんだろう……

僕がいまだ地べたで安堵のため息をついていた頃、加賀さんはそんな僕には一瞥もくれずに、おかえりなさいませ、と言つて礼をするフロントの人達に軽く手を挙げて応えながら、三基のエレベーターが並ぶホールへ向かつて歩いていく。

なんか、ものすごく恥ずかしいのですが。この分だと誰にもさつきの必死の行動を見られてないんだろうけど、それがなんかこう逆に、つらいな。こういう時、なにやつてんだお前、とか言つてほしいなーとか思うのは贅沢なんだろうか。

はあ、と今度は疲労感からくるため息をつきながら僕がようやく立ち上がって顔を上げると、加賀さんの隣で同じくエレベーターを待つ鳥文字さんが、なぜかこちらを見ていた。

……あの人も、僕がヘッドスライディングしてたところなんて見てないよね？ その割には、なんだか妙に視線が、冷ややかと言うか……僕が欲しかったのはこういうんじゃないんだけど。まあ、あの人はそんなこと知つたことじゃないでしょうけどね。

そんなことを考えながら僕がのろのろと歩き出した時、エレベーターホールの方で、ポーンという機械的な音がして、加賀さんと鳥文字さん、二人の前の扉が開いた。それを待つていた二人は、当然エレベーターに乗り込む。

僕は、まだ入口付近にいる。

あれ、もしかしてさつき鳥文字さんがこっちを見てたのはもうすぐエレベーターが来るから、さっさと来いつてことだつたの？ そうなの？ つて今頃気付いても遅いよ……ちつくしょう。もうやだ。「ぐ、お、おおおあああ！」

どうせ普通の人には聞こえないんだからもう知らん！ そう思い本能に従つて、叫びながら全力で手足を駆動させた。既に扉は閉まり始めている。一手の無駄、一瞬の躊躇も許されない。

と言ふかですね、人がこんなにも必死になつて走つてゐるのを見て眉一つ動かさないあの人はなんなの？ あの人は達にも見えてないの？ 見たくないものは見えないの？

「間、に、あ、う、ええええ——！」

間一髪というのはこういうのを言つんだな。僕は荒い息をつきながら、逆さまになつた視界にこれ以上ないといつほどの蔑みの眼差しを向けてくる一人の女性を収めて、そう思つた。

まあ、要するに扉が閉まりきる前になんとかエレベーターに飛び込んで、そのままの勢いで壁に激突した上に頭から床に落ちたら、一人が死ねばいいのにという日で僕を見ていた、つていうだけのことなのですが。結局間一髪でアウトなんじゃ……完全にアウト？ とりあえず天地が逆転した状態から復帰して、床に座り込んで乱れた息を整えていると、

「あんたには落ち着きつてもんがねーわけ？」

加賀さんが鋭い視線もそのままで心底呆れたという風に言つた。ちなみに鳥文字さんはとうの昔に僕のことなど見ていない。

僕は荒い呼吸を抑えて立ち上ると、加賀さんの日を正面からまっすぐ見つめ返して言つ。

「閉めるボタン押しませんでした！？」

加賀さんの問いは完全に無視して、まっさきに、走り始めた瞬間から言いたくて言いたくて仕方がなかつたことを口にした。どう考へても、扉閉まり始めたの早すぎだろ。

「そりや押すわよ。なんで勝手に閉まんのを悠長に待つてなきゃなんねーのよ」

「なんでつて……それは、その　すいません……」

こういう時に謝らない人になりたい。例え悪いのが僕だとしても、「とにかく、鬱陶しいから家ん中では大人しくすんのよ」

「善処します……」

間もなくして、つい先程聞いた忌まわしい電子音が鳴り、エレベーターの扉が開いた。現在の階層を示す表示を見ると、六十階最上階らしい。六十階ねえ……雲の上じゃないだろうな。

加賀さんはエレベーターを出た先で横に伸びている廊下を右へ進み、僕らもそれに従う。

廊下の左側、部屋のある方はただひたすらに壁が続いている。これが普通のマンションならそこにはいくつもの扉が並んでいるのだけど、ここには一枚も無い。

そして右側、外との境界には胸辺りまでの高さの塀と、その上から天井までを覆うガラスのような材質でできた壁がある。透明度が高く、通気性も考慮されているようなので閉じられてはいても閉塞感はない。雲はいつも通り上にあつたので安心した。

進行方向の先の突当たり、「三十メートルは離れた位置に扉が見える。逆方向の突当たりにも同じように扉。この階に入口らしきものはその一つしかない。

「こんなに広いのに一部屋しかないんですね」

「一部屋？」

「」を外から眺めた時のように、驚きを通り越して呆れ氣味に漏らした僕の言葉に前を行く加賀さんが何？ という感じで足は止めずに顔をだけをこちらに向かた。

「ああ、なんて言つんですかね、」うごうの。一世帯分？ なんですね、つてことです」

「いや、この階は一世帯よ」

「……なんですか？」

当たり前のように理解しがたいことを言われたので思わず聞き返す。一世帯って、この階には加賀さんとその家族しか住んでないってこと？

「だから、この階全部で一戸、一世帯分。下の方はもう少しあい細かく分かれてつけど」

「え、だってドアが向こうにもあるじゃないですか」

なぜか居住者の言つことを信じず、「反対側のドアを指し示して抵抗する僕へ、加賀さんは平然と言い放つ。

「出入り口が一つあるつてことでしょう」

「ええ……一つもござらないでしょう、そんなの。なんですかその謎の設計思想は。勝手口って感じでもないですし」

「なんですよ？ 帰つてすぐに向こう側の部屋に行きてー、って時にわざわざ家の中回り込んで行くのめんどくセーでしょうが」  
金持ちは発想も贅沢だな！ 回り込めばいいじゃん！ そう叫び出したくなるのは、僕の懐といつよりは心が貧しいからなのだろうか。

それにしても、こんな広大な面積をたったの一戸建てでどうやったらい使い切れるんだろう？ 書斎程度じゃ埋まらないよな、きっと。トロフィー飾る専用の部屋とか設定しないと無理だと思つんだけど。あとはすげに子沢山とか。全部この人のイメージにはそぐわないけど。

家の中は一体どうなつているんだろう、という少々下世話なことを考えている間に、僕らは扉の前にたどり着いた。加賀さんがジージのポケットから取り出したカードキーで開錠し、扉を開く。

「早速だけど、私はちょっとやんなきやいけねーことがあるのよ。だから、わりーんだけリビングで待つてて」

僕らが玄関に上がった途端、加賀さんは靴を脱ぎ散らしながらそう言つと、僕らの返事を待たずに廊下の奥へ消えてしまつた。せめてリビングがどこか教えてからにして欲しかつた。

「あーと、どうしましょう、か？」

僕が困つた時の鳥文字さん頼みを發動して彼女を見ると、鳥文字さんは転がつたままの加賀さんの靴を揃えようとしている最中だつた。しかし当然、ピクリとも動かない。きっと条件反射なんだろうなあ……らしいと言えばらしい気はするけど。

鳥文字さんは加賀さんの靴を揃えることは諦めて自身の靴を脱ぎこれは揃え、既に誰もいなくなつた玄関に「お邪魔します」と挨拶すると勝手知つたる我が家のように少しも迷う様子もなく、加賀さんは別の 玄関から向かつて左側へ伸びる廊下を進み始める。

「え、ちょ、待つてくださいよ」

鳥文字さんが視界から消えかけてからようやく、僕は靴を脱いでそれを適当に揃えると、慌てて彼女を追いかけた。思つた通りあの

人はまつたく待つていてはくれなかつたけれど、歩く速度自体は遅めだつたのですぐに隣に並ぶことができた。

「鳥文字さん、リビングがどこか分かるんですか？」

何の躊躇もなく進んでいく鳥文字さんに僕が怪訝な調子で聞くと、「分からないから探すのよ」

「というもつともな答えが返ってきた。はたから見た様子からはまったくその感じは伝わってこなかつたけれども。

「この家やたら広そうでしたから時間かかりそうですね」

まず、今僕らが歩いている廊下が異様に長い。でも、ぱつと見た限り当分の間ドアは現れそんない。おかげで今のところは迷いようがないけれど、ここを抜けた先に広がるであろう広大な空間を思うと気が滅入る。ほんとになんで教えてくれなかつたの、あの。人。

「広いと言つても限りはあるのだから、いつかは見つかるでしょう」達観してゐるなあ。こんなことで大袈裟かもしれないけど。でも、僕とそう変わらない歳のはずなのにこの差は……精神的には百年くらいは離されているんじゃないだろうか。

……あ、もしかして　まあ百年は言はずぎだとしても　鳥文字さんつて結構昔に死んだ人なんだろうか？　今時こんな真っ黒なセーラー服は見かけないし、言葉づかいとか立ち振る舞いもなんか微妙に古風だし、携帯電話の使い方知らないし、名前もなんか、アレだし……いや、あの名前は何百年遡ろうと無い氣もするけど。「あのー、まつたく関係ないですけど、鳥文字さんつて何歳なんですか？」

「十六よ」

「同じ年……ですと？　つて、あー、と言うか　まあ、死んだら数えないのか、歳なんて。僕は何がしたかったんだろう。

「それじゃあー、鳥文字さんの新仁<sup>さかのほ</sup>っていう名前は何か由来とかあるんですか？」

「……どうして急にそんなことを聞くの？」

「いつ死んだんですか？　という事柄はなんとなく気が引けて聞け

ない。かといって会話を始めてしまった手前そのまま黙るわけにもいかないので、とりあえず気になつていて要素その一を見ねてみた結果、睨まれてしまつた。

「いえ……特に意味は無いんですけど……珍しいなあと思って」「そう」

これ以上続けるつもりはないと言いつつに、鳥文字さんは僕を視界から外して前を向く。

……ううん、鳥文字さんは自分の名前嫌いなのかな？ これなら別にいいかなと思つて普通に聞いてしまつたけれど、なんか悪いことしたな。

僕が鳥文字さんの機嫌を損ねている間に、僕らは廊下の終点に到達した。一見ただの行き止まりに見えたそこには、左側の壁に出入り口があつた。ドアが部屋の内側に開け放されている。鳥文字さんはその中を覗き込むと今度はすぐに入つていくことはせず、入口を見つめたまま何かを思案しているようだつた。

鳥文字さんの前を横切つて、僕も中を覗いてみる。

妙に薄暗い。廊下同様窓が無いことに加え、こちらはその上照明の量が足りていらないように思う。一応、天井に等間隔に設置されているのだけど、その間隔が広すぎるので間に闇ができるてしまつていた。むしろ、暗闇の中に灰色の床が点々と浮かんでいるように見える。

そしてそれ以上に異質なのが部屋の内容、構造だった。部屋の端が分からぬくらい広大な上にその中には直方体状の柱？ のようなものがズラリと等間隔に並んでいる。

それは見た目は柱なのだけど、しかし柱だとも思えない。部屋の容積に対してそれらが占有している割合が高すぎるからだ。柱のようないのもの床面積は一畳くらいはあるように見える。それが人一人が通れる程度の間隔を空けて部屋中を埋め尽くしているのだ。

これらが柱だとすれば、部屋の中にほぼ柱しかないことになつてしまつ。天井を支える必要があるのは当然としても、その結果柱が

あるだけの部屋になつてしまつては本末転倒だと思つ。

……人様の家にあまりこんなことは言いたくないけど、いい加減にしろよ？

僕は必要以上に不気味な部屋から出ると、ちょいと思案を終えたらしい鳥文字さんの前に立ち現段階で最優先されるであつた事柄を告げた。

「じゃあ、そろそろお暇しまこじましょうか」

「玄関の扉開けられるの？」

「……えーと、どう、します？」

既に本日何度目になるか分からぬ鳥文字さんに丸投げタイムだつた。今朝会つたばかりの人っこまで頼ることになるとは夢にも思わなかつた。いい加減にするのは僕の方だつた。

「ここを通つてリビングに行く以外の選択肢があるとは思わないけれど」

「ええ……入るんですか？」

「入らなければ進めないでしょ？」

「それはそうですけど……」

てつくり脱出経路を考えているものだと思つていたのに。突入する気満々なんですか。

「ちなみに、さつきまで何を悩んでいたんですか？」

脱出経路ではなかつたとするとなんだつたんだろう。ふと思い返してみれば、この人が迷うの見たのは初めてのような気がする。「この中が普通の部屋には見えないから入つていいものかどうかを考えていたの」

「あー、なるほど……それで、入るという結論に達した根拠は？」

「ここまでは一本道だつた。かと言つて逆の方向はどこかに通じているような様子はなかつた。つまりここを通る以外に道が無いのよ。そんなところしつかり見てたんですか。やるなあ。そつか、安全性についてはなんにも考慮されていないのかあ。

理路整然とした回答にうん、うん、と頷いていた僕を見てすべて

の不安要素は解消されたと解釈したのか、鳥文字さんは前にいた僕の横を通り過ぎあの部屋の中へ入っていく。

僕はまた慌てて彼女について行くけれど、どうしたって恐怖を拭いたる」とはできなかつた。しかも今歩いている廊下　　というより広大な床の一部は狭いので鳥文字さんと並んで歩くことはできない。目の前にある彼女の背中が暗闇に消えていく、とこゝこを進む上で避けられないその瞬間に、どうしようもなく不安をかき立てる。

次の明かりの下に出た時、そのまま彼女が消えているのではない  
か、と。

その不安を少しでも和らげたくて、僕は思わず彼女の背中に声をかけた。姿が見えなくても、声が聞こえていればそこにはいると分かること。

「あのー、鳥文字さん？」

「……今度はどうしたの？」

「」に至る前に交わした会話を思い出したのか、嘆息交じりの声が返つてくる。ただでさえ視界が悪いのだから当然背中を向けたままの返事なのだけど、そこにはそれ以外の何があるような気がしてならない。

「うむ。ですがに今回は失礼のないようにならないとな。単に話をしたいだけで内容なんてどうだつていいのだから、当たり障りのないことこの上ないものでいい」。

「ええと、鳥文字さんは怖くはないんですねか？」の部屋

「怖い？」

聞こえてきたのは、予想外のことを聞かれた、という様子の予想外の返事だった。かなりタイムリーな話題だと思つたんだけどなあ。「あまりこういうこと言つもんじやないかもしませんけど……どうひいき田に見ても氣味が悪いと思つんですが、」

「確かに、言われて見ればそんな氣もするけれど」

「特に気になりませんか……」

言われて初めて気付くレベルからは大きく逸脱していくと思つた  
ですが。そうですか。

「僕は……正直ものす”怖いですけどね」

とつせに思つたことは口に出さず、ここに入つてから切実に感じ  
ていることだけを伝えた。あえて言つことでもない気がするけど、  
無言になることは避けたかった。怖いから。

「人が普通に生活している場所なのだから怖がる必要はないでしょ  
う」

鳥文字さんはやはり背中を向けたままなのだけど、それでも  
何を言つているんだお前は、といつ氣配が伝わってくる。きっと本  
気でそう思つてるんだろうな。

「いや、でもこの空間に限つては人が生活している氣配は無いよう  
な気がしますけど……どちらかと言えば人以外の何かがいるような  
感じが」

僕がそつと言ひかけた時、鳥文字さんが、碁盤の目のように区切ら  
れているこの部屋を、だけど一度も曲がることはず、入口か  
らまっすぐに進んできた彼女が、立ち止まった。

「？ どうかしましたか？」

照明の下で待つ鳥文字さんに僕も自然に足を止めて問いかける。  
「……なんでもない」

彼女は一瞬何かを言ひかける仕草を見せたけれど、結局それを言  
うことにはせずに、ただ一度だけ、きゅつ、と左手を握り締めると、  
再び前を向いて奥に進み始めた。

え？ なに？ どうしたの急に。説明はしてもらえないんですか？

あー、もしかして、お前自体が人以外の何かの同類だらうが、と  
いうようなことを言おうとしたけれど、つまらないことに巻き込ま  
れたくないからやつぱりやめようとかそういうことを思われたので  
すか？

あれ、なんか、恥ずかしい、な……別にウケを狙つてあんなこと  
を言つたわけじゃ。すげえ寒い奴だと思われただらうか。まあ、そ

そもそも面白い人間だつていう自負があるわけじゃないから、別にいいけど。でも今のはなんと言つか、事故なんですよ？

「こうなしか歩く速度を上げた氣がする鳥文字さんに置いて行かれないよう、足早について行くと、しばらくしてまたも彼女が立ち止まつた。

また何かあつたんですか？ そう聞こうとして、だけど聞けなかつた。今度は僕ではなく、左へ続く空間をじっと睨んでいるから。その様子はさつきとは違い、何かを警戒しているようだ。

「今、何か……人影のようなものが」

「うわ……ちょ、やめてくださいよ。そういう」と言うの「の」この状況で一番言っちゃいけないことですよ。何のために怖い宣言したと思ってるんですか。

「いざという時のために心構えができた方がいいでしょ？」

「……まあ、そういう考え方もありますけど」

一応全部踏まえた上で、この人なりの親切だつたのか。完全に裏目ではありますけどね。間違いなく今まで恐怖が増大していますから。

「出会い頭に悲鳴を上げでもしたらこの家の方に失礼だもの」

別に僕の心配をしてくれていたわけではなかつたのですか。そうですか。

「確かに怖いとは言いましたけど、でもさすがに悲鳴を上げたりはしないと思いますけどね。僕だって一応男ですし」

「それならいいのだけど」

鳥文字さんはそう言つと、何事も無かつたかのように正面に向かつて歩みを再開する。

「……いや、信用してない感が筒抜けすぎません？ それならもういつそ「ああ？ 調子のんなよヘタレが！」とか言ってくれた方が清々しいのですが。絶対言わないだろうけど」

にしてもこの人、自分で人影見たって言つてたのにその後何も気にならないんだな。そりゃもう通り過ぎてるっていうのもあるんだろ

うけど、完全に前しか見ないもんなん。

それに引き換え僕はといえば、口ではさやかな抵抗を試みていたものの行動はどう見ても拳動不審になつてた。

部屋の奥の闇をびくびくしながら覗き込む。後ろに誰かいるかも、と急に振り返る。かと思えばその間に暗闇の中に鳥文字さんを見失い、小走りで追いかける。

そんなことを繰り返している間に、僕らは部屋の端までたどり着いた。

密かに、まっすぐ進めばそのまま通り抜けられるかも、と思つていた僕の期待はあつさりと裏切られ、そこには壁が立ちふさがつているだけだった。

「困りましたね……」

鳥文字さんが僕と同じことを考えていたかどうかは分からぬけれど、当ても無くこの部屋の中をうろつくるとこのは避けたい事態だつた。人影騒ぎもあつたし。

「！」の壁伝いに歩いていけばいつかは抜けられるでしょう

……なんなんですか、その一切揺れない心は。そりや部屋の外周をぐるりと回ればいつかはどこかに出るだらつけど、この環境でよくそんなことを平然と。

自身が言つた通り壁伝いに、あえて人影を見たといつ左へ歩き始めた鳥文字さんを追いかけようとしたその時、僕はギザギという鈍い音を耳にした。

思わず足を止め音のした方を見る。それは部屋の奥の暗闇からでも、鳥文字さんが立てた音でも、当然僕が立てた音でもなかつた。壁からだつた。さつきまで向かい合つていた壁、突き当たりだと思つていたその壁の一部がドアのように部屋の外側へ開いていきそこから溢れんばかりの光が注ぎこまれてきて暗闇から突然に強い光の下へ出て視界が狭まつて目を凝らしていると急に腰の辺りに何かがぶつかってきて

「ひいああああ——！」

それはもう情けない悲鳴を上げて、僕は床に手をつぐ」ともできず尻餅をついていた。

「あ、あの、ごめんなさい。大丈夫ですか？」

聞きなれない声に僕が恐る恐るまぶたを上げると、見た目七、八歳くらいの男の子が心配そうに僕の顔を覗き込んでいた。そして、鳥文字さんもすごい目でこっちを見ていた。

「え？　あー、うん。大丈夫、かな」

とりあえず鳥文字さんのこととは見ないようにして男の子に返事をする。

まだ動搖が残っていたから多少拳動におかしいところがあつたかもしれないけれど、大丈夫という点に嘘はない。まあ死んではいるんだけど。でも、そのおかげと言うべきか、せいだと言つべきか幽霊状態になつてからというもの苦痛というほどの刺激を感じなくなつた氣がする。心が痛いことは沢山あつたけど。

「えつと、本当にごめんなさい」

男の子が僕に対して頭を下げる。ソレまで恐縮されるとなんだか、すごく申し訳ない。

この子は確かに僕にぶつかりはしたけれど、それは人が倒れるような強さではなくてむしろ軽く触れた程度だった。要するに僕が倒されたのは僕が自分で思つていた以上に　駄目だつたというだけだ。うん。案外大丈夫じゃないかも。

「いや、気にしないで。僕もぼけーっと突つ立つてたしさ」

僕がひらひらと手を振つて怒つたりはしていないことを伝えると、男の子は、はいと頷いてから僕と鳥文字さんに一礼して、暗い部屋の中に消えていった。

「うん、とつさのことで聞きそびれたけどあの子、加賀さんの家族なんだろうか？　あの人の子供にしては大きい気がするけど。というかあの人に子供がいるとは思えないけど。

あの子が向かつた方を見つめながらそんなことを思つていると、鳥文字さんがすごい目で僕を見る止め、男の子が入ってきた

入口の前に立ち、中の様子をうかがっていた。

「リビングに着いた、みたい」

隣の空間を眺めながら鳥文字さんが呟いた言葉に、僕は耳を疑つた。

いやいや、こんな隠し扉みたいなものの向こうにリビング？ こんなのがあの子が入つて来なきや絶対気付かなかつたよ？ いくつもある出入口の一つで、その中でも特殊なものということなのだろうか。だとしても壁と同化させる意味は分からぬけど。

鳥文字さんを疑いたくはなかつたけれど、そんな生活に密着した部屋がこの先にあるということはどうにも信じ難かつたので、僕は壁と鳥文字さんとの間から顔だけを覗かせて向こう側を見る。

そこには、やたら見晴らしの良い、物が一切置いていない空間が広がつていた。僕の感覚ではそれが本当にリビングなのかどうかは判断しかねるけど、ここと違ひ床がフローリングになつてゐるのはまあ、それらしいという氣はする。明かりも十分にあるし。壁は遠すぎてよく分からぬけど、コンクリート剥き出しつてことはなさそうだ。

むう……リビング　なの、かなあ？ そう見えなくもないけど、物が何も無いつていうのがなんか生活感に欠けると言つか、空き家みたいだな。まあ生活感なんて言つ出したら、今いるこの部屋の方がはるかにひどいんだけど。

「行きましょ」

今いる謎の部屋が謎の出入口によりリビングと直結していることにいささかの疑問も感じない様子の鳥文字さんは、僕に一瞬だけ視線を戻してから隣の部屋に踏み込もうとする。

「あ、ちょっと待つてください」

「……どうかしたの？」

ゴールを目前にして動かない僕を鳥文字さんはやお馴染みとなつた　何をやつてるんだお前は？ といつて射抜いてくるのだけど、僕はそれを真っ向から受け止める。

言わなければならぬことがあるのだ。たつた今、不意に気付いてしまつたこと。

「さつきの腰が抜けて立てません」

……人間というのは、度を越えると無表情になるものなのだろうか？

「えーと、そういうわけなのでですね？ 手を貸していただけるとありがたいかな、なんて思つてゐるのですけれども……」

鳥文字さんにはうらしさが戻つてきたのを見計らつてから、意表を突いて逆に助けを求めてみたりしたのだけど、彼女は微動だにしない。

あ、これは本当にまずいかもしない そう思い始めた頃、彼女はようやくかけるべき言葉が見つかつたといつよつに、長い間を置いてから重々しく口を開いた。

「……男のくせに情けないわね」

「……面白いです」

鳥文字さんから頂戴した非の打ち所の無いお言葉に、僕は思わず頭を垂れた。無論恐ろしくて彼女を直視できないからだ。直視どころかむしろ視界にすら入らないように思いつきり目を背けている。できることなら僕が彼女の視界から消えたいけどそれができるならそもそもこうはなつていなかつたわけでああもういいやぢつでも。「どうしたのー？」

突然、このいたたまれない空氣を打ち碎くよつた気の抜けた声が聞こえて、僕と鳥文字さんは同時にその声がした方を向く。

見れば先程男の子が入つてきた入口に人が立つていた。一見して若いサラリーマンという風情の、落ち着いたスーツで身を固めた青年 というのか二十代半ばくらいの男性だ。

その人はしばしの間驚いたように僕らを交互に見比べ、その後悩ましげに眉間に皺を寄せ顎に手を当てて、うつーん、と唸つた後、

「ええっとー、こういう時はー」

何か思ひついたようにそう言つて、背広やズボンのポケットを探

り始めた。

「あのう、あなたは……あーいや、その前にまず僕らは  
「んー？ ちょっと待つてくれない？ とりあえずやつておきたい  
ことがあるからさー」

はあ、と生返事をする。まずは僕らの素性を明かすのが無難かと思つたけれど、あつさり中断されてしまった。見れば鳥文字さんもどう対処したものかと思案しているようだ。

まあ多分、加賀さんの知り合いとか友達とか家族とかなんだろうから危険は無いと思うけど。さすがになんの話も聞かされていないことはないだろうし。いやでも、そもそも加賀さんが僕らに危害を加えないと決まつたわけじゃないんだよなあ。思い返してみればあの人、僕らを捨て駒にするとか言つてたしなあ。

急に不安になりつつ、それにしてもこの人はさつきから何をしているのだろう、と訝しげな視線を送つていると、彼はようやく手を止めて「あー、そつか」と言つてから何かを思い出したように続けた。

「充電してるんだった」

そして「電話電話ー」と、ビニカ楽しげに口ずさみながらリビングに戻っていく。

「通報しないでもらえます！？」

危険人物じゃありませんように、と思っていた人から完全に危険人物だと思われていた。  
え？ この人、加賀さんに関係してる人じゃないの？

「いやー、『めんねー。早とちりしちゃって』  
スーツ姿の男性、清寺耕四郎さんがちやぶ台の向いに立てて  
にお茶を淹れながら、改めて僕らに謝る。

別に謝られるようなことをされたわけでもなかつたので、僕は「  
いえ、こちらこそ」というよく分からぬ返事をしながら今の自分が置かれている状況を考えていた。

鳥文字さんはと言えば、僕の隣できれいな姿勢で正座をして、相当遠くにある窓から外を眺めている。

あの謎の部屋の隣に位置するリビング、らしき部屋。この何も無いと思つていた部屋の一角にはなぜか六枚の畳が敷かれていた。僕と鳥文字さんはあの後、清寺さんに案内されこの疑似六畳間とでも言つべき場所の中心に置かれた小さな机やぶ台を囲んでいる。

ここにあるのは 日焼けした畳。あまりにも四角いテレビ。ぐすんだ色をした茶だんす。金属感丸出しの扇風機。ダイヤル式の黒電話。等々、時代がかつた物しか置かれていない。まるで昔のテレビドラマに出てくる安アパートの一室でも再現したかのような佇まいを醸し出している。

ちなみに何故これらが隣の部屋から確認できなかつたのかと言うと、出入り口のあつた壁に沿つて配置されているから視界に入らなかつた、というだけだ。

どうせならこんな端っこではなく、もつと真ん中の方に置けばいいのに、と思って聞いてみると、テレビ等の電源コードがコンセントに届かなくなるから、という非常に分かりやすい回答をいただいた。ただ、このテレビが電力を得たところで正常に機能するかは疑わしい。

なんと言つのか、世の中に这么う無駄遣いの仕方があるんだなあ、と感心してしまつた。自分がこうなりたいとはまったく思わ

ないけれど。

「それにしても、ハルちゃんもひどいねー。自分でここまで案内してあげればいいのに」

「清寺さんが嘆息しながら僕らの前にお茶の入った湯呑みを置く。確かに、やることがあるからって言つてましたけど」

「ふーん？ なんだろ」

「あえて確認しないけど、ハルちゃんって加賀さんのことですよね？ なんか、そう呼んだら殴るとか言われた気がするけど、あれはつまり清寺さん以外がそう呼ぶことを許さないってことだったんだろうか。ふうむ、この人達どういう関係なんだろ？」

「鳥文字君は何かお気に召さないことがあるのかな？」

「いえ、そんなことは ってなんで僕に聞くんですか」

出された湯呑みに手を添えてそれをじっと見つめている鳥文字さんを見て、清寺さんはなぜか僕に彼女の機嫌を尋ねてきた。やめてくれませんかね、そういうことするの。

「いやー、なんか本人に聞いたら怒られそうな気がしてさー」「そう思つなら僕を巻き込むのは じゃなくて、大丈夫ですよ。

怒りませんよ。そんなことで……いや、まあ多分ですけど

「そうなの？ ずっと無言だから機嫌悪いのかなーって思つてたんだけど」

「必要なこと以外はあまり口にしない人なんですよ。鳥文字さんはいいや、どう考へても本人を前にして交わす会話ではないだろ、これ。

「大体、僕だつて鳥文字さんは今日会つたばかりでどういう人がなんてよく分からぬのだから聞かないで欲しい。怒られたくないから。手遅れな気もするけど。

「せっかく淹れたお茶も飲んでくれないしさー。これは兎川君もだけど」

「それは……僕らは飲みたくても飲めないですから」

「……あー、あーーー、なるほど。そつか、忘れてたよ。『めんど

めん」

そう言つて、清寺さんは僕らの前に置かれた湯呑みを自分の所へ引き寄せた。

今思うと鳥文字さんは一応あのお茶が飲めるかどうか確かめていたのだろうか。僕なんかは最初から試す氣にもならなかつたけど。律儀な人だなあ。

「うーん、でもこうして改めて見るとなんだか……」

清寺さんが唐突に真剣な顔をして腕を組み、じつと僕と鳥文字さんを見比べる。会つたばかりだけど、この人がこんな表情を見せるのは意外な感じだ……どうしたんだろう?

「お化けみたいだよねー」

「うふふ、と楽しそうに笑う清寺さん。僕がこういうことを言って加賀さんに散々馬鹿にされたことは黙つておいた方がいいんだろうな。というか不謹慎だなこの人。

はあ、と呆れ気味の生返事をする僕をまつたく氣にした様子も無く、清寺さんは「そう言えれば兎川君はさー」と、気さくに話しかけてくる。まあ、完全に口を閉じて瞑想でもしているかのような鳥文字さんに話しかけるのは、ハードル高いですね。

「なんで死んじゃつたの?」

あー、それ聞いたやうなんだ。別にいいけどさ。今までのこの人の感じからすればあまり驚きもしない。でも、自分の意思で死んだみたいな言い方はやめて欲しかつた。

「包丁で刺されたんですよ。後ろから、こう、胸の辺りを

「うわー……なんで?」

「なんで、って言われても……なんででしょ?」

恐らくは、本来そうしたい人と間違われた、のだろうけど。実際なぜそうなったのかは僕にも分からぬ。じついうことはされた人ではなく、した人に聞いてもらわないと。

清寺さんは僕の要領を得ない答えに「ふーん。そつか」と曖昧に頷くと、自身の後ろにあるテレビに向き直つて電源スイッチを入れ

た。あれ、ちゃんと動くのか？ という僕の心配をよそに、テレビの画面はブツンという鈍い音を立てて明るくなっていく。

にしてもこの人、自分から始めた話に興味失くすの早いなあ。まあ僕自身、掘り下げたい話じゃないから引き止める気はないけど。特にすることもないので僕も何気なしにテレビを見始める。そこには少女が背を向けた男にもたれ掛かっているところを後ろから撮った画が映っている。

今の時刻を把握してはいけど見た感じから、昼ドラかなんかかな？ と思って見ていると、少女が男から離れ、それと同時に男は地面に崩れ落ちた。そして、わずかに身体を震わせている少女が言った。

『シ、シンヤが悪いんだから、ね。シンヤが、私を裏切つたりするから、だから……』

……なんか、少し前に聞いた覚えのある台詞だなあ。

背筋に冷たい気配を感じつつ、淡々と続していく映像を見ていると、それはやはりと言つべきか、僕の知っている内容だった。

間違いなく、僕が殺された時の映像、ですね。

……なんなんだよこの見た目に反しまくったハイテク家電は。一體どういう原理だ。

「んー、これってつまりー……痴情のもつれ？」  
「違います……」

「あれ、そうなの？ でもなー、これはどう見てもなー」

僕の残念な遺言シーンの前に映像が砂嵐みたいになってしまったのだから、そう思われても仕方がないのかもしれないけどさ。でも良く思い出してくださいよ。

「僕、最初に名乗りましたよね、一応。僕の名前覚えてないですか？」

「いやー、覚えてるよ。兎川君もハルちゃんなんだねーっていうやり取りしたし。でも、友達からはシンヤってあだ名で呼ばれてるのかなーって」

「呼ばれてませんよ。友達には大抵　まあ、普通の呼ばれ方されますから。遙とか」

「そつかー……ん？　じゃあー、なんであの子にはシンヤって呼ぶてたの？」

「だから、間違えたんじゃないですか？　そのシンヤ君と僕を」  
これを聞いた途端、清寺さんはちやぶ台をバンバン叩きながら体を震わせた。分かりやすく言い換えるなら、大爆笑している。ちくしょう。

清寺さんを見るのに耐えかねて、ふと視線を隣に向けると、鳥文字さんと目が合った。

「……あの、今全部見たり聞いたり、してました？」

「ええ」

彼女は眉一つ動かさずに答える。瞑想してると思つてたのに。思つてたのに！

「そうですか……」

いいけどね。どうせもう鳥文字さんの僕に対する評価に下がる余地はないだろうから。

「さーて、じゃあ次は鳥文字君のをー」

人違い殺人事件にはもう飽きたのか、清寺さんがまたテレビと向かい合いダイヤルのようなものを回し始めた。口振りからすれば今度は鳥文字さんが死んだ時の映像が

「痛あつ！　いや痛くない。痛くないけど……え？　ちよ、なにこれ？　鳥文字さん？」

テレビに再び何がが映ろうとした時、僕は鳥文字さんに顎を掴まれて強引に明後日の方向を向かせられた。思わず痛くもないのに痛いとか言つてしまふほど突然に。

「あー、確かにこれは見ない方がいいかもねー。うん、鳥文字君はやさしいなー」

それって、鳥文字さんは僕に自分が死ぬところを見せたくないかつたつてこと？　まあ、よくよく考えてみれば僕も人が死ぬところな

んて好んで見たくはないけれど。

「テレビを消していただけませんか」

「そだね。余計なことして『めぐね』

電源を入れた時と同じブシンという音がして恐らくテレビの映像が消えてから、鳥文字さんはよつやく僕の顎を解放してくれた。うん、前を向けるって素晴らしい。

「それにしてもセー、鳥文字君はびりして電車に立ち向かおつと困つたの？」

「……台無じじゃないですか。何のために鳥文字さんが　え？」

電車……電車？」

戦車じゃなくて？ 確かに電車つて聞こえたけど……まあ、いくら戦時中でも女生が戦車と対峙するシチュエーションはないか。ううん、なんか、思つてたのとだいぶ違うな。

僕と清寺さんが互いに相手の言つていることが理解できないという顔をして向かい合つ。そうしてしばらく見つめ合つた後、僕らの視線はある一点に向かつた。

「……私にどうして欲しいのですか？」

「いや……えと、もう聞いてしまいますけど　鳥文字さんは電車でその、なんですか？」

「ええ」

「そう、ですか……あの、ちなみにそれは、いつ頃のことですか？」

「今朝よ」

「今朝！？」

あれ？ あれ！？ いや、そりゃあ、僕が勝手に思つてただけなんだけど、さ。じゃあ、じゃあさあ、おもいつきり今の入つてことなの？ 鳥文字さん。ええ、今時こんな人いるかなあ。んんん、でも実際いる、んだしなあ。

「そんなに驚くようなことかなー？ 鬼川君だつて今朝でしょ？」

「え？ ええ、そうですね。なんか、いづれ、なんででしょうね？」

あはは

今度は僕が一人の視線を一身に受けることになった。なんだこいつ、という視線を。

「そうか、昔の人じゃなかつたのか……あ、そういうえば今思い出しあげど、鳥文字さんはゲーム好きだつて言つてたんだ。そんな昔にゲームなんてあるわけないんだから、そつじやん。なんで昔に死んだ人だなんて思つたんだろ。」

「でー、でー、鳥文字君対電車の理由はー？」

「ああ、この人まだこの話する気満々なんだ。さつきまで怒られそうだとか言つてたのに。」

「寝惚けていたので」

「鳥文字さんも普通に答えるんですね。いやちょっと待つて。何それ？ どんな状況？」

「あの、寝惚けて電車に立ち向かつたつて……どうこいつことですか？」

「聞いていいものか迷つたけれどあまりにも気になつたので 僕も人のことは言えず 結局聞いてしまつた。さっぱり見当つかないんだけど。鳥文字さん、どこで寝てたのさ。」

「あの駅で電車を待つている時にうとうとして、気がついたら線路の上にいただけ」

「……いや、そんなこと……あります？」

「実際そうなつたのだから仕方がないでじょう」

「人違ひの人に言われたくないよねー」

「……でしたね」

「考えてみれば僕は人のことをどうこう言える立場ではなかつた。清寺さんにどうこう言われる筋合もないとも思つただけど。」

「ハルちゃん来ないねー。忘れてんのかなー」

僕らが死に至つた要因を聞き終わつてからしばらくした後、清寺さんはいかにも退屈だという様子で後ろ手に体重を預け、天井を仰いだ。

僕はその姿を見て、どうせ暇なつ今度はこの人に僕の話に付き合つてもらおうと思つた。

「あの、清寺さんに聞きたいこと と言つたか教えてもらいたいことがあるんですけど」

「なーに?」

「僕らつて、なんでこいつなつちやつたんでしょうか?」

「んー? ハルちゃんは教えてくれなかつたんだ」

「いえ、説明してはもらつたんですけど、何一つ分からなかつたので」

「なるほどねー、ハルちゃんは言葉が足らないとこがあるからなー  
そういう問題ではなかつたよつた気がするけど。まあいいや、言つても始まらないし。

清寺さんはしばらく腕組みをして「うーん、なんて言えばいいんだる」とちやぶ台の中心を見つめてから、ふと顔を上げて言つた。  
「神様つていると思う?」

この人はこの人で説明下手なのではないか、といつ氣がすくして  
てきた。

「さあ……いない、と思いますけど……」

「それがねー、残念ながらいるんだよねー」

別に残念ではないと思つただけど。いふと何か不都合なことがあ  
るのだろうか。

「昔々あるところに神様がいました」

ええ……急に昔話始まつちやつたんだけど。なんで? なんで神

様の話なの？

「神様が暮らす世界はこことは別の遠い遠いどこかで、そこは……んー、なんて言えばいいんだろ？ うん、数え切れないほど沢山の本が並んだ図書館のようなところでした。この図書館の本には、あー、世界の……なんだろ、決まり、約束事？ のすべてが書かれていて、退屈だった神様は来る日も来る日もそれらの本を読んで過ごしました。しかし、数え切れないとは言つても限りはあるもの。ある日、神様はどうすべての本を読み終えてしまったのです。神様は困りました。このままではこれからずっと退屈な毎日を送らなくてはなりません。神様は退屈しないですむ方法を考えました。考えて考えて考えて、そして遂に一つの答えを見つけたのです。今まで読んできた約束事を元に別の世界を創り、それを眺めることにしよう、と」

すつごい見られてる。まあ、僕に向かつて話してるとだから当然といえば当然だけど。

「ここまでいい？」

「いいくつ……はあ、まあなんとか。話の筋くらいは話の意味はまるで分からぬけど。

「神様は自分の世界を創るための領……うーん、世界の元となるラクガキ帳を図書館の本棚の中に加えました。？創造の秩序？と名付けられたこのラクガキ帳は　あ、僕らが勝手にそう呼んでるだけなんだけどね？　えーと、このラクガキ帳にはそこに書かれたことがその通り形になる、という力がありました。神様はこの力を使って新しく世界を創り、それを眺めて過ごすことにしました。しかし、それからしばらく経ったある日、神様のところへもう一人の神様がやつて来て、そんなことをしてはいけない。そのラクガキ帳を捨てなさい、と言いました。図書館では本棚に勝手に本を足することは禁じられていたのです。ですが退屈に戻ることを嫌つた世界を創つた神様……あー、長いから悪い神様ね？　悪い神様はもう一人の

神様 善い神様の言うことを聞きません。考えの合わない二人は

とつとつ喧嘩を始めてしました。が、お互に触れることがで  
きない彼らは、ただ言いたいことを言い合うことしかできません。

二人が言い争いに疲れた頃、悪い神様がある提案をしました。それは、このラクガキ帳で創った世界にお互いの駒を置いて、それを使って勝負をしよう、そして負けた方は勝った方に従う、というものでした。善い神様は規則を破つて存在するラクガキ帳を使うことをためらいましたが、このままではどうにもならないという思いから提案を受け入れることにしました。こうして世界に？混沌の御使い？と？理法の眷属？というそれぞれの神様の僕（ライティス・レイス）が生み出され、彼らは決められた通りに日々争いを繰り返しました。そして時は流れ、多くのイーヴィル 悪魔でいいかー、もう悪魔と天使で、悪魔と天使が現れては消えていきました。しかし、決着がつく気配はまったくありません。戦況はいつも一進一退の連続だつたからです。まるで意図的にそうなつているかのように。時間が経つにつれて悪魔も天使も次第に疑いはじめました。神様達はただ楽しんでいるだけなのではないだろうか、と。悪い神様はもちろん、咎（咎）めたはずの善い神様も結局は退屈で、最初はどうであれ今となつてはもう悪い神様と同じように楽しんでいる、そう思つようになつていきました。そうして悪魔と天使はだんだんと戦うことが馬鹿馬鹿しくなつてきましたので、彼らは争うことやめました。めでたし、めでたし「めでたいですかね！？」

なんか最後の方ぐだぐだな感じがしたけど

「平和になつたじゃない」

平和といふか……めんどくさくなつて全部放り出しただけのよ  
な気が でも、うん、争つてるよりかはいい、のかなあ？ ジヤ  
なくて

「あの、結局なんで僕らが幽霊みたいになつたのが全然分からな  
いんですけど」

「あー、そういえばそんな話だつたねー」

忘れてたんですか。結構なボリュームの話をされてましたけど、あれがまったく関係ないってことはないですね？

「とりあえず、今の話を踏まえた上で……そうだねー、デジカメつてあるじゃない。デジタルカメラ。あれをさつき言ってたラクガキ帳だと思って欲しいんだけどー、デジカメで写真撮ると中にデータができるでしょ？ それがラクガキ帳に？元？を書いた状態だと思つてね。でー、その撮った写真をプリントアウトするのが？元？から僕らが今いるこの？こつち側の世界？を創るつてことになるのかなー」

「はあ

またよく分からぬ話になつてゐる気がする。さつきの話が無関係じやないのは素直に嬉しいんだけど。でも、それも理解できないと意味ないしなあ。

「でね？ その？元？と？こつち側？の関係をデジカメで説明するとー、デジカメで撮つた写真 例えば赤いりんごを撮つたとしてー、それをプリントアウトします。そしてその後データ側のりんごの色を赤から青にしちゃつたとするでしょ？ まあ、この際方法は置いておくとして、変えちゃつたとする。そうするとー、プリントアウトした方のりんごの色も青になつちゃうの。これは逆もそうでね、プリントアウトした方を変えた場合も、それに合わせてデータの内容が変わるんだよねー」

「ええーと……要は、二つは対になつていて常に同じ状態になる、といふことですか？」

「そうこうことなのです」

まあ、なんとなくは分かつたけど……やつぱり関連性が分からなかい。

「さあー、これで兎川君と鳥文字君がどうなつてゐるのか分かつたかな？」

「いいえ

「張り合ひないなー。もつと考えてよー」

「そう言われても……」

今まで分からぬといけなかつたんですか。どう考へても必要なページが足りてないと思うんだけど。それも圧倒的に。

「私達はラクガキ帳の中だけの存在になつてゐる、とこりうことですか」

「おー、鳥文字君、正解！」

待つて――――！ 置いていかないで――――！ するこよ。あんな説明で何で分かるの？　だいたいどう見ても全部聞き流してるようにしか見えなかつたのに。いつも急に参加して来るんだもんな。

「全つ然分からんんですが……」

何の臆面も無く全面降伏を表明する。正解が出た後ですら微塵も見当がつかないのだから、それも仕方がないだろうと思つ。

「うーん、さつきの例えで言うとー、そうだねー、プリントアウトした方をビリビリーッと破かれちゃつたんだけど、デジカメの中ではそのままデータが残つてる状態、って言えばいいのかなー。だから、一人は今ラクガキ帳の中でだけ動いてるんだと思えばいいと思うよ」

「え、でも、デジカメの写真とプリントアウトした写真は同じ状態になるつて言つてたじゃないですか。なら、プリントアウトしたやつが破れたら中の方も　　その、壊れるんじゃ……」

さつきの話と今の説明の辻褄つじつまが合つていない。どうこうこと？

「本来はそつなるはずだつたんだけど、今回はちょっと事情があつてそつはならなかつたんだよねー」

「じゃあ、特殊なケースなんですか？　これつて」

「そつだねー。僕が知る限りではこんなこと初めてじやないかなー」

そんな貴重な体験だつたんだ、これ。全然嬉しくはないけれど。

「でも、なんで僕らに限つてそんなことになつたんですか？」

「いやー、別に兎川君と鳥文字君が特別つていうわけじやなくて、なんて言つか　　とばっかりを受けたのが一人だけだつた、つてい

う話なんだけどねー」

あはは、と清寺さんは楽しそうに笑っている。僕が聞いた限りでは笑える要素は特になかったように思つけど。

「とばつちり、なんですか……」

「うん。完全に。どうしよ、これを例えるには……」れかなー、うん。兎川君が病院に行つたとしよう。兎川君はちよつとした、何だろつ、まあ、かすり傷程度の怪我で診察を待つてたのね？ でもその間に病院の近くで大きな事故が起きてしました。その後すぐ 大怪我した人達が大勢運び込まれてきたので、お医者さんはそ の人達を最優先で治療しました。この治療つていうのが、ラクガキ帳の内容を？ こつち側？ であつたことに合わせるつてことだと思つてね？ そして、お医者さんは大怪我した人達の治療に追わされてる内に、兎川君を治療することをすっかり忘れてしまつたのでした。めでたし、めでたし」

「だから、めでたくないですってば」

「まあいいじゃない。なんか気に入っちゃつてさー」

実際ほんやりとは理解できたからいいんですけど。

要は……？ こつち側？ で死んだ僕らがラクガキ帳の中でも死んだことになる前に まあ、何かがあつたつてこと、だよね？

「それで……僕らはいつになつたら思い出してもらえるんでしょうか」

「んー、多分もう無理だろうねー。さつきは忘れたつて言つたけど、正確には記憶から完全に無くなつちゃつたつていう状態だから。無いものは思い出せないでしょ？」

そりやまあ、無いものは無いですからねえ……いや、えーと、それつて

「……僕らずっとこのままなんですか？」

「んーん、そうじゃないけど……この話はかなり長くなるなー。ま すどこから

「じゃあいいです」

「そのままじゃないつて分かればそれでいいや。またよく分からない昔話が始まつても、ぽかんとするだけだらうし。

自分からいろいろ質問したくせに素っ気ない僕に、清寺さんは「そうですかー」と口をとがらせながら、僕らに出した後自分の手元に戻した湯呑みを一つ、再び僕の前に置いた。

なんだろう? と首をかしげつつ湯呑みを手に取る……やっぱり持てないじゃん。もしかして飲めるようにしてくれたのかと思ったのだけれど。えっと、仕返しですか? 実はかなりイラシとしてたんだろうか。

「見えてはいるんだよねー」

「はあ? 何がですか?」

急に意味の分からないことを言われてさうに可憐つ。この人は何がしたかったんだろう。

「湯呑み、と言うか全部」

清寺さんは一度湯呑みを指差した後、その指先を上に向けてくると回す。

僕らに湯呑みが、全部が、普通に見えてるって言いたかったの? この人。

「なんで今更そんなことを……?」

「うーん、別にラクガキ帳の中にしかいないからってやー、そんなの関係なく普通の人はラクガキ帳の中を覗くことはできないはずなんだけどなー。なんで? こっち側の目? が無いのに見えるのかなー? と思って。動かせないんだから、書き換えることができないっていうのはそのままみたいだけど」

「はあ、そうですか……あ、でも動かせるものもありますよ?」

僕はブレザーの内ポケットから携帯を取り出し、一度かざして見てから、清寺さんに差し出すようにちやぶ台の上に置いた。

清寺さんは、最初は目を見開いて驚いていたけれど、すぐに合点がいったのか、

「あー……あー! そういうことか」

嬉しそうに、ぱんと両手を合わせると、ちゃぶ台に置かれた携帯を僕に返して、続けた。

「そつかそつか、なるほどねー。そうなつてるんだ。考えてみれば服いやいや、手や足だって動かしてはいるんだから、書き換えてもいたんだねー。あまりにも当たり前にそつなつてたから気付かなかつたなー」

了解了解ー、と一人頷きながら、清寺さんは携帯を動かしたついでなのが僕の前の湯呑みをまた自分の手元に戻す。別にもうそのまま置いとけばいいと思うんだけど。

「ええと、結局どうなってるんですか？」

何がなんだかなのですが。聞いても何がなんだかになる可能性は否定できないけど。

「えっとねー、死んでるっていつのは意識がない状態、と言つか寝てる時と同じ扱いつことなんだろうね。寝てる間は普通の人でもラクガキ帳の中身を見たり書き換えたりできるようになつてるから。でも……そう考えると結構造りが甘いんだなー。よっぽどのことがないと死んだらすぐに別の領域に移されちゃうから、死んだ状態のまま？こっち側？にいる人のことなんて最初から考慮されてないんだね」

「はあ……えーと、よく分かりませんけど　でも、最初の方で言つてた寝てる間は普通の人でもラクガキ帳を書き換えてるっていうのは、なんか問題がある気がするんですけど……」

「あー、もちろん神様みたいに好き勝手はできないよ？　人は寝てる間に記憶を整理してる、って話聞いたことない？　まあ、だいたいそんなようなことかなー。ラクガキ帳は、兎川君ならここは兎川君のスペースですよっていう風に区切られてて、そこを？こっち側？が休んでる間に整理整頓しましょ、っていうことで一時的に弱い権限がもらえるの。でも？こっち側？にいる人、ある物の？現状を維持する？っていう権限の方が強いから、物を動かせないのはそういう理由かなー。見るだけなら制限なんか無いからそういうの関

係ないしね

「なるほど」

とりあえず分かつた振りをしておいた。まったく分からなかつたとは言わないけれど、改めてこれを人に説明しろと言われたら何一つ説明できる気がしない。

「まあー、こんなこと分かんなくとも別にいいと思つよ？ 使うことないだらうしねー」

ばれてる……僕は思いつきり表に出るタイプだからな。

「あー、あとついでで、ですね？ なんかさつきから質問してばかりで申し訳ないんですけどおさつき言つてた、病院の近くで起きた大きな事故、つてなんなんですか？」

適当な反応をごまかすようにまあごまかせていないだらうけど僕はいまだ残つている疑問について尋ねた。こうなつてている理由の、本当の根っこがまだ分からぬ。

「病院？ の事故？ なにそれ？」

……忘れていらつしやる。自分で持ち出した例えだつたのに。

「いや……少し前の説明で、僕が順番待ちしてる間に忘れられたつていう

「あー、はいはい、あれね。あれはねー、今日」

不意に、ドバーン！ という派手に硬いもの同士がぶつかつたような大きな音がして、何事かと思い音の聞こえた方を見ると、ほとんど忘れかけていた存在 加賀晴子さんがあの分かりづらい入口のドア？ を蹴り開けた 多分 ところがだつた。

「耕四郎おおお————！」

すゞい剣幕で清寺さんの名を叫ぶと、足を踏み鳴らして僕らのいる六畳間に迫る。言つまでもなく、めちゃくちゃ怒つている。

「あんたはあ……この子のことちゃんと見ててつづつたわよね？ 私言つたわよねえ？ なのに、なんで迷子になつてんのよー！」

見れば、加賀さんの背後には彼女に手を引かれて歩く子供 僕がここに来る途中で出会つた男の子がいた。つまるところ、どうい

う関係なんだろうか。

「そんなのハルちゃんが僕に任せたからでしょー」

「なんという……なんという強靭な精神……詳しいことはよく分からぬけれど、でもどう考へてもこの人が悪いだらうに。しかもついさっき同じようなことで加賀さんを非難していたといつのに。それでも、何の躊躇も無く、これ。

加賀さんがああいう人になつたのはこの人のせいなんじゃないだろうかと思えてきた。

「ハルちゃんって呼ぶんじゃねーって、何度言えば分かんのあんたは——！」

そつちなの？ と言つたが清寺さんはすら許さないのか。何人たりともなのか。どつちにしろ呼ぶ氣はないから別にいいんだけど。

「お客さんの前で大きな声出さないでよー。恥ずかしいなーもう

「あーら、そう。だつたらその大つ事なお客様がなんだつてあんな辛氣臭せーところを不安げな顔で一人ウロウロしてたのか、納得のいく説明をしていただけんのよねえ？」

既に僕らの目の前にいる加賀さんは空いている方の手で清寺さんの頭を掴んで、ぎぎぎ、という不安の残る音を鳴らしている。対する清寺さんは、それをまったく意に介した様子もなく、平然と答えた。

「トイレに行きたいって言つから

「なんで一人で行かすの、つつてんのよ」

「トイレくらい一人で行ける歳でしょー。ついて行つたら逆に失礼だと思うけどなー」

「行けなかつたから迷子になつたんだじょーが。普通の家と一緒にすんじゃねーわよ

「この家無駄に広すぎるよねー。ほんと困つちやうなー」

「私は家じやなくてあんたに困つてんのよ」

……不毛だ。会話が成立していないようでしていい気がする。

しかし加賀さんはこうこうやりとりに既に馴れてしまつてこいるの

が、案外あっさりと清寺さんの頭を離すと、男の子と一緒にちやぶ台の前に腰を下ろした。

「……？ あんたなんで一人で二つも湯呑み使つてんの？」

「はー、まったくもー。何を言つてるのさハルちゃんは。そんな意味の分からないことはしませんー。ハルちゃんと天野君の分ですー」この人平然と嘘つくなあ。さつきの話全部嘘つてことないだろうな。

「ふうん、あんたにしては気が利いてんのね。それはそれとして、一回言つたな？」

加賀さんは何の疑いもなく田の前に置かれたお茶を口ににして、そして当然のように、

「ぬるつ！ なによこれー？ あんた、これいつ淹れたのよ？」

「分かんない

「いつ淹れたのか分かんねーようなもんを人に出してんじやねーわよ

「えー、飲めるでしょー」

「自分で飲めつつってんのよー」

いつになつたら僕らの話になるのかなあ。当分かかりそうだなあ、これ。そういうえば鳥文字さん、静かだな。暇すぎて寝てるんじやないのか……あー、恒例の景色を眺めるタームですか。ここからじや空くらいしか見えないけれど、まあ、付き合つていられない、つてことなんだろうな。むづ、いつの間にか雨降りそうな空模様になつてゐる。天気予報そんなこと言つてる。天気予報そんなこと言つてる。天気予報そんなこと言つてる。

「あんた聞いてんの？」

「聞いてませんでしたよ」

「なんで急にこっちの話になつてゐるのさ。僕が悪いの？ これ。僕が悪いんだろうな……

既に見慣れた感すらある呆れ顔で、加賀さんは深いため息をついてから、

「もう一度だけ言つわよ？」

自身の隣に浮かない感じでちょこんと座っている男の子、確かに天野君の頭に手を置いて言った。

「あんた達にはこの子をぶっ殺してもらつわ」

……この人はとうとう頭がどうかおなりになつてしまわれたのだ  
わつか?

「あの、通報した方がいいんじゃ……」

「なんでー？」

何も、加賀さんのぶつ殺してもらう宣言にこんなことを言つてゐるわけではない。まあ、あれはあれで通報した方がいいような気もするけれど。でも今問題にしているのはそのことではなく、僕らの目の前の光景の方だ。

清寺さんが疑問符を返してくる理由がさっぱり分からぬけど、今日の前に、今朝僕が見たものと同じにしか見えないもの 要するに死体が転がっているのだ。それも二人分。

加賀さんはあの正気を疑いたくなるような発言の後、一度隣の不気味な部屋に戻り、そして程なくして一見よく分からぬものを両手に一つずつ持つて、それらを引きずりながら帰ってきた。それが、まあ この死体だつたわけだ。

「そのままじやいろいろと不便だから、とりあえずこの中に入つてもらうわ」

「中に、入る？」

意味は分からぬながらも、加賀さんの指示すそれらを改めて注意深く見ると

「これって……僕らの死体、ですか？」

床に生氣の欠片もなく横たわる人の形をしたモノの容姿は、それが僕と鳥文字さんそのものだつた。ただ、なぜか鳥文字さんは男物のスーツ、僕はパジャマ？ を着ている。

「生きてた時みたいにラクガキ帳と？こっち側？とでちゃんと対の状態になるように新しく造つた体だよ。一人が失くしたのと、まだいたい同じようになつてるかなー」

すっかりぬるくなつたお茶をすすりながら、清寺さんが代わりに説明してくれた。当の加賀さんは「ラクガキ帳つてなによ？」と言

つて、不思議そうな表情を浮かべている。

要するに代わりの体、か。でもだいたい同じって……それって、人間を造った、ってこと？ そんなこと、できるの？ この人達が普通でないことはある程度理解したつもりでいたけど、だとしてもそれは……確かに見た限りでは人にしか見えないのだけれど。

「まあよく分かんねーけど、そういうことだから。早く入つて

「触るだけで後は自動的に自分の体になるからね」

「はあ……」

二人にまくし立てられて、今朝失くしたものの代わりを見下ろしながら生返事をする。実際このまま幽霊でいるよりいいとは思ふんだけど、でも、どうしてもこれが気になる。

「あの、なんで僕はこんな……なんと言つか、だいぶたけ丈の余つた服なんでしょうか？」

「ここにはあんたみたいなちびっこに合う服なんかねーのよ

これ、この人達の自前の服なのか。人間が造れるなら服くらい簡単に作れそうなものだけど。

「いや、でもパジャマ、ですよね？ これ。せめて加賀さんが着てるようなジャージに」

「なんでさつき会つたばかりの奴なんかに私の大切なジャージを貸してやんなきやいけねーのよ？ つーか、せめて、って何？ ジャージ馬鹿にしてんの？ やんの？」

「すいませんでした……」

ジャージ大好きか。別にいいけど。全裸でないことに感謝しそう。こうなつたらもう。

「なぜこの子を殺すのですか？」

僕が自分の体に触れようと動いた時、依然座つたまま姿勢一つ崩さなかつた鳥文字さんが、唐突に、ぞうさ造作もなく聞いた。

僕らと同じ姿をした死体もどきと、それについての僕らの会話など微塵の興味も示さずに、僕があえて考えまいとしていたことを、あの男の子をまっすぐに見据えて。

「説明は長くなるからしねーけど、簡単に言えば 邪魔だから、かしらね」

問われた加賀さんも、週末の予定でも答えるよつて平然と返す。

殺人の理由を。

「さつき悪魔と天使は元々争つてたけど今は仲良くしてゐつて言つたじやない？ それに関することでね。まあ要するにー、この子がいると悪魔と天使がこれまでみたいに仲良くできなくなりそうだから そうするつてこと」

「あんたさつきから何言つてんのよ？ 天使と悪魔だとか、ラクガキ帳がどうしたとか。私がいねー間に頭でも打つたの？」

「失礼だなー。？創造の秩序トウエルブ・コード？のことや僕らのことをそういう感じで二人に説明してたの。あー、ちなみに僕らは悪魔だけど天野君は天使ね」

最後の方は加賀さんではなく僕らに向けて、清寺さんが説明する。だけど、今はそんなことどうだつていい。

「自分達で手を下さない理由はなんですか？」

鳥文字さんは清寺さんには一瞥もくれずに、今度は加賀さんを見つめて問う。

「その子そう見えてめちゃくちゃつえー……や、強いつてのもちょいちげーかもだけど。まあなんつーか、厄介な相手なわけよ。だから、ここに来る途中に言つたでしょ？ ええと、なんつったつけ！」

：そう、捨て駒にするつて」

確かにそんなことを言つてはいたけれど、だけど子供を殺す手伝いなんて聞いていない。

「（）に来るまでにすゞいおつきな穴が空いてるの見なかつた？」

「……見ましたけど」

女性一人は互いしか相手にするつもりがないように向かい合つたままだったので、清寺さんの脈絡のない問いかけにはすこし遅れて僕が答えた。

「あれはねー、今朝天野君が空けたんだよ」

……どういふこと？ 何をしたらあんな そりや僕らが見える  
時点で普通の子じゃないんだろうとは思つてたけど……あ、でも  
「もしかして…… もつきの、病院の近くで起きた大きな事故つてい  
うのは」

「あー、そうそう。天野君が生まれたのとほぼ同時にあの六ヶ空い  
て、それで一人は忘れられちゃったの」

「そう、か。だから今朝死んだ僕は 僕らは…… 今朝？ は？  
なんか今、変なことを

「生まれた？ この子が、今日、ですか？」

「そうだよ。少し前にね。あーでも

「この子に抵抗する意思があるようでは見えませんが

鳥文字さんは僕らのやり取りをまるで相手にせず自分の話を進め  
ていく。

「ああ、ねーわよ。実際どうかまでは知らぬ一ケビ。まあどっちに  
しろ、これはむづこの子自身も、この子の仲間も、当然私らも、全  
員納得済みの話だから 一方的にこっちがやるだけよ」

天野君と呼ばれた男の子は、自分を殺す算段をする大人達の前で  
ただじつと、身じろぎ一つせず座っている。話の内容が理解できて  
いないといふことはないだろう。なら、加賀さんの言う通りそれを、  
そうされることを当然だと受け止めているとでもいうのだろうか。

「本人が納得しているのであれば、自分で始末をつけてもらえばい  
いのではないですか」

これに加賀さんは一度大きくため息をついて「そうね」と同意し  
た後「でも」と続けた。

「少し、欲をかこうと思つてんのよね」

視線は鳥文字さんから外さずに、清寺さんを指差してさらに続け  
る。

「こいつからいろいろと説明されたみたいだけど？混沌の御使い？  
ライディス・レイズ  
と？理法の眷属？…… 私らやこの子の仲間がどうやって増えるのか  
は、聞いたのかしら？」

「いいえ」

「死んだ人間を仲間にすんのよ」

「だから今日生まれた天野君が　　？天野君？なんだよねー」

……つまり元になつた子がいるつてことか？　いや、といづより本人、なのか。

「でも、もちろん全員じゃねーわよ。その中で適性の高い、要は使えそうな奴を適当に引っ張つてくんの。死んでから完全に消えて無くなるまでの間に、まあ？保護？してね。つつてもこれはそういう仕組みがあつて勝手にそつなるから、私ら自身は何もしねーんだけど。で、この仕組みん中で今困つてるとこりつてのが」

加賀さんはそこで一度言葉を切つて、握り締めた拳から一本だけ伸ばした親指で自身の首を、とんとん、と示しながら、

「自分で死んだ奴は問答無用で除外される、つてとこなのよ」

言葉通り、どこか困つたような表情を浮かべて言った。

「当然と言えば当然だけど。死にたくて死んだ奴に、もつかい生きろつて言つのもねえ」

よく分からぬけど……これつて要するに、今は天野君が加賀さん達と敵対　　そうは見えぬけど　　しているから、その仕組みをつけて自分達の仲間にしたいってこと？　でもそれなら

「そんなの、別に説得とかそういうことで解決できる、じやないですか」

相手に争う意思がないのなら、それはそんなに難しいことじやない、と思うけれど。

「耕四郎がこの子は今朝生まれたつつたでしょ。この子はもう既に？創造主？共の眷属（ケイノーブルス）なよ。眷属になつた奴が死んでもまた眷属として蘇る、なんて仕組みだつたら永遠に終わんねーでしょ。うが。眷属が死ねば、消えるだけよ」

「だつたらなおさら」

「眷属が死んでも蘇りはしねーけど、今言つた仕組みを通りはすんの。通つて　必ず不適格になる。だけど、通つた奴は誰だろうが

解析はされる。私たちが欲しいのはそれで得られるかもしれない「この子の？力？の情報、ただそれだけよ」

鳥文字さんとの会話に割り込んだ僕に、加賀さんは鋭い、だけど憐れむような目をして告げる。

「私はこの子と仲良くしてーわけじゃねーの」

言外に、理解できない奴は引っ込んでいる、といつ意思をにじませて。

「他者が手を下すことが必要な理由は理解できました。ですが、それでも代行が必要な理由はないように思います」

「ま、それはその通りなんだけど……念のためってことね。いやとなつたら、つてことがあるかもでしょ？ この子の？力？で一つ判つてんのは、一回使うと次使うまでにはある程度時間を置かなきやいけねーみてーなのよね。だから

「捨て駒、ですか」

「そゆことね」

こぞ殺される段になつて天野君があの穴を空けた様な反撃をした場合返り討ちにあつから、本当に天野君に殺される気があるのかどうか試させる、ということか。

殺される気があればそのままあの子は死ぬ。実はなくて抵抗したとしても、その時消えるのは僕か鳥文字さん、その間に加賀さんか清寺さんがあの子を殺す。

確かに、これ以上ないつてくらいの捨て駒だ。

「ここにいる全員が一度に消える、ということは」

「当然あるわよ。そうなつたら消えた範囲の外にいた奴が殺しに来るつてだけ」

「外側がなければ？」

「終わりでしょ」

……自分達も捨て駒、ではないのか、この人達は。どこまで本気で言つていいのか分からぬけれど、これからやることに何かも、この世のすべてをそつくり賭け金にして望むつて、今そう言つ

たんだよな、この人は。

「私には何もしないでおく」とがもつとも無難のように思えますが  
「言ひて一ことは分からなくもねーけど、私はそういうことなかれ  
主義みてーなやり方は気にいらねーの。運が良かつたら大丈夫、な  
んてその方がどうかしてると思わねー？」

僕は鳥文字さんの意見になんの異論もないけれど、加賀さんはそ  
れを聞き入れるつもりはまつたくないらしい。話は終わつたとばか  
りに鳥文字さんに背を向け、僕らの体が横たわつている場所のさら  
に向こうまで行くと、ズボンのポケットに手を入れて、

「さあ、結局ずいぶんと話が長くなつたけど、そろそろ始めましょ  
うか」

一振りの剣を、中世に異国の騎士が下げていたよつた長大な諸刃  
の剣を、そんなものが收まるはずのないジャージのポケットから引  
き抜いて、床に突き立てた。

「なんで床に刺しちやうのかなー」

加賀さんの拳動を見て、清寺さんがまつとうな内容とはいえ、あ  
まりにもこの場にそぐわぬ緊張感のない声を上げた。この人に場の  
空氣を読むことを要求することがそもそも間違いなのだろうけど。  
「どうせあんたが直すんだから関係ねーでしょ

「だから言つてるのー」

この人達にとつて今から行われることは、なんということのない  
日常茶飯事のようなことなのか？ 関わつていると頭がよけいに混  
乱しそうだと思った僕は、二人から目を逸らしてあの子を、天野君  
を見る。

彼はやはり前に見た時と同じ姿勢のままで、ちゃぶ台の一点  
いや、何も見てはいいのか、視線を動かすこともなく座つていた。  
自らの罪を認め裁かれる時を待つてゐる咎人とがひとのよう そんな風  
に思えるのはあの人達の話を聞いたから、なのだろうか。

「あと一つ、聞きたいことがあります」

清寺さんと床についた傷の話を続けている加賀さんに、鳥文字さ

んはいまだ座つたままで、話はまだ終わっていないと示すように言った。これに加賀さんは清寺さんの相手をすることを止め「なに?」と聞きかえす。

「私達に利点はあるのですか?」

思わず息をのむ。そんなことを聞くとは思つていなかつたから。それを聞いて一体

「死人に損も得もねーでしょ」

即座に返つてきた答えに、僕は自分でもよく分からぬけれど、安心したんだと思う。でも、まるでそれを見透かしたように加賀さんは「つて言ひてーところだけど」と続けて、

「あるわよ」

そう言つて、笑つた。

どんな? とは聞けなかつた。知らない方がいい、鳥文字さんもそう思つたのかどうかは分からぬけれど、僕らはどうもそれ以上は求めなかつた。だけど、

「私の役に立つた奴の望みを叶えてやるわ」

加賀さんは止めてはくれなかつた。聞かれたことに答えているだけなのだから当たり前なのかもしけないけれど、でも、この人はあきらかにそれ以上の意志をもつて、繋げる。

「まあでも、死人の望みなんて一つよねえ?」

問うた本人である鳥文字さんではなく、僕を見て、とも楽しそうに。

つまりは、あの子を殺した方を生き返らせつやる……そう言つたいのか。他人を犠牲にすればお前だけは助けてやる そういう取引をしようとして、誘つている。

加賀さんは、鳥文字さんに負けず劣らずの美人なのだけど、だけど今この人はそれを台無しにするような、とてもいやらしい笑みを浮かべている。それを見て、僕はこの人が魔王と呼ばれていることを思い出して、そして、今更ながらに思った。  
まるでおとぎ話のようだ、と。

僕はようやく、ここに至つてようやく、恐怖を覚えた。

「そんなこと」

できるはずがない。反射的にそう口にしようとした。何に対しても反論なのが自分で理解できていなかつたけれど、それでも言おうとしたその時に、恐怖はさらに加速していく。

「そうですか」

鳥文字さんが、立ち上がる。呆然と立ち尽くす僕の横をすり抜け、自分と同じ姿をした体に何の躊躇いも見せず、触れた。それと同時に鳥文字さんの姿が何の前触れもなく消え失せ、程なくして、横たわっていた方の彼女がゆっくりと起き上がった。

「調子はどう？」

「大丈夫です」

病み上がりの人間が交わすような会話をしてから、床に刺さつた剣を引き抜く。そして、振り向いた彼女の視線の先には、あの子がいる。

「一応、その体の使い方を簡単に教えとくわ」

踏み出そうとしていた鳥文字さんの肩に加賀さんが手を置いて引き止める。それから二人はしばし無言で見つめ合い、そのまま十秒も過ぎた頃に再び離れた。

今のやり取りの意味はまるで分からぬけれど、僕は剣を携えて歩を進める鳥文字さんに對して立ちふさがるように、天野君の前に立つ。既に体を手にした彼女の進行を幽霊のままの僕が止めることはできないのだろうけど、そう思つても退く氣にはならなかつた。

「本気、なの？」

あつと言う間に目前まで迫つた鳥文字さんに、僕はそんなことしか言えなかつた。聞くまでもないことだ。冗談でこんなことをする人じやないこどもらいは知つていて。

「本気でこの子を……殺す、の？」

分かつてはいても、聞かずにはいられなかつた。冗談にする人じやない。だけどそれ以前に、平然と他人を害する人のわけがない。

そう思つていたから。

「ええ」

極めて短く、しかし明確に、聞きたくはなかつた意思を提示される。そこにはほんのわずかの迷いも感じ取れない、この人らしい返答だつた。

「つ……じゃあ、やめて、つて言つたら、やめてくれる?」

なんの意味もない。僕は一体何がしたいのだろう。この人はもう僕が何を言つたところで曲げることはしないだらう。それなのに、僕はこれ以上何が聞きたいんだ。

「あなたが先にする、と言いたいの?」

僕の意図をはかりかねたのだろう。鳥文字さんは僕が思つてもいなかつたことを尋ねてきた。無理もない。聞いた本人ですら分かつていないのでだから、相手が理解できるわけがない。

「違うよ。そういうことじやなくてさ。そうじやなくて……」

これ以上言葉を繋げられない。無いものは、繋げようがない。

「なら、単純にこの子を殺すな、ということ?」

何も言えないでいた僕に、きつと手を貸してくれたんだと思つ。だけど、僕は追い詰められる。その通りだから。僕はそう言つたんだ。でもそこに、この人のような覚悟はなかつた。

「そう、です」

結局、ただ逃げるように、答えをしぼり出した。さうじ深いところに沈むだけだと分かっていて、それでも耐えきれずに。

「どうして?」

そう聞いた彼女は、まだ幼い子供が空が青い理由を尋ねる時のように、なんの他意もない純粋な目をしていた。そんな、一切揺れることのない目を。

「どうして……つて、だつて、子供だよ?」

「子供だから、殺すな?」

「いや、そうじや……なくて、でも

「……あなたは何がしたいの?」

分からなんだよ。

まるで大人と子供のよう。いたずらをした子供に大人は怒るというより、なぜそんなことをするのか理解できなくてその理由を聞くだけれど、子供は何も答えられない。

理由なんてないんだから。

「この子を許す人は誰もない。恐らくこの子自身を含めても、誰も」

本当に、大人が子供をさとすように穏やかに、

「それは、必ず誰かがこの子を殺す、ということよ」

けれどそれは子供に伝えてはいけないような残酷なことで、

「あなたか私が、あの二人のどちらかが、それ以外の誰かが、この子を殺すの」

僕はこんなこと聞きたくなかつたけれど、彼女は許してくれない、「だから私が殺す」

この人の行く手を阻んだのは、僕なんだから。

伝えるべきことはすべて伝えた、ということだろう。鳥文字さんは両手で持つた剣を頭上に掲げ<sup>かか</sup>、それを天野君に振り下ろすために、構えた。

僕はまだ一人の間に立つたままだけど、関係ない。幽霊に剣は受け止められない。触れると同時にはじき飛ばされるだけだ。あるいは、単に幽霊だろうと切り裂ける剣なのか。

どうでもいい。どちらにしろ鳥文字さんが天野君を殺めた時点で、僕に先はないのだから。同じことだ。

じつと無言で鳥文字さんを見上げる。抵抗の意思表示、じゃない。ただ、この人が今どんな顔をしているのか知りたかった。

澄んだ目。それがとても怖い。人を殺すと決めたこの人がそんな目をしていることが、怖い。

僕が今まで正しいと思っていたことは　この人の前ではなんの役にも立たなかつた。

いや、それ以前に、そんなものが僕にあつたのだろうか？

鳥文字さんが、剣を、振り下ろす。

体のあちこちが、ずきずきと痛む。

それと同時に感じる固い床の感触で、六畳間の外に投げ出されたことを知る。

うつ伏せの状態から恐る恐る目をあけ、顔を上げた。  
倒れた茶だんす。ひしゃげた扇風機。ひっくり返ったちやぶ台。  
血に染まつた人。

「あんた……何考えてんのよ？」

六畳間の真ん中で僕に背を向けて立つ加賀さんの、その背中から杭が生えていた。

腰の上、腹部の裏側に、大人の腕ほどある金属製の杭、のようなものがその先端を赤黒く染めた状態で存在している。

言つまでもなく、加賀さんの体を貫いて、そうなつている。

「そんなの、わざわざ聞かなくても分かるでしょー？」

まるで変わらない、どこか氣の抜けた清寺さんの声が、この上なく不気味に聞こえる。

彼は最後に見た時と同じ場所、パジャマを着て横たわっている僕の体のすぐ隣で、楽しくてたまらないという風に、うふふ、と笑うと、両手を広げ、

「見ての通りの、反逆、つだよ」

最悪の答えをもたらした。

一体、何がどうなつてるんだ？　この人達は仲間で、でもそういうやくなつて

「今後のためにも、理由を聞いておこつかしら？」

「もー、さつきから鈍いなーハルちゃんは。もつ頭に血が回らなくなつちやつたの？」

楽しそうな気配をあつたりと消し、ため息までついて、ゆっくりとした動作で指示示す。

「その子に決まってるじゃない」

僕同様に何が起こっているのか飲み込めていなか、座り込んでまま呆然と目の前の加賀さんを見上げていた天野君は、清寺さんが向ける指にびくり、と体を震わせた。

「ああ、そう」

尋ねたはずの加賀さんが、心底どうでもよさそうに言ひ。飽きた。そんな気配を漂わせて。自身の体を貫いている杭も、清寺さんの裏切りも、すべては取るに足らないことだと言つよう。てひみつ語り。

「じゃあ死ね」

ぎり、と鈍い音を響かせて、剣を掻む。畳に突き立つていた剣を。それは鳥文字さんが手にしていたもの。だけど、あの人は……どこにも見当たらぬ。

「その体じや無理だと思つけどなー」

「こんな程度で私とあんたの差が埋まるわけねーでしょ」

鳥文字さんは……あの子に、天野君に、消されてしまつた、の？

「そういう意味じやなくてさー。こうじうことだよ」

殺そうとするなら、殺されても仕方がない。理屈の上では納得できても、その現実を受け入れられるとは限らない。あの人は元より死人だつたけど、でも、ここにいたんだ。

気付けば、視界に杭があつた。加賀さんの背中のものではなく別の、まだ刺さつていない、これから刺さる杭。僕に向かつてくる、僕に打ち込むために放たれた杭。まだ床に座り込んでいた僕は反射的に立ち上がりつて避けようとするけれど、とても間に合わない。

逃げられない、そう思つて腕で顔を覆つた時、僕と杭の間に加賀さんが割り込んで、手にした剣で迫る杭を受けた。しかし加賀さんは完全にはその衝撃を殺し切れず、杭は加賀さんの肩を抉つて、僕の横をかすめていく。

「そうなるよねー。なんだかんだ言つてやさしいんだからー」

紅く染められた方の腕をだらりと力なく下げる加賀さんを見て、清寺さんは本当に嬉しそうに笑つてゐる。それに対して加賀さ

んは、舌打ちして吐き捨てるように言った。

「鬱陶しいわね。まともに狙いもつけらんねーの？」

「やだなー。ちゃんと狙ってるから、さつきも今もああしたんじゃない。お腹に刺さつてるものが見えないのかなー？」

それは、最初の杭も誰かを庇つて受けたもの、ということなのか。でも、誰を？

鳥文字さんが剣を振り下ろした瞬間　あの時思わず目を閉じて、次の瞬間激しい衝撃に襲われた。あれは、この人が僕を庇つたから？　天野君は殺す相手、鳥文字さんはあの瞬間にはもう……なら自動的に　いや？　ちょっと待つて　そうだよ、なんでこの人は

「私の後ろから外れんじゃねーわよ」

背を向けたまま発せられた言葉。だけどそれは間違いなく僕に向けられた言葉だった。

加賀さんは清寺さんと対峙した状態を維持しながら、少しづつ六畳間の中心へ戻る。僕はそれに身をかがめてついて行く。そして加賀さんは六畳間、天野君のところまで戻ると、

「この子には私の目の届くところで死んでもらわねーと困んだけど、今はそれどころじゃねーから、後で私が迎えに行くまでこの子の面倒見として」

そう言って、まだ使える方の手で、剣を持ったままの状態で天野君の上着の襟えりを掴むと、結局一度もこちらを見ることなく、背後の僕に向かつて天野君を放り投げた。

わあっ、という声を上げて、天野君が宙を舞う。相手をまるで見ずに投げた割には正確なコントロールではあったけど、それでも僕は慌てて彼の落下地点まで下がる。

今の状況を考えれば妥当な選択なのかもしれないけれど、あまりに乱暴な扱いに思わず、

「分かりました」

と頷いて、天野君を受け止めた。

……こやぶりこいつと、僕は、なんてことするんですか、と言おうとして……眞むうとしたよね？ なのになんで……それに、それにて今のつて 不意に、わざわまで引っかかっていた疑問がよみがえる。

どうして加賀さんは僕を庇つたんだ？

僕は幽靈なんだから、あんな杭なんて関係ない、はずだ。せいぜいが跳ね飛ばされるくらこだと思ひ。それを、身をていして守る理由は

「こくら待つてもハルちゃんは来ないと思つけどねー」

自分の意思とは関係なく、既に背を向けて立ち去るうとしている僕にだらつ、立ち止まれないので首だけを振り向かせると、加賀さんの向こうに見える清寺さんがにこやかに手を振つていた。これを見つめ、あの人を無視して追つてくることはなさそうなんだけど……じゃなくて、いやこれはこれで重要だけども、今はまずこつちだ。

「か、鳥文字さん！ 鳥文字さん！？」

あの人を呼ぶ。正しい方法が分からぬから、なぜかきょろきょろと辺りを見回してしまつたけれど、いるわけはない。それは承知済みだったから構わず続ける。

「僕……鳥文字さんになつてるよね！？」

『……私にはなつていないでしょ』

ええ……なんか頭の中に直接声が聞こえてくるんだけど……つてああー！ めんどくさいなあもう！ わうこいつ細かいこと言つてるんじやないつて分かつてるでしょうが！

「そういうことじやなくて、なんで なんで！」

『あまり余裕がないからどうでもいいことで煩わせないで』

どうでもよくねえ————！ 大事なことです————！

ええっとあ、あれか、あの時か。僕が田つむつていた時、清寺さんは加賀さんが庇うことを見越して鳥文字さんを攻撃した。それを見た加賀さんがその通り鳥文字さんを突き飛ばすとか蹴り飛ばすな

りしてどかして　　後者かな？　あの時妙に背中痛かつたし、いやそれはそれとして、その時、鳥文字さんが飛ばされた先に僕がいたから、僕と鳥文字さんがぶつかって、僕が　その、鳥文字さんの体の中に？

……そりゃあ、触れば勝手に入るつて言つてはいたけども……こんなのは定員一名だろ普通。自転車ですら一人で乗っちゃいけないんだぞ。

僕があれこれ考えている間にも僕の意思とは関係なく、僕の……じゃないのか、鳥文字さんの体は天野君を胸に抱えたまま出口だと思うに向かって走っている。

リビングの出入り口は当然と言うか僕らがくぐったもの以外にもあって、そこを抜けると思いのほか常識的な家屋の体を成している空間に出た。鳥文字さんはその間取り、構成を知っているかのように長い廊下を迷いなく駆け抜けていき、あつと言う間に、僕らがこの家に上がった方とは別の、反対側にあつた方の出入り口に到達した。

「当然こひらには僕らの脱いだ靴は無く　　あつても履けないのだ  
うつけど　　鳥文字さんは置いてあつた革靴を無造作に履き、天野君のものと思われる靴を拾つて部屋を出ると、すぐにマンションの廊下の塀に向かって立ち止まり、塀の上、内と外を隔てている透明な壁を掌で打ち壊して、空いた隙間からその身を躍らせてマンションの外に飛び出した。

マンションの、外に、飛び出した。

そこには当然、なあんにもないので、こうなつてしまつたら、僕にできることなんてただの一つしかない。

「いいいいやああああああああああ――――――――――――――――

まさか一日の内に一回も悲鳴を上げることになるとは思わなかつたなあ。記録更新だなあ。なんてことを考えている余裕は無論なく、僕は続けて反射的に思ったことを絶叫した。

「え、エレベーター！　エレベーター――はあ――？」

《そんなもの待つていられない》

「待つまじよ。おれがなにやつてゐるんですかもー！　もおーーー！」

## 『少し静かにしていて』

「えーーー？」

『もう死んでいるでしょう』

あそこが「」と書いてある。それは「」にはそれを言わねえよ！と思つた！？

一九二九年十一月一日

『子供ですら静かにして

『子供ですから静かにしていいの』……男のくせに情けないわね』  
いやどう見ても怖すぎて絶句してるだけだろ。顔真っ青だぞ。  
あ、でも『ひいう子供っぽい、と言つか普通なところもちゃんとあるんだなあ、この子。そう思つとなんかちょっと安心できるか  
あ―――！ そんな場合じゃないんだよおおおお！

遂に、硬そうな地面が目前に迫ってきたその時、鳥文字さんはおもむろにマンションの壁に向かって手を伸ばし、そこに触れる。激しい摩擦を起こしながら離すことはなく、それどころかコンクリートの壁に指を食い込ませて、壁を削り取りながら落ちていく。結果的に落下する速度は軽減されて、それでも結構なスピードのまま、とうとう地面に

ズドーンッ、という重く、だけど派手な音をさせて着地した。足元のアスファルトは陥没してひびだらけになつてゐるけど、鳥文字さんの体に傷は、それに痛みもない、と思う。

「ど、うなつて、んの……？」

子供がふざけて遊具から飛び降りるのとはわけが違う。六十階から飛び降りたのに、それなのに、無傷って。これじゃあほんと人に

問じや

「つて、ええ？　ちょ……教えてくれないんですか！？」

鳥文字さんが何事もなかつたかのよう走り出したので、思わず驚きの声を上げてしまった。まさか放置とは。この人ほんとに説明しないよなー。そういうのは普通にできるんだな。うん、今はもう指一本動かせないのに。なんか一瞬動くような気はするんだけど。

『……邪魔をしないで』

「はえ　え？　何ですか？　邪魔つて」

悩んでいたら怒られてしまった。なんだろう。いいから黙つてろ、つてことかな。

『体を動かそうとするのはやめて』

ああ、なるほどさつきの。確かに指とか動かそうとしたな。でも動かなかつたけど……僕が動かそうとしても本当は動くけど、それを鳥文字さんが中止させた？ のかな。少し前までは動いてたし、今も動きそうではあつたし。中止させるのが面倒くさいからやめろつていうことだらうか。

「分かりました……つて、話すのも駄目ですか？」

『話せないと意思表示ができないでしょ』

そこは意図的に僕の自由にさせてくれているひとつなのか。説明はしないけどいい人なんだよな、この人。

「でも……それはそれとして、これからどうするんです？」

『とりあえずここを離れましょ』

その先はまだ分からなってことか。加賀さんは特にじどうしてろとは言わなかつたし、それに、清寺さんの言つていたこと。迎えは来ない。

鳥文字さんがこんなにも焦つているのは、多分それのせいなんだるつ。

僕の相手をしながら、今この瞬間も走つている。

居住スペースのみならず敷地自体が広大なこのマンションの、その敷地を囲う柵の前に到達した時、ここまで大人しく胸に抱えられていた天野君が、

「あの……」

と、急に呼びかけてきたので鳥文字さんはいつたん彼を下ろした。  
そして、

「これ、あの人ガ

向かい合つた彼が差し出してきた手の上にあつたのは、車のキー  
だつた。恐らくは加賀さんの車のものだらう。でもなんで天野君が  
？ あの人、どんな手品使つたんだ。

鳥文字さんは鍵を受け取ると櫛の前から離れて 飛び越えよう  
としたのか壊そうとしたのかは分からないけれど 加賀さんの車  
の元に向かうようだつた。僕らはあれに乗つてここまで来たのだから  
駐車してある場所は分かつている。

「あれ？ でも、鳥文字さん車の免許なんて持つてるんですか？」

『いいえ』

「駄目じやん！」

『手順は知つているから問題は無い』

ああー、免許はなくても運転することはできるんだ。なるほど。そ  
れ、問題無いのかな？

結論から言えば、鳥文字さんの運転は加賀さんのそれよりも確かに安定感のあるものだった。もつとも、走行中にハンドルから手を離す人は比較対象にならないのかもしないけど。

「鳥文字さん……以前に無免許運転してたわけじゃないんですね？」

『ええ』

してた、と言うかむしろ今しててる真っ最中ではあるのですが。

だけど外見的には大人にしか見えないこの人が、男物という違和感はあるけれどスースを着て運転している姿を見て、高校生が無免許で運転しているとは誰も思わないだろう。

ひどい考え方だけど、これなら警察の「危介」にでもならない限り問題はなさそうだ。

あの高層マンションを離れてから三十分程が経つんだろうか。その間、車内は時折僕と鳥文字さんがさつきのような続かない会話を交わすだけで、ほとんどが静寂に支配されていた。

このまま何事もなかつたように済ませる、訳にはいかないよね……  
加賀さんの家を出た後から、その思いはずっと僕の中で大きくなり続けていて、だから

「あの……天野君？」

僕は意を決して 恐る恐るという感じになつてしまつたけど  
助手席に座つている天野君に呼びかける。

「……なんですか？」

ここまですつと一言も話すことなく大人しくしていた天野君は、急に話しかけられて一瞬驚いたようだつたけれどすぐに我に返り、今は不思議そうな顔をして僕を見ている。

「えっと、その、加賀さんの もうさつまでいたマンションでの事、  
なんだけど……」

この子の周りにいた大人達がこの子を殺す算段を立て、そして、

「鳥文字さんがこの子に剣を向けた。でも

「鳥文字さんは　あ、この人、鳥文字さんっていうんだけど、鳥文字さんは、その、なんて言うのか……悪い人じゃ、ないんだよ？いや、僕も今日会つたばかりだから詳しいことは知らないけど、でもここまで来る前にも今日会つたばかりの僕を何度も助けてくれたりして、だから、むしろいい人つて言うか……あー、つまり、鳥文字さんがああいうことをしたのは君が憎いとかそういうことじゃなくて、何かいろいろと理由がある、と思うんだ、よね。いや、理由があるならどうこううつてこうことじやなくて……ええと、結局何が言いたいのかって言うと

言いたいことは最初から決まっていた。でも言い出す勇気が無かつたから長々と話して逃げ道を塞いで、そしてようやく、口にする。「鳥文字さんのこと、嫌いにならないで欲しいんだ……」

勝手なことを言っている。天野君にも、鳥文字さんにむ。こんなことは僕が言つていことじゃない。

それにきっと、鳥文字さんはこんなこと望んでいない。僕がこんなことを言つるのはお節介だつていうのは分かつて。だけど、あれを、あれだけを鳥文字さんだと思われるのは、僕が嫌だつたから。「この人が悪い人じやないつて、いい人だつていうのは、僕にもなんとなく分かります。あれは、きっといい人だから……いえ、とにかく、大丈夫ですよ。僕はこの人のこと、嫌いになつたりはしません。それに、あなたのことも」

天野君は、まっすぐに僕らを見つめて、そう答えた。嘘偽りの無い本心だと明らかに分かる、そんな目をして。この子は……まだ小さな子供だというのに、どうしてこんな

「あの……僕、なにか変なこと言いましたか？」

天野君の予想外の反応に驚いていたら、怪訝な表情をされてしまった。

「ん、んうん。そんなことないよ。と言ひながら、ありがとう。そう言

つてもうれると、嬉しいな」

我に返つて慌てて答えると、天野君は照れくさくなつたのか顔を赤くしてうつむいてしまつた。マンションから飛び降りた時もそうだったけど、こうしてこうすると普通の子供にしか見えないんだけどな。「あー、だから、つて言つのも変だけど、あの時はあんな風になつちやつたけどさ、加賀さんが迎えに来た時にもう一度ちゃんと話してみようよ。あの人も、悪い人には見えなかつたし。話せば何て言うか……他の方法がある、んじやないかな」

なんだか天野君が困つていたようなのでフォローのつもりで言ったのだけど、「そうですね」と答えて顔を上げた彼の表情はせつきまでとは別の意味で、困つているようだつた。

それを見て、自分の命に関わるような話を軽々しく持ち出すのは無神経だつたと反省した僕は、自分で持ち出したこの話題から遠ざかるために、さほど重要ではないけれど気にはなつっていた話題へ切り替えることにした。

「どうりでさあ、天野君の下の名前はなんていつの？」

「彰<sup>あきら</sup>です」

「じゃあ、彰君つて呼んでもいい?」

一瞬意外そうな顔を見せた後、彰君は「くん」と頷いて了承してくれた。

「僕は兎川遙つていう名前だから、遙つて呼んでね。それで鳥文字さんはねー」

と、鳥文字さんの紹介をしようとしたところで気になることができたので、紹介を中断して尋ねた。

「鳥文字さんの声つて彰君に聞こえてるんですか?」

あの直接聞こえてくる声だ。聞こえていないなら僕が代わりに伝えないと彰君が置いてけぼりだしな。いや、伝えたい時は鳥文字さんが直接話せばいいのか? でも断片的にだと彰君の中で話の整合性が

《聞こえている、と思うけれど》

そう言われ隣を見ると、彰君が頷く。そつか、聞こえてるんだ、これ。仕組みはどうせ聞いたつて分からないんだろうから聞かないけど。

……なんか、かなり今更だけど、僕普通に首動かしたりしてるけどいいのかな。邪魔にならない範囲なら怒んないってことですか。動かそうとしないでつて言われた時は簡単に分かつたなんて言つちやつたけど、動かそうとしないようにするつて案外難しい。

「あーと、それでね、この人は鳥文字　あのさ、鳥文字さん？」

《なに》

またも中断して鳥文字さんを呼ぶ。こちらはそこそこ長く思つていたことなのだけど、この際なのでついでに聞いてみることにした。「紹介ついでに鳥文字さんのこと、からすさん、つて呼ぶようにしてもいいですか？　鳥文字つて長いので」

《……構わないけれど》

「いや、別に駄目なら駄目つて言つてくれていいんですよ？」

嫌そうな気配全開で許可してもらつても申し訳ないんですけども。「でもなあ、あっちゃんだと彰くんとまぎらわしいし……あらさん、じゃなんか変な感じだし。あ、この人の名前、新仁つていうんだけどね」

「あらひと？」

急に矛先を向けられた彰君が不思議そうに首をかしげて聞き返してきただので、僕はうん、と頷いて見せる。まあ、そんな反応になるよね。全然新仁つて感じじゃないもの。それに、この人自分の名前嫌つてるっぽいからそれに関するやつはさらに嫌がりそなんだよなあ。

「とこうわけで、からすさんつて呼びます。僕は。からすさんがいよいよつて言つたんですからね？　からすさんも僕のことも好きに呼んでくれていいですから。はい、もう決めました！」

《どちらかと言えば呼び方よりもその変な敬語を改善して欲しいのだけれど》

呆れたように言われてしまった。それにしても変な敬語つて……  
そつなんだろうけど。

「やう言われても……ちゃんとした敬語なんてよく分からないです  
し 分からないのですから? ですが? ほらね?」

《普通で構わない、と言っているの》

「えー、だつてからすさん年上ですか? 僕十六ですけど、から  
すさんは?」

《私も十六歳だと言つたでしょ》

あ、そういうえば加賀さんの家にいる時に聞いたんだっけ。そうだ。  
それでこの人同い年なんだなと思って……いやいや、いやいやいや  
いやいやいや、だつて、あの時は十六で死んだ昔の人だと思ってて  
……でもほんとはそうじやなくて……ところひとつ、つまり……  
「嘘つき! からすさんの嘘つき!」

《……嘘をつく理由がないでしょ》

信じないぞ! 僕は絶対信じないからな! 幽霊も神様も天使も  
悪魔も信じたとしても、これだけは信じな そうか、これはあれ  
ですね? 女の人は年齢サバ読むっていうあれのやつですね?  
これ。そうじやなかつたら、そうじやないんだとしたら僕は……

「あの、ほんとに? 本当に十六歳、なんですか?」

《ええ》

……いや、まだだ。まだ終わっていない。まだ、最後の希望が残  
つていて。

「が、学年は……学年は何年生、ですか? からすさんは高校何年  
生なのですか?」

《一年生だけ》

「いよしああああああ!」

ふ、くふふふ、ふはははははははは! そつでしょ。そつだ

と思いましたとも!

「それ見たことか! 僕は一年なのですよ。だから一年のからすさ  
んに敬語を使っていたのですよ。だから僕がからすさんより多少残

念な子でも不思議ではないのですよ!」

「守りきつたぞ。僕は、僕を守りきつたぞ————!」

「あ、そういうえば彰君は何年生なの?」

我ながらテンションの落差に驚くけれど知らない。あれはもう終わつた話なのだから。考えたくない。

彰君もそれを特に気にした様子もなく、すぐに「僕は」と言つて、でもその後なぜかほんの少し間つつむにて沈黙してから、「四年生、でした」

と、僕を見上げて答えた。

過去形で答える彰君を見て、この子がもう自分を普通の人間じゃないと僕ら以上に自覚しているのだと痛感した。僕にはよく分からぬけれど、いくら神様の駒になつたといつても、この子が子供であることは変わらない、のだろう。

でも四年生、か。驚くほどではないけど、思つていたよりかは少し上、かな。体つきは同年代の平均的な子よりも小さめなんじゃないだろうか。僕も人のことは言えないのだけど。

しかし四年生だとしても、この子はそれ以上に落ち着いてるよなあ。多分……いや絶対僕より落ち着いてるけど、でも十歳くらいなのか。そつかあ……からすさんは言わずもがな、だし……僕は一体どこで何を間違えたんですかね?

…………あれ? 何の話をしてたんだつけ……ああ、敬語か。ううん、敬語、ねえ。

「じゃあ、じゃあ? まあいいか。じゃあー、みんなで敬語使うのやめるつてことにしましちゃうか

『私はそれで構わない』

「よし、じゃあ決定ね。彰君もここからは敬語使つちや駄目だよ?」  
彼はわずかに驚いてから、神妙な顔をして頷く。

……急に一言も喋らなくなつたりしないよね? 元々積極的に話す子じやなさそうだし。

「いや、別に敬語使つたからって怒つたりはしないからね? 大丈

夫だからね？」

慌ててフォローを入れる僕を見て彼は、うん、と歳相応の笑顔を見せてくれた。もう、ほんとにいい子だなあ。あー、こんな弟がいたらなあ。毎日楽しいんだろうなあ。

「はい！ からすさん、はい！ 今すぐ彰君の頭をなでなでしたいです」

『後にして』

いいじやんちよつとくらい。加賀さんみたいに両手離さなきゃ大丈夫でしょー。けちー。

「にしても、こりしてるとなんか、僕ら友達みたいですね 友達みたいだよねー」

『……そうね』

怖いなあもう。この人意外に嫌なこと嫌って言わないタイプなのかな？ いやそれはないな、この人に限つて。ううん、ちょくちょくよく分からぬ人だ。

こんな風に、僕らが他愛のないやり取りを繰り返している間に、車は目的地に到着した。

僕は彰君の手を引いて、自宅に向かつて歩いている。

車は家から多少離れた場所にあるショッピングモールの立体駐車場に置いてきた。あまり褒められた行動ではないけれど、駐車場自体はがらがらだつたし、この辺りに有料駐車場の類はないし、それ以前に僕らは一文無しなのであつたところで利用できない。かと云つて家の前に止めるのは当然路上駐車になるのでそれで問題になつたりしても面倒、という言い訳で納得することに成功した。

自宅に向かつことは僕が提案したことだ。いや、あれは お願  
い、だな。

車の中での自己紹介等が終わつた後、僕が改めてからすさんに車の行き先を尋ねると、無いという答えが返つてきた。だから最初は加賀さん宅からただ遠くへ遠くへと走つているのかと思ったのだけど、からすさんはひたすらそうするわけにもいかない、とも言つた。

僕らの行ける範囲には限りがあるそつなのだ。

おおよそではあるけれど、僕らが今いるこの県の外では、からすさん達はある時のような マンションから飛び降りるような人間離れしたことはできなくなる、と言われた。

僕はそれを聞いて、むしろ好都合じゃないかと思い、早くこの県から出ようと進言した。加賀さんや清寺さん、誰もが普通の人と同じになるのならその方が危険は少なくなる、そう思ったから。だけど、からすさんに話を最後まで聞きなさい、と怒られてしまつた。

?外?へ出るためには?出口?を通らなければならぬ、と言つのだ。

からすさんが今の体になつてすぐの、加賀さんと見つめ合つてい  
たわずかの間に、あの人からこの体の使い方 普通の人間以上の  
能力やその有効範囲について聞いた話によると、そうなるらしい。  
どう考へても所要時間と情報量が釣り合つていらないとは思うのだけ

ど。

その時の情報によると、県境となつてゐる川 それをまたぐ県と県を繋ぐある一本の橋の上を通らなければ、今の僕やからすさん、加賀さんのような存在は？外？に出ることはできないという。そして、だから と、からすさんは続けた。

そこには必ず罠がある、と。

？出口？のことは加賀さんだけが知る事ではなく、あの人達にとつては周知の事実だそうなので、当然清寺さんの知るところでもある。あの人の反逆に仲間がいるのか、あるいは単独なのかを知る術すべはないけれど、僕らを見逃した時のあの余裕からすれば？出口？に誰か、もしくは何かがあるのは間違いない、からすさんはそう考えた。

つまりところ僕らは、際限なく遠くに行くこともできない。行く範囲の中に行くあてもない。

それを知った時、僕は 最後にかあさんに会つて、伝えたい。そう思つてしまつた。

場違いなことを考へていても思つたけれど、この機を逃せばそれはもう叶わないかもしないとも思つと、僕はその望みをどうしても抑えきれず、からすさんと彰君に伝えた。

こんな僕のわがままに、一人の反応はあっさりしたものだつた。

それは 別にすることもないからいいんじゃないか、という返

事。

彰君はともかく、からすさんについては間違ひなく、お前はこんな時に何を言つてゐるんだ、とこつぴどく怒られると思つていたから、これには聞いた僕自身が驚いた。だけど、彼女は本当に何を気にして風でもなく、僕の自宅に向けて車を走らせてくれた。

だから、今僕らは僕の自宅に向かつてゐる。僕のかあさんに会つために。

車の時計では既に午後の二時を回つていた。僕の死体が警察に発見された朝方からはかなりの時間が経過している。僕は身元を証明

するものを持っていたから、さすがにかあさんへ何の連絡もいってないということはないと思つ。かあさんが今どこにいるのかは分からぬけれど、でも、もう帰つてきているか、しばらくすれば帰つてくるだろう。

「でも……どうやって説明するの？」

話のついでに僕らの死んだ経緯などを隣を歩く彰君に話していたら、彼がそう言って、わずかに顔を曇らせて僕を見上げる。

「お、心配してくれてる、ってことだよなあ、これは。この子はどこまでいい子なんだ。」

でもまあ、当然の疑問ではあるけど。僕とからすさん、それに彰君は見ず知らずの他人なのだ。自身とも家族ともなんの関係も無い、男物のスーツを着て子供を連れている女性が急に訪ねて来て不審がらない人はそういないとは思う。

「んー、まあなんとかなると思うけどね」

繫いだ手をいつたん離し、心配してくれた彰君の頭をなでながら答えた。今は僕の用事ということで体の主導権がからすさんではなく、僕に預けられている。つまり、今なら彰君をなで放題、というわけだ。

しかし彼は頭をなでられるのがくすぐったいのか、それとも恥ずかしいのか、それを避けるように離れて僕の後ろに回ってしまった。ああ……もう手も繫いでくれないんですね。元々そっちも恥ずかしそうにしてたもんなあ。

「多分、からすさんを僕の友達だつて言えばそれで足りると思うよ」彰君を追いかけて進行方向に背を向けつつ歩きながら、僕はからすさんと僕が入っている体を自分で指差した。

なにも、僕は今朝死んだあなたの息子です、と言つ必要はないのだ。朝に駅でからすさんに頼んだ時言つたように、伝えたいことが伝わればそれでいい。

『私達はいつ友人になつたの？』

からすさんの権限で体を進行方向に向かされて、さらに追い討ち

をかけてくる。もう、細かいな。

「いや、別に実際にどうこうしたことじゃなくてさ。そつ言えばかあさんが話を」

『そういうことではなくて、私はあなたの母親と面識はないのだから、まず経緯を説明する必要があるでしょう、と言っているの』

「ああ、そういうこと? いやでもな、聞かれるかな、そんなこと」

『なら、私はいつあなたが言つつもりの内容を聞いたの?』

「ええと……僕が死ぬ直前かな。かあさんに伝えて欲しいって言われた、って言つ」

『私がその時あなたの側にいる理由が無いでしょ?』

「たまたま会つた、んじゃない?」

「僕のこと聞かれたら?」

「お、弟です、って言えば……」

からすさんとの戦いに、隣に戻ってきた彰君が参戦してきた。少し怒つているように見えるのは気のせいだろ? まあ、確かに僕が真面目に答えていくようには見えないよね。

『私はどうして平日の毎間にどう見ても小学生の弟を連れ回しているの?』

「あー……家の法事……とか? でもまあ、全部聞かれない聞かない。大丈夫大丈夫」

『……失礼だけど、あなたの母親はどういう人なの』

あからさまに信用していない様子のからすさん。隣を見れば彰君も疑いの眼差しを向けてきていた。もう、この子にこんな目をされるのはつらいな。からすさんは今更だけど。

「かあさんはさ、おおらかと言つか 細かい」とは気にしない人なんだつて

二人に言い訳するようななかたちでからすさんに答える。とは言つても、僕はなにもごまかしているわけではなく、本気で大丈夫だと思つてはいるのだけど。

僕が彰君よりも小さな子供だった頃、何をしたらこんなに汚れる  
んだつてくらい泥だらけになつて家に帰つた時も、怒られもせずた  
だお風呂場に連れて行かれて洗われただけだったもんない。

そんな大雑把だから家事が苦手なんだろうなあ、と密かに思つて  
いることは、かあさんには内緒だ。

『どうしても限度はあると思うけれど』

「だーいじょーぶですつてー。長年一緒に暮らした人が言つてるん  
だよ？ 信じようよ」

心配性だなあ、と思いつつ、僕は怒つてゐるような顔から心配そ  
うな顔に戻つた彰君を今度は逃げられないように抱き上げて、彼の  
後ろに回した手でその髪をくしゃくしゃにする。

「ねー？ 彰君は信じてくれるよねー？」

「…………」

限界を超えてどうしていいのか分からぬのか、自分の服をぎゅ  
う、と握りしめてうつむく彰君が、恐らくは拒絶の意思を表した、  
のだろうけど「うん、やめないよ？」

「なんですかー？」はつきり言わない子の言つことは聞いてあげら  
れませんよー？」

自分でやつておきながら意地が悪いなあ、と思つ。でもこれが普通  
だとも思つけどね、この場合。

「恥ずかしいからやめて欲しい……」

はい逆効果ー。上目づかい補正ー。何をしてるか自分では分かつ  
てないんだろうなあ。

「やめなーい」

言葉通りやめるつもりはまったくなかつたけれど、そもそも言つて  
いられなかつた。

兎川の表札が下がつた門。いつの間にかそこにたどり着いていた  
から。

びっくりした。もう少しで通り過ぎるところだった。彰君は恐ろ  
しい子だ。

門の前で「『めん』『めん』」と言いながら彰君を下ろし、なんとかく、ずいぶんと長い間帰つていないような氣のする、今朝出たばかりの我が家を見る。

住宅街の一角にあるやや古めの、取り立てて大きくも小さくもない平屋。とうさんの生家。でも今は、かあさんと僕の二人きりいや、もう、かあさん一人、か。

かあさんは、帰つているだらうか。

急に、これまで幾度となくただぐぐつてきた柵も扉もない門が、今は越えがたい境界として立ちふさがつてゐるようを感じた。まるで、赤の他人の家に入ろうとしているように。

かと言つて、このままいつまでも門の前にいるわけにもいかないので中に入ろうした時、門の違和感とは別のあることに気付いて、足を止めた。

そういうえば僕、からすさんにならないといけないんだよな。

考えてみれば、言う内容は決まつてゐるけれど、言い方を考えていなかつた。今の僕は見た目がからすさんなのだから、僕の普段どおりの話し方で、という訳にもいかない。

「あのひ、今からちよつと、からすさんの真似するから見てくれない?」

急に意味の分からないことを頼まれた彰君は、ぽかん、という表情を見せたけれど、僕は、まあ後で説明すればいいか、と思い、辺りに誰もいないことを確認してから、

「私はあなたの息子の友人よ。彼から伝言を預かつてきたわ」「演技のことなど何も分からぬなりに、精一杯やってみた。

「……なんか、変」

うん。僕もそう思う。なんか異常に偉そうだし。なんで腕組んで見下してゐんだろう。

「からすさん、怒つてない?」

《いいえ》

……怒つてる。別に悪氣はなかつたんだけど。思つたより難しい

な、これ。

『そもそも、どうして私を真似る必要があるの?』

「え? だつて、今の僕は見た目からすさんなんだから」

『あなたの母親は私のことを知らないのだから、容姿と人格の整合性を考慮する必要はないでしょ?』

「あー、そつか。そうだね。だつたらこいつ、もっと普通の女の子っぽい感じでいいのか。そうだな」

「遙さん……今は新「さんに失礼だと思つよ。……」

僕を見上げる彰君が、僕の下手な物真似を見せられた時とは比べ物にならない程の、どうしよう、といつ表情をしていて。ええと、どうしよう……

「いや別に今のはからすさんが変だと悪いとか駄目って意味じゃないよ? 単純にそつちの方がやりやすそうだなあつていう……ね? その」

『あまり家の前で騒がない方がいいと思うけれど』

「やうですね……」

うん、もう練習はいいや。傷を広げる」としかなりそうもないし。適当に女子っぽい話し方をすれば大丈夫だわ。多少変でもかあさんなら気にしないよ。

とりあえず玄関まで行こうと意を決して、彰君の背中に手を置き、いまだ抵抗の消えない門をくぐり敷地の中へ入る。そして、入つてしまえば、あつと言う間に玄関の前に着いてしまう。

いて欲しいような、まだいて欲しくないような そんな緊張を抱えながら、呼び鈴を鳴らそうと指を伸ばした、のだけど、玄関の戸 すりガラスが嵌つた引き戸の向こう側に影が見えたので、その指を止める。

かあさん? そう思つたけれど、なんだか様子がおかしい。玄関の床、家に上がりもしていない所で、座り込んでいるような……それとも、倒れて

「かあさん!」

気付けばおもいきり戸を開いて、叫んでいた。

中にはいたのはやはりかあさんで、やはり玄関に膝をついて座り込んでいた。だけど むしろ当然と言つべきか 一いちいちを見て驚いている。

「あ、あの、ぼ 私は、ええと、なんと言つか 」

とつさに変な行動をとつてしまつたせいでハードルが上がつてしまつたけれど、僕は当初の予定通り振る舞つこととした。目を逸らし、先の発言には触れずこのまま押し切つう。

「……遙？」

かあさんが、僕の名を呼んだ。からすやんの姿をした僕を見て。どうして？ 僕は名乗つていないので。今のは確かにかあさんの声。だけど、いつもとは様子が違う、震えた声。どうして？

かあさんはどうして、こんな所で座り込んでいたのか？

僕を見つめるかあさんと目が合つて、僕は それに背を向けて、逃げ出した。

雨が降り始めていた。

「どう通ってきたのかは覚えていないけれど、僕は立体駐車場に置いた車の前に戻つてきていた。車に背を預けて、服が汚れることも構わず地面に腰を下ろしている。

彰君は こちらも覚えてはいないけど、僕が走り出す前にからすさんが抱え上げたか何かしたのだろう 僕の前にいる。僕と同じように、うつむいて雨に打たれている。

僕らがいる最上階には屋根がない。吹き飛ばしのこの場所に雨をさえるものはない。だからなのか、とても寒い。せつときから震えが止まらない。耐えきれずに自身の肩を抱く。

「風邪ひいちやう、よ?」

その様子を見た彰君が僕の隣に来て心配してくれたけれど、僕は動くことができなかつた。

「かあさんが、泣いていたんだ」

誰に言つているのか分からぬ言葉。自分で確認するためだけに言つた言葉。

『……わが子を亡くせばそれが普通でしょ』

何を今更、そう思つただろう。そんなことは承知でおもむいたのではなかつたのか、そう言われても仕方がない。確かに、普通はそうなんだろう。だけど僕は

「僕は……かあさんの本当の子じや、ないんだよ」

からすさんと彰君にとつてはそんなこと、どうでもいいことだ。そう思つても、止められなかつた。

「かあさんは……かあさんつて、変なんだよ? 通勤するのにも、片道一時間半もかけてるんだ。毎朝ほとんど始発の電車に乗つっていく。一時間半だよ? 往復したら一日の四分の一くらいかかるつてこの辺、それなのに何回言つても会社の近くに引っ越すとし

ないんだよ。それに、そんな行って帰ってくるだけで疲れるような生活してるのに、僕が家の事すると、そんなことしてる暇があるなら勉強しろって怒るんだ。仕事して帰ってきた上に自分が晩御飯作るとか言い出しても。料理苦手なのに。それからあれもだ。かあさんは、僕が言うのもなんだけど、結構きれいだと思うんだ。だから、とうさんの代わりって言つたらなんだけど、そういう人がいてもいいんじゃないのかと思つて聞いたことがあるんだ。そしたら、今度そんなことを聞いたら殴るつて言うんだよ？ ひどいと思わない？」

全部お前のせいだ。いつかそう言われるんじやないかと、心のどこかで怯えていた。

「ずっと、僕はかあさんの邪魔になつているんだって、思つてた。血は繋がつてないけれど、一応は息子だからって、仕方なく面倒みてるんだと思つてたんだ」

そんなことを思つていたから、死んだと分かつた後でも、あんなに気楽でられた。

「だから、だから僕は 僕が死んでかあさんが泣くなんて、思つてなかつたんだよ！」

「僕はどうしようもない息子だつたんだ。本当に、自分で思つてたよりもずっと。

「おばあちゃんが死んだ時も、とうさんのが死んだ時だつて、かあさんは泣かなかつたのに。なんで？ どうして僕が死んだ時は泣いてるの？」

僕が知らなかつただけだ。泣いていたんだ、きっと。僕はいつも好きなだけ泣いて、他のことなんて何も考えていなかつた。かあさんは、僕がいたからそつはできなかつたんだ。でも今は、もうその必要がなくなつてしまつたから、ただ泣いている。

「僕はさ、「ごめんなさい」って言おうとしたんだよ？ 迷惑かけてごめんなさいって」

笑えない冗談だ。

そんなことを言つたら、かあさんはどんな顔をしただろう。怒つ

ただろうか。それとも、あれ以上に、泣いただろうか。

「せいせいしたって、笑ってくれていればよかつた。これでようやく自由になれるって、喜んでくれていればよかつた！ あんな奴はいない方がいいって！ それなら、そうなつてくれていたら……こんな思いをしなくてすんだのに！」

あまりの自分の愚かしさに、思わず笑いがこみ上げてきた。震える肩を抱きしめる腕にさらに力を込める。僕がどうして震えているのか、もう分からぬ。

「そんなこと……そんなことは、言っちゃ駄目だと、思う」

彰君が、僕のそでを握りしめて、泣きそうな顔をしている。僕は、かあさんだけでなく、今日会ったばかりのこの子まで泣かせている。

「……そう、だね。そうだよね。僕は、いつも自分のことばかりだ……」

つらいのはかあさんなのに。自分が楽になることばかり考えている。それを子供に怒られるまで気付きもしない。本当に、どうしようもない。

『気はすんだ？』

「うん。一応は、だけど……」

ようやく立ち上がった僕に、からすさんは今までと変わらない調子で聞く。この人らしいと思う。考えてみれば、この人にも世話になりっぱなしだ。

『それで、もう一度あの人とのところに行くの？』

隣の彰君に向き直つて、頭をなでようとして、やめた。代わりに、まだ心配そうに見上げている彼の肩に両手を置いて、一度、無理矢理の笑顔を作つてから答えた。

「行かない 行けないよ……何を言えばいいのが、分からぬいか

ら

死んでようやく気付いた僕が、かあさんに言えることなんて……何も無い。

「そうだねー。それはやめた方がいいんじゃないかなー」

背後からの声と同時に、それをかき消すような轟音が響いた。すぐそばにあつた加賀さんの車が、それが鉄のかたまりだとは思えないと勢いで吹き飛んでいった。そのボンネットと、運転席から屋根にかけての一箇所に、先端が鋭利な電柱のようなものが突き刺さっている。そして数秒後に着地した後は、車がほとんど停まつていなかった。駐車場を横倒しに転がつていただき、端の塀にぶつかりよつやく止まつた。

「巻き添えにしたくないでしょ？」

振り向いて、声の主を確認する。

清寺さん 清寺耕四郎が、別れた時に見た笑顔のままで、そこにいた。

「ひさしひりー、でもないか。元気ー？ って、あは、大丈夫？ ずぶ濡れじゃない」

ぱつたり友人に会つたような気をくさで近づいてくる。今にも手をぶんぶんと振りだしそうなほど楽しげに。実際本人はそうしたかったのかもしれないけれど、それは叶わない。

左手は、傘を持っている。右腕は、無い。

空っぽのそこでだけが、彼の歩みに合わせてひらひらと揺れている。

「清寺さんも傘を差してゐる割には濡れてると思いますけどね」

話し合つには少しばかり遠い位置で足を止めた清寺さんに、僕は相も変わらず場違いなことを言つていた。

「んー？ そう？ バランス悪くなっちゃつたからかなー。うまく差せないのかも」

「片腕が無いから……ですか」

「ハルちゃんはさー、容赦ないからねー。だいたい身体におつきな穴開けられててなんであんなに元気だったんだろうなー？」

「その加賀さんは、どうしたんですか？」

「あー、まー、だいたい分かるでしょ？ ハルちゃんじゃなくて僕が来た時点ですー」

結局は、この人の言つた通り、からすさんの危惧した通りになってしまったのか。

僕の、からすさんの体が身構える。僕の意思じやない、つまり体の主導権がからすさんに戻った、ということ。

彰君を背後に置いたまま、片足をわずかに後ろに引いて腰を落とし、清寺さんに対して体を横に向ける。戦うための、構え。

「やめた方がいいと思うけどなー。鳥文字君達にはちょっと荷が重いですよ」

この人の言う通り、からすさんは加賀さんからやり方を習つたとは言つても、それはつい数時間前、しかも数秒の間のこと。恐らくは、そういうことをずっと続けてきたであろうこの人には、手負いであることを差し引いても、きっと勝てない。

「ちょ、ちょっと待つてからすさん！ 清寺さんも、待つてください

体がまったく動かない状態で話しかけているからなんだか変な感じに映つているだろうけど、僕は構わずからすさんと清寺さんに呼びかけた。

「清寺さんの目的は彰君の、なんなんですか？ この子に何をするつもりなんですか？」

そもそもこの人と僕らが争う理由はあるんだろうか？

この人は加賀さんが彰君を殺そうとしたから逆らつた。それはつまり、この人は彰君の死を望んでいない、そういうことだろう。からすさんだつて、加賀さんがもういないのなら清寺さんと戦う理由は無いはずだ。それなら、話し合つていけば、争う必要はない、そう思えるようになれるんじゃないのか。

僕は彰君に死んで欲しくない、からすさんに殺して欲しくない、それだけなんだ。加賀さんと清寺さんの争いに興味はない。だから、正しいことではないのかもしれないけれど、例えこの人が加賀さんを殺してここにいるのだとしても、それは、少なくとも僕がこの人と争う理由には、ならない。

「その子はねー。神様と同じなんだよ」

突然よく分からぬことを言い出した清寺さんに、体が自由に動くならぽかんとした表情を返していったことだろう。それでも、清寺さんはその表に出なかつた僕の気配を察したのか、言つてゐることの意味が分からず反応に困つてゐる僕に問いかけてくる。

「あの話覚えてないかなー？　世界を創つた神様と世界を壊そうとする神様がいるって」

……ラクガキ帳で世界を創つたつていうあの昔話のこと、だよな。「一応覚えてはいますけど……その神様と彰君の何が同じなんですか？」

「？力？が、だよ。僕らのような悪魔や天野君達のような天使にはラクガキ帳を書き換える権限があるつて……言つたんだけ？　まあいいや、あるのー。そういう権限が。ちなみに僕らはそれを？改竄特権？つて呼んでるんだけど。でもねー、そつは言つてもさー、普通の悪魔や天使ができることなんてたかが知れてるんだよなー。ところがだよ？　天野君に限つてはなんと、神様の権限と同等なのです！　すごいでしょー」

まるで、我が子の優秀さを誇らしげに自慢している父親のようだ。だけど

「僕には『まいちす』さが分からないのですが……」

なんとなくすこいんだらうな、ということは分かるけれど、その程度が分からぬ。

「ものす」く簡単に言つとねー。なんだつてできる、つてことかなないけどね」

「……なんでも？　ですか？」

「うん。なんでも。まあ、その子に扱いきれるのかどうかは、知ら

なんでもつて……それは、全能、といふことなのか？　それじゃあ本当に、ただの　神様じやないか。

そんな？力？がこの世に　確かにこのわざかな間で現実離れし

たものをたくさん見せられたけれど、でもあれは、言つてしまえば人より力が強いとか知識が多い、という程度だ。目的を果たすために、手段を必要としていた。全能にはほど遠い。

全能なんて、そんなものは無いから、世界は成り立つてゐるんじゃないのか。しかもそれを、そんなものを一人の人間の意思に預けているなんて……それが、加賀さん達が彰君の死を求めた理由で、そして、彰君がその殺意に抗わなかつた理由、なのかな？

「あー、あと？ 力？ を使うには対価が必要みたいなんだよねー。そういう意味じや、なんでも、とはちょっと矛盾してゐるなー」

清寺さんは空を見上げて　傘にふさがれてはいるけれど　思い出したように加えた。

彰君は全能の力を少なくとも一度は使つてゐる、はずだ。清寺さんの言葉をすべて信じるならば、僕らが加賀さんの家へ行く途中に見た巨大な穴、あれは彰君がその力を使つて空けた、とこの人は言つていたのだから。

でも、彰君には清寺さんの腕のような、目に見える形で失つたものはないように思つ。なら、この子は代償として何を支払つたといふのだろう……いや、今はそれより

「つまり、清寺さんはその力が欲しい、ということですか？」

彰君を都合よく利用する。あるいは彰君の？ 力？ それ自体を自分のものにする。どっちだ？

前者なら考えるまでもない。例え彰君の命は保障されたとしても、それだけだ。何かは分からぬけれど？ 力？ の使用に代償をともなうなら　違う。そういうことじゃなくて、それ以前に、例え代償なんかいらなくとも、この人が彰君の意思を無視するといふのなら、僕はそれを？ 無事？ だとは思わない。

だけど後者なら、仮にこの人が彰君からその？ 力？ だけを取り出して己のものとする、と考えてゐるのなら、そしてその過程で、またそれ以降に、彰君になんの害もないのなら、僕はその方がいいと思う。

僕が勝手に決めていいことじゃないことは分かっている。当事者は彰君なんだから。だけど、僕には彼がその力を望んで宿しているようには見えない。

それに、全能なんてものが人の手の上にあるなら、その手が誰のものかなんてことに意味はないと思う。誰であろうとそれが人の手である時点で、大差はないと思うから。

だったら、この人がそれを好んで受け入れるというのなら、彰君がそれから解放されることを望むというのなら、僕は進んで協力しあつていい。

「んーん。別に欲しくはないなー」

予想とかけ離れた返答に僕は拍子抜けする。それなら、なぜこの人はこんな話をしたんだ。

清寺さんはまたも僕の困惑を察したのか、答えに続きを付け加えた。

「なんだろう……興味、かなー？ 単純に、どうなってるんだろう？ っていう

「……それなら、加賀さんと同じじゃないですか。それが目的ならどうしてあの人逆らつたりしたんですか」

「同じじゃないよー。ハルちゃんのはついで、でしょ？ 僕は知りたい方がメインだもの。あのやり方じゃ駄目だよ。多分可能性はコンマ以下だろうなー。ハルちゃんだってそんなことは承知の上だつたんだろうけどさ。まー、そういうことだから、まずはいろいろ調べてみたい、っていうのが目的になるのかなー」

「……結局あなたは、何をするつもりなんですか？」

それがまるで見えてこない。彰君をどうすることが望みなのが。「んー、何って言われてもなー。具体的なことはまだ考えてないんだよねー。まー、あえて言つなら……その子の中身をいじつてみたり、とか？ そんな感じかなー。だからそうだねー、これはもう決まってるっていうのは、壊すのは最後でいいかつていうことくらいかな？」

……駄目だ。この人は、駄目だ。この人にとって、彰君は珍しいモノなんだ。前提として人とすら思っていない。

僕の思い違いだった。この人と話し合つ余地は、加賀さん以上に

無かつたんだ。

「僕の勝手で始めた話し合いでしたけど、僕の勝手で終わりにしてもいいですか？」

既に交渉は決裂したことを伝える提案。清寺さんと、そしてからずさんに。

「二人も変わつてることは変わつてるけど、さほど興味はないからなー。できれば天野君を置いてどつか行つてくれないかなー。荒っぽいことつて好きじゃないんだよねー」

僕の意図は十分伝わつているらしい。だけど、不意打ちで仲間に風穴を空けて、さつきは一瞬で車を鉄くずに変えておいて、よくそんなことを言つ。

からずさんに関しては、僕らの話し合いになど最初から興味はなかつたのだろう。この人は僕らが話している間から今に至るまで、一瞬たりとも臨戦態勢を崩さなかつた。きっと、始めから分かっていたんだ。話し合つても無駄だつてことを。僕が泣きことを言つていた時と同じで、ただ僕の気がすむようにさせてくれただけだったんだ。

「そつかー。じゃあー、仕方ないかー」

無言の僕と、構えを解かないからずさんは心底残念そうに言った。

彼は大きなため息をついてから、持つていた傘を開いたままそつと地面に置いて、その空いた手で、ぶん、と何も無い目の前の空間を雑<sup>な</sup>いだ。

次の瞬間には、目の前に杭。加賀さんを貫いていたあの杭がある。

僕にはそれが突然そこに現れたように感じられた。でも、からずさんは杭がここまで飛んで来るまでの軌道が見えていたらしい。

でなければ、僕が杭が現れたと認識した時点で、からすさんの手がその杭の腹に触れているはずはない。

からすさんは触れた手で杭の軌道を体の外へ逸らしながら、同時にその逆へ上半身を傾けた。杭が一瞬で目の前を通過していく。からすさん、すごい。僕がそんな気の抜けたことを思つてゐる間にも戦いは続いている。

杭を避けた後、からすさんは即座に体を反転させる。その先にいたのは いつ拾つたのか、傘を手にして こちらに向けて片足を浮かせた清寺さんだつた。からすさんが身構える間も無く、腹部を狙つた蹴りがまっすぐに伸びてくる。

ぎ、というからすさんが奥歯をきしませる音が聞こえた。蹴りをまともに受け、体をくの字のよつに曲げて後方に吹き飛ぶ。それでも、その瞬間に横にいた彰君の腕を掴み、僕らが引き離されることだけはからうじて免れた。

「うーん。やっぱり重心がずれてて動きづらいなー」

地に片膝をつくからすさんと、急に後ろに引っ張られ着地もままならず尻餅をついている彰君を田にすれば、普通ならば好機と見て追撃するようと思つけれど、清寺さんは手にした傘を器用に片手でくるくると回しながら、困つたように首をかしげてい。

どうとでもなる相手、そう思つてゐるよつにしか見えない。だけど、それは実際その通りなんだろう。

今の攻防でこの人が全力を出していたとは思えない。にも関わらず、からすさんが一方的に押されて終わつた。力の差は歴然、そういう解釈するしかない。

「からすさん、僕に何かできることないの？」

『大人しくしていて』

再び彰君の腕を掴んで起き上がらせると同時に、自身も立ち上がつたからすさんに即答され、僕は今更ながら自分の体を取り戻しておかなかつたことを後悔した。

こんな半端な状態ではなく、れっきとした体があれば、からすさ

んのようにとはいかないまでも、弾除けくらいにはなれただろう。だけど、そんなことは本当に今更だ。いくら悔やんだところで、今の僕にできることはただ見ていることだけだ……くそつ！

「騒ぎになるのを待ってるんだろうけどー、誰も気付かないよ？」

清寺さんがゆっくりとこちらに向かって歩いてくる。警戒するような素振りはまったく見せず、無造作に。彼は僕らまであと数歩という所で足を止め、傘を首と肩で支えると、自由になつた左手で明日田の方向を指す。

### 『何があるのか見て』

からすさんは清寺さんから一切視線を逸らさず、無論僕ではなく、彰君に対し彼が示したものを見せるよつた頬んだ。気配で、彰君が恐る恐るそちらを向くのが分かる。

「人がいる。車に乗ろうとしてる人達。でも……」

「じく普通にそうしている、のか。

今ここに来て、からすさんと彰君、清寺さんが何事か話しているのを見た程度ならばそんなものだろう。多少おかしな組み合わせと状況だけど、これだけであえて関わる人はいない。でも、ここには僕ら以外に、清寺さんがぐしゃぐしゃにした車が転がっている。

あれを見て平然としている人なんているだろうか？

それだけじゃない。よく考えてみればあの瞬間に響いた音だつて相当なものだつた。事故でも起きたか、と誰かが様子を見に来てもいいはずだ。それなのに、何の騒ぎにもなつていない。

この人がそうさせているのか。いつか見た、あの巨大な穴に誰も気が付かなかつたように。

「まだ続けるの？」

また、清寺さんがため息をつく。それは勝利を確信した　いや、勝者の姿だ。

からすさんは、駆け出した。數歩で埋まる距離、一瞬で清寺さんの眼前へ。

そうなるはずだった。でも、からすさんの、僕の視界にあるもの

は コンクリート製の地面。清寺さんの革靴。自分の両手。

知らぬ間に、手を着いて倒れていた。僕は思わず起き上がりつつしてしまつ。だけど、当然体は動かない。今はからすさんに対する預けている。だから、今のはただの

「……ごめん、からすさん」

これすらも邪魔になるか、そう思つても言わずにはいられなかつた。結局僕は、手を貸すどころか足を引っ張つてゐる。からすさんはその僕に何も言わない

……おかしい。からすさんが何も言わないことがではなく、起き上がらないことが。僕はもう何もしていない、はずだ。それなのに、からすさんはまるで動こうとしない。

この状態が予定通りだつて言ひの？ 倒れたところから打てる手なんて、あるだろうか。

ぎしづり、という歯を食いしばる音。そこから呑み込んで、からすさんの焦燥<sup>じょうざう</sup>。

起き上がりたても、起き上がれない？

また反射的に、今度は顔を上げようとしてしまつて、それなのに僕は見上げることができた。

清寺さんがつまらなそうに僕を見下ろしてゐる。子供が飽きたおもちゃを見るような目。

この人が、からすさんの動きを封じていこうといふのが？ からすさんが、僕が動こうとするのを中断させるよつと。からすさんの体の中どこか、触れてさえいなさいこの人が。

なんだよ、それ……そんなの、どうにもならないじゃないか。

清寺さんはもう一度傘を自分の体に引っ掛け、空いた手を、そのまま振り下ろす。

「ぐう、あ……」

からすさんが声にして、苦痛にえぐ。右手が杭に貫かれ、地面に繫き止められたから。

「さよなら」

その声に、からすさんが伏せた顔を僕が再び上げた。靴の底が見える。頭上に清寺さんが持ち上げた足。これが下ろされた時、僕とからすさんは終わる。

何もできず、痛みすら『えてもらいえず、こんな 傍観者のまま、僕は消えるのか。

あの時と同じように、ただその前に立つて、そして擁ぎ扱われるだけ。

……嫌だ。

僕は、死にたくない。

眼前に迫っていた靴底、そのかかとが額に触れ、そのまま落ちていった。

地面に靴が落ちている。清寺さんの革靴が、靴下が中に入ったままの状態で、両方とも。

その先で、清寺さんも落ちていた。傘を放り出し、仰向けに寝転んで雨に打たれている。

彼の脚が、根こそぎ無くなっていた。ズボンの大部分が自身と雨の重みで平らになっている。血の跡のようなく間に脚があつたことを示す痕跡は何も無い。ただ、抜け落ちたよ。

「……なに、これ？」

いつの間にか体も動くようになつていて。からすさんが自由な左手で右手を貫通している杭を引き抜く。途端に血があふれ出しすごいく痛そうなのだけれど、僕にはなんの痛みもない。それに今はさつきと違い、からすさんにも苦痛はないみたいだ。それがまだ救いだった。

「……あ、僕、は」

彰君が、起き上がったからすさんの服のすそを遠慮がちに掴んで、これから怒られることが分かっているというような、不安げな面持ちでこちらを見上げている。

「……この子がやつたのか？ これを。

清寺さんが言っていた、彰君が持つという全能の力。それを使つ

たといふことなのか。だけど、それには対価が必要だとも言つていた。ならこの子は、今何を失つたんだ？

「うふ、ふふ、うふふふふふ」

突如聞こえてきた不気味な笑い声に、僕と彰君は横たわる清寺さんの方を見る。彼は手足の中で唯一残っている左手で口元を押さえているけれど、それでもあからさまに分かるくらい、本当に嬉しそうに笑っていた。

あんな状態になつて、一体何がそんなにも嬉しいというんだ。

『とりあえずここから離れましょ』

からすさんは笑い続けている清寺さんを既に危険ではないと判断したのか、早々に背を向けて、彰君の手を取り歩き出す。

「え、ちょっと、いいの？　あの人あのままで」

『あの状態ですから、きっと今の私では手も足も出ない』

いや、別にとどめを刺そつていうことじゃなくて。単純に、問題にならないのかなあつていう疑問だったんだけど。でも、今の言い方からすれば、あの人はまだ危ないってことなんじや……いいのかな、こんな風におもいきり隙を見せて。

しかし、僕の不安が現実となることはなく、彼が再び襲つてくるようなことはなかつた。

僕は駐車場のエレベーターホールに向かうまでの間、振り返つてもう一度あの人を見る。

あの人は最後に見た時と同じように横になつたまま笑つていて、だけどその笑い方は、もう無理に抑えることは止めたのか不気味ではなく、むしろ爽やかだ。

なぜだろう、僕の目にはあの満身創痍で笑う姿が、とても楽しそうに映つた。まるで、無邪気に遊ぶ子供のように。

彼が視界から消えた後も、僕の中ではその笑い声がいつまでも響いていた。

僕らは再びマンションの前に立っている。

と言つても、加賀さんの部屋があるあの高層マンションではない。今日の前にあるのはあんな非常識なものではなく、『ぐく普通の、見た限り十階建て程度のものだ。

からすさんが暮らしていた場所 そう聞いた。

清寺さんと戦った駐車場を離れた後、からすさんの提案で僕らはまっすぐここに向かった。

既に雨は上がって晴れ間が見えているけれど、その空は赤い。もう日が暮れ始めている。

それでも、ここに来るまでの間からすさんは人目がない所では彰君を抱えて人間離れした速度と持久力で走っていたので、移動した距離を考えれば相当に早く着いたのだろう。

からすさんは一度マンションを見上げた後 自分の部屋を確認したのだろうか マンションの玄関口の屋根に彰君を抱えて跳び乗ると、そのまま塀を越えて一階の廊下に降り立つた。

……いやいや、なんで？ 普通に入ろうよ。そりや鍵が無いんだからオートロックの扉を開けられないのは分かるけど、でも「こんなことしなくとも家の人にインター ホンで、開けて、って言えばいいじゃん」

### 《無理よ》

……あー、そうだ。僕と違つて容姿が今までと一緒にだから大丈夫だ、なんて間の抜けたことを考えていたけれど、この人だって死んでいるんだ。普通に家に帰ることなんて、もうできない。

「あれ？ 大丈夫からすさん？ どうやつて説明するの？」

よくよく考えてみれば、姿が同じというのはむしろハードルが高くなっている。僕のように 未遂だけ 聞いた話を伝えるというやり方は通用しない。のみならず、この人はここに来る前、私

の部屋で今後の身の振り方を考えましょ、と言つた。それはつまり、家族と話をするだけではなく、家に上がり込もう、ということだ。

「……そんなことできるの？　どうすればいいのか見当もつかないんだけど。」

#### 『大丈夫よ』

僕の不安を一蹴して、からすさんは彰君を下ろすとエレベーターに向かい歩き出す。そのままエレベーターに乗り七階に到達すると当然だけど迷うこともなく、向かって右端にある部屋へ。扉の前で一度ドアノブを手にした後、思い直したように離し、その上の鍵穴と言うか扉を固定する機構そのものを力ずくで破壊してから扉を開け、僕らは部屋の中に入った。

いやだからさ、そういうことしちゃ駄目だと思つよ？　怒られちゃうよ？」

「……いいの？　あんなことして」

いいはずがないのだけど、聞いてしまう。心なしかこれには彰君も軽く引いている気がする。

#### 『大丈夫よ』

あれも？　嘘でしょ？　どれだけ子供に寛大な親でもあれは無理だと思うけど……あんなことしたら僕のかあさんだつてさすがに怒るかなあ？　いや、まあいいですよじやあ。それより微塵の躊躇もなく家の中にすかすか上がり込んでいる方は本当に大丈夫なんですか？　家の人に見つかったら國家権力に通報程度じゃすまないのに。

からすさんの家は、ざつと見た限り3LDKくらいの、核家族が暮らすには標準的な広さの部屋だつた。つまり、誰かが入ってくればすぐに分かるくらいの広さだ。でも

「誰もいない、と言つうか……」

家中には人の気配もなく、静まりかえつていて、だけに留まらず全体的になんとかがらんとしていた。リビングには液晶テレビ

が床にそのまま置かれていて、その側に一抱え程度の箱があるだけ。ソファのような調度品の類は何も無い。キッチンにも調理器具はおろか、食器すら見当たらない。冷蔵庫がガスコンロの前というあり得ない位置にあるだけだ。

そして、その二つの空間に挟まれたダイニングには、やたら大きくて重そうなテーブルに椅子が一脚だけ置かれている。

大丈夫というのは、こうしたことだったのか。

「からすさん……一人暮らし、なんだ」

『私が好んでそうしていただけで、家族は健在よ』

よけいな気を使わせてしまった。でも良かつた。天涯孤独だなんて言われたら、どんな顔をしていいのか分からない。今の僕には無縁の心配ではあるのだけど。

からすさんはリビングを通り、その先にあるふすまを開けた。そこは八畳ほどの和室で、部屋の角に洋服だんす、奥に押入れがあるだけの他と同じような簡素な部屋なのだけど、一応 寝室、なのだろうか。

ここまで来てようやくからすさんは彰君の方へ振り返り、言った。『服を脱ぎなさい』

「なんで！？」

はあ？ という表情で見上げる彰君の代わりに、僕が叫んだ。あんた彰君になにするつもりなんだよ。部屋に上げた途端それから『服が汚れてしまっているから洗うと言つているの』

ああ、そういうこと？ いきなり何を言い出すんだと思った。確かに濡れたり転んだりしてあちこち汚れてしまつてはいるな。でもこういう場合はまずそれを先に言つべきだと思つんだけど。怖いから。

「でも……服これしかないし……」

彰君は理由は理解したようだけど氣は進まないらしい。まあ、裸で過ごせっていうのもな。軽い虐待な気がする。軽くないな。虐待だ。ただの。

彰君のこの反応を見て、からすさんは押入れを開け、中にしまってあつたタオルとパジャマを手にすると、それらを彰君に差し出して、

『服を脱いだら体を拭いて、その後これに着替えるなさい』

彼をじっと見下ろす。

からすさん、今どんな顔してるんだろう。彰君が軽く怯えてる気がするんだけど。

「……分かった。着替えてくる」

わがままを言つて親に叱られた子のようになじゅんとして、彰君はリビングに戻つていく。

僕がそんな彰君を若干の罪悪感を抱きつつ見送つた後、からすさんは洋服だんすの前に膝をつき、その下部にある小さな引き出しを開けた。その中には小さな布のかたまりが敷き詰められていて、からすさんはその一つに手を伸ばし

「ばんっ！ といつ派手な音を立てて、いきなり引き出しが閉じられた。

……ああ、下着か。今の。

『見たな』

「見たよ？」

見たけども、今のは僕が悪いわけじゃないと思つんだ。だいたいあんな丸まつた状態の下着なんて見られても別に

『謝りなさい』

「『めんなさい』……」

いや、なんかおかしくない？ 僕、なのかなあ……まあ、別にいいんだけど。いいんだけどなんと言つか、こつ おかしいよね？ 『不便だらうけど、私が着替えている間はあなたの感覚を切らせてもらつわよ』

分かりました、と答える前に視界が無くなり、何も聞こえず、なんの感触もない世界へ。

うわ、なんか怖い。分からなければ、真つ暗な水の中を無限に沈

んでいつている、そんなイメージ。こんな状態で長時間放つて置かれたら……よし！なんか楽しいこと考えよう。すっげえ楽しいことしようぜ！ うん。無理だ。あ！ すつじー美人がいるよ！

「もう着替え終わったの？」

### 『ええ』

洋服だんすの扉の内側に掛けられた鏡に映るからすさんが頷く。着替えるの早いなあ。おかげで助かった……ん、だ、け、ど はあ……しかし、本当にきれいだな、この人。

「からすさんって、学校でもつてもて？」

下駄箱の中にラブレターが一杯、みたいなことが現実にありそう。本人は嫌がりそなうだけ。

### 『私が通っていたのは女子高よ』

……この人の場合むしろもてるんじゃないのか、と思つるのは僕の偏見だろうか。本人は嫌がりそなうだけ。

「ねえ、ちょっと僕が体動かしてもいい？」

### 『構わないけれど』

僕がなぜそんなことを言い出したのか理解できない様子ではあつたけど、からすさんは僕に体の主導権を譲ってくれた。そのまま彼女に理由を説明することなく、思いついたまま、おもむろに両手を胸の前で祈るように組み、上目づかいで鏡を見る。

「私……遙君のことが、好きなの！」

「うおおー！ いい！ いいぞこれ！」 よーし次は

### 『……何をしているの？』

「いや、からすさんはこいつことしなをやつだなあ、と思つたらつい……」

そんなに怒んなくてもよくない？ これは完全に僕が悪いの認めますけど。

### 『二度としないで』

「はい……すいませんでした……」

あ、しょんぼりしてるからすさんかわい まづい、同じ過ちを

繰り返す前に早くここから離れよう。同じ年の人にこんな怒られ方をするのはもうごめんだ。

そう思つて、リビングの彰君の様子を見に行こうと洋服だんすの扉を閉めて歩き出した時、なんだか今まで感じたことのない違和感を覚えて、立ち止まる。

……分かった。スカートだ。さつきまでは上下共スースで普段着てるブレザーと大差無かつたから何も思わなかつたけど、今の格好は白いブラウスとその上にややタイトで灰色をしたカーディガン、下は足首まで隠れるような紺のロングスカートという、確かにどこぞのお嬢様のようなこの人には相応しい服装で、そして僕にとっては 未知の領域だつた。

「なんか、この格好下半身がすーすーして落ち着かないんですけど

『すぐに慣れるわ』

にべも無かつた。うん、ものすごく不安だ。世の女性はこんな頼りないものを身に着けて外出しているのか。しかも、これでもまだ露出が低い方というのだから。なんという胆力たんりょくだ。女性は精神的には男よりはるかに強いという話を聞いたことがあるけれど、なるほど頷ける話だ。

「あの……お手数だとは思いますが、ズボンにはき替えてもらえないでしようか」

『私はさつき渡したパジャマ以外にズボンを持つていないの』

ええ……そんな人いるか？ 僕にさつきの仕返しがしたいだけなんじやないのか、この人。まあ、悪いのは僕なんだから甘んじて受けれるけども。いやでもなあ、それだったらそう言う人だよなあ。じやあほんとに？ ううん、でも……例えばあれなんかは「でも、学校で体育の授業受ける時はジャージ……じゃないの？」それくらいならここにも

「あの学校は制服のままで受けさせていたから、無い」

「嘘お……スカートなんかはいてたら派手に動き回ることなんてで

きないじゃない」

「体育と言つてもほとんどが護身術の教習だつたのよ。あそこには、普段と同じ服装で修練しなければいざという時意味が無い、という思想があつて、だから制服のままだったの」

……からすさん、すごい学校通つてたんだな。今の世の中に本当に特殊な訓練を受けている女子高生がいたとは……現実めええ。

「でも、でもじゃあ　からすさんって、一人暮らしなんだよね」

『ええ、と言つたでしょう』

「じゃあ、お風呂場を掃除する時もスカートつてこと、ものすごくやりづらそうなんだけれど」

『はかなればいいのよ』

反射的に「え？ それってどこまで？」と聞きそつになつたけど、なんとか踏みとどまつた。僕にも学習能力はあるといつことだ。だいぶ貧弱ではあるのだけれど。

それにして、と意味もなく部屋の中をうろついてしながら思つた。どう考へても変なのだ。上着はスカートの外だからいいのだけど、ブラウスのすそはスカートの中に入つていて、動くたびに脚の付け根辺りでふわふわして非常に気持ちが悪い。これはこの状態が正解なのだろうか？

「からすさん、この服の着方つてこれであつてるの？ なんか変じやない？」

『あなた女性用の服の着方なんて知つているの？』

知らないよ。それ言われたら終わりですよ。でもなあ。納得いかないんだよなあ、これ。

僕は寝室を出てリビングへ戻つた。そこでは思つた通り、大きすぎるパジャマを着た彰君がなんとか自分の身の丈に合わせようと四苦八苦していた。

「彰君、これさあ、なんか変だと思わない？」

からすさんでは話にならないので彰君に判断してもらおうと、スカートのすそを胸あたりまで持ち上げて、ブラウスの端が無造作に

垂れているところをさらす。

呼ばれてこちらを見た彼は一瞬固まつて、その後すぐに パジヤマそっちのけで慌てて背中を向けてうつむいてしまつた。そして、なぜか正座している。

えつと、いや、確かめて欲しいんだけど　　あー……ああ、うん。  
うん。 そうか。なるほど。分かりました。

この時には既に僕の体は動き始めている。リビングを横切つてダイニングへ向かい、そこで立ち止ると右足を後ろへ高く振り上げ、視線の先には無駄に大きなダイニングテーブル。

ははあん、そうか、この人は僕を殺すつもりなんだな。さて、どうやつてあやま

……動いた？　すごい重そうなテーブルが動いた。当たつたの小指だったのにな。正直確信が持てないんだけど……小指、とれてないよね？

『あなたさつきからわざとやつていない？　ねえ？　馬鹿にしているの？　そうなの？』

「違うんですよ。そんなんじゃないんですう。ただちよつと頭の方が悪いだけえ」

床に倒れ伏しはしたけれど、がんばつて、すぐがんばつて、泣くのだけは我慢して謝つた。正直なところ、まずはおもいきり泣いておきたかったのだけど、しかしこれ以上被害が拡大することだけは何にかえても防がなければならぬ。

『……ちょっと？』

「かなりでした」

鬼か。僕が悪いんだけど。なんかさつきからこんなのはつかりだな。あれ？　でもこれ……

「あのや、これってからすさんも痛いんじゃないの？」はつ、黙りだねー。からすさんのバーカ

『私に伝わる痛覚は遮断しているから何も感じない』

「うわー、きつたな　　いつだ！　うう、ぐ……嘘、でした！」さ、

最高です！ からすさんは最高に素敵です！ 馬鹿は僕だけです！  
つてもつ、もうよくないですかね！？」

痛めた小指をたっぷりと固い床にぐりぐりされながら、僕はからすさんが清寺さんと戦った時ことを思い出した。あの時、手に杭が突き刺さっても僕はまるで痛みを感じなかつた。だけど、からすさんは痛そうにしていた。今はその逆つてことか。あー、他ごと考へても全然変わらないや。分かつてたけど。まあこれはいいや。それより

「からすさん、ありがとうございました」

『……気持ちが悪い』

お礼を言つたら即座に僕をいたぶる動作が中止された。どういう目で僕を見るんだよ。

「そういうんじゃないよー 今ので清寺さんの時のこと思い出したからその時のだよ！」

『礼を言われるようなことはしていないでしょ』

本人がそう言つのならこれ以上は何も言いませんけども。あの時のこと思い出した僕は、穴を空けられた右手を見て今更ながら驚く。傷がもう完全にふさがつていた。治る早さが尋常じゃないな。この体はこういうところも普通の人とは違うのか。

体の傷はふさがつたけれど、この人に影響と言うか、負担のようなものが残つていなければいいのだけど。僕にはそういうことがまったく分からぬことが、歯がゆい。

「…………あ、大丈夫？」

さつきまで、きやあきやあわめいでいたのに突然静かになつた僕に、彰君が今日だけで何度見せたか分からない心底相手を案じている顔をして、だけど今までとは違ひ僕が寝転んでいるので、見上げるのではなく、上から覗き込んできた。

うん。これはこれで大変良い感じです。この目が危ない人を見るそれじゃないところが、この子のいいところだと思う。

「大丈夫じゃないけど…… こうしてればすぐよくなるかなっ！」

さつきの名残なのが正座していいる彰君のお腹に顔を埋めて、膝に体を乗せて抱きつく。彰君は驚いて、パジャマのそでから出てもいい手で僕を引き離そうとするけど　ふつ、子供の力で高校生に勝てるわけがないだろう？

「こんな別に怪我と関係ないと思つ……」

腕力では敵ないとさとり、論理的に立ち向かってく。しかし

「ありますー。ものすつしにありますー。こうしないと治らないんですねー」

「残念！　そんなものは相手に応じる意思がなければ意味をなさないのだよ。

しばらく彰君を抱きしめた後、この状態は話しづらいと思つたので僕は体を仰向けにして、今度は膝枕をしてもらひ。恥ずかしいような困ったような表情を浮かべる彰君。そんな彼を見ていたらふと思いついたことがあつたので「ねー、からすさーん？」と呼びかけた後、返事を待たずに本題に入る。

「僕がこれからずっとこのままだつたらわあ、彰君と結婚するけどいいよね？」

『……何を言つてゐるの？』

さらりに複雑な顔をする彰君と、僕の正氣を疑つてゐる気配のするからすさんに構わず続ける。

「だつて六歳くらいしか変わんないしさ、十年も経てば違和感ないでしょ？　いけるいける。その間は花嫁修業とかしてゐるから。いいお嫁さんになれると思うけどなー。家事好きだし」

『あなたは男でしょう……』

え？　ああ、それは……確かにその通りなんですけど……う、う、うん？　なんか……僕、踏み込んではいけない領域へ向かってひた走つてゐるのだろうか？　別にそういうつもりじゃないんだけどな。なんだらうなこれ。あれだな、一応確認しておいた方がいいのかな。考えるのはそれからにしよう。

彰君の膝から起き上がり、彼と向かい合つて僕も同じように正座する。わずかに乱れた着衣を直した後、上着のすそと、そのまま越してブラウスを掴み、それらを首の辺りまで一気にまくった。

当然、胸が見える。飾り気のない白い下着に包まれた女性の胸が。からすさん、なんとなく気付いてはいたけど　あんまりないんだね。でも……ものすごくどきどきするぞ！

なんだ。やっぱり僕はノーマルじゃないか。心配して損した。あーあ、彰君がまた背中向けちゃつた。耳まで真っ赤にして。もう、ほんとかわい

「「めんなさい」……「めんなさい」！　折れる！　腕を変な方向に曲げようとしないで！　折れちゃう！　折れちゃうからあああ！」  
『あなた……本当にどこかおかしいのじゃないの？』

あつはつはあつ！　何を言つてるの？　僕はビノーマルですよ？　からすさんはおかしなことを言つなあ。だつて確認したもの。何の問題もありませんね。左腕の肘関節以外は。

「それにさ、痛くなくてもさ、折れちゃつたらからすさんも不便でしょ？　ね？　ね？」

### 『治せばすことだもの』

「許してくださいお願ひします」一度としません誓いますから  
みしげ、といふ人体からはあまり聞いたことのない音をさせてようやく、からすさんは腕を解放してくれた。まだびりびりしているけど、動くところを見ると折れてはいらしい。

「はあー、まつたくもう。からすさんは加減つてものを知らないんだよなあ。ねー？　彰君もそう思うよねー……いや、ほんともうやめてねからすさん」

足の小指の痛みで悶絶していた時の再現のように、僕の心配をする彰君に再び膝枕をしてもらいながら、自分でも信じられないくらい横柄な態度をとつて、その後それに怯えるといふよく分からぬことになつた。

彰君と接する時はなんでこんな風になつてしまふんだろう。普段

の僕はここまでひどくない、と思つてゐるのだけビ。

「？ どうかした？」

彰君がさつきのような恥ずかしがつている様子ではなく、あきらかに浮かない顔をしていた。やはり見た目は美少女でも中身が男の人間に膝を貸すのは不快なのだろうか。

「……遙さんは、僕が怖くないの？」

僕には、そう言つて僕を見下ろす彼の方こそが、何かに怯えているように見えた。彼の頬にそつと両手を伸ばし、互いに逆さの状態で見つめ合つ。

「清寺さんの話を聞いた時は 正直、怖いと思つたよ」

彼の目が揺れる。きっとその気になりさえすれば、恐れるものなんて何も無いはずなのに。それなのに今は、どこにでもいる普通の子供のように、震えている。

当たり前だ。この子は、どこにでもいる普通の子供なんだから。「でもね、今は全然怖くない。だって

驚いた顔。彼が何かを言おうとしたといふで、

「彰君、ただのいい子なんだもん」

触れていた手で頬をつまんで、引っ張つた。そのせいでの子がつむいだ言葉に意味は乗らなくて、僕はそれを見てあはは、と笑つた。笑いながら、呆気に取られている彼から手を離して、

「助けてくれてありがとう」

もう一度、手のひらでその頬に触れた。

「でも……僕駄目だつて あの時、遙さんと新仁さんがあんなことになつてた時でも僕は、これは使っちゃいけないんだつて思つて、でも気付いたら……だから僕、ほんとはね、僕の本当は

「うん。だから、ありがとう」

使つてはいけないもの。そう思つていたのに、それでも君は、助けてくれたんだから。

「……怒らないの？」

憂いを帯びた目。自分は罪を背負つた人間だと思っている顔。こ

の子は本当にどこまで

「怒られるのは、僕の方だ」

体を起こして、彰君を胸の中でおもいきり抱きしめた。

「君はあの時、何を失ってしまったの?」

力の行使にともなう対価。この子は何も言わなかつた。僕のせいで失くしたものを。

彰君は僕の背中に回した手で服をぎゅうと掴むと、

「……分からぬ」

消え入るような声で、しぶり出すようにそう言った。

外から見てもそれは分からぬ。だけど、自分自身でも分からぬなら……それは

「思い出が無くなるんだって、あの人達は言つてた」

思い出……記憶、か。それも忘れるんじゃなく失う、のか。無いものは、思い出すこともできない。だから、何を失つてしまつたのかも、分からぬ。それは、あの時失くしたのがこの子にとつてかけがえのない記憶だつたのかもしれない。いや、違う。そうじやない記憶なんてないんだ。

「僕は、車にはねられて死んだはずなのに、でも気がついたら田の前にものすごく大きな穴があつて、頭の中がごちゃごちゃして、聞いたことのないはずの変なことを知つてて、家に帰りたいと思つて歩いていたら、あの人達が来て僕がどうなつてゐるのか、全部教えてくれた」

その結果が、殺されることを待つ 望む子供。

「あの人だけじゃない。僕は、たくさんの人を」

抱きしめる腕に力を込めて、この子の言葉をさえぎる。聞きたくないよ。そんなことは。この子が気に病むことじやないはずなのに、それでもこの子はきっと、自分を責めることをやめないんだ。

「覚えてること、教えて欲しいな。彰君の大事なこと」

代償の大きさが使つた力の規模なのか、あるいは回数なのかは分からぬけど、でもこの子はまだすべてを失つてはいはずだ。

「そうでなければ、こんなにやさしいはずがない。」

「お父さんとお母さん、阿貴のことば、覚えてる」

「阿貴、って？」

「僕の五つ年下の妹。よく僕が宿題してる時に、お兄ちゃん本読んでつて、僕にもよく分からぬ本を持ってきて、僕はなんとか読んで聞かせようとするんだけど、でも阿貴はいつも本より、困つてる僕を見て笑つてた」

「そつか。彰君はいいお兄ちゃんなんだね」

お兄ちゃんが自分のために一生懸命になつてくれるのが嬉しかつたんだろうな、きっと。

抱き寄せていた彰君を離し、向かい合つて彼の手を強く握つて、まっすぐにその目を見る。

「僕が言つことじやないつて分かつてるけど、でも 彰君、もうあの力は使わないで。大事な人のこと、失くして欲しくないから」

そうなつたら、きっとこの子がこの子ではなくなつてしまつ。

「だから、もう彰君があの力を使わないでいいようがんばるからね……からすさんが」

両手をついて絶望した。ひどすぎると。がっかりしてたんだろうなあ。怖くて見れないけど。

「ねえ、からすさん？ ほんとに僕にできる」とつてないの？

《無い》

ちよつとは考えてよ。僕にできる最善の行動が、邪魔にならないように何もしないようにする、つて……あんまりだ。まあ、ほんとは僕が考えなきゃいけないことなんだけさ。

「あ……えと、大丈夫、だよ？ 僕、嬉しかったよ？ だから、その」

「僕やっぱり彰君と結婚するう――――――！」

叫びながら愛しい人の胸へ飛び込んだ。あー落ち着くなあこれ。もづづつこうしてたいなあ。駄目なのかなあ。なんで駄目なんだろう？ 駄目じゃないだろう。こうしてよう。

『いい加減これから話をしてみたいのだけれど』

「だからー、彰君と幸せな家庭を築くんだけ  
！　はい分かりました！　話しましょう！　話しまくりましょう！  
だから間接を極めないでください！」

『？出口？に向かいましょう』

初手から結論だった。それも、まったくの予想外の。

「……え？　だつてそこには　」

必ず罠がある、そう言っていたのは、からすさんなのに。  
確かに？外？に出られるのならばそれが一番いいとは思つけれど。  
それができないって言うから……ああなつたわけで。

『ええ。だから今すぐということではなく、準備ができ次第に』

「準備つて……何を用意していくの？」

何か当てがあつたからここに取りに来たつてことなのかな。見当  
もつかないけれど。

『この体の扱いを完全に把握してから、といふ意味よ。それで必ず  
突破できるとは言えないけれど、それでもこのまま？中？に留まつ  
ているよりは望みがあるでしょ？ね』

「やつぱり、敵が清寺さん一人つてことはないのかな」

『それは分からぬけれど、仮にあの人だけだとしても、長い時間  
を置けば体を治したあの人があつ一度現れることになると思つ』  
そうか。からすさんの右手のように、あの人の中だけ回復力が  
普通じゃないのか。

「むしろ、今頃はもう元通りになつてるんじや……」

『その可能性は低い。腕はともかく、あの脚をそう簡単に戻せると  
は思えないから』

彰君の力は神様の権限と同じ　それに繋がることなのだろうか。  
僕にはまるで分からぬけれど、あれは単純に失つただけではない、  
ということなのか。

「大丈夫、かな」

彰君がわざかにうつむいて、不安をあらわにする。彼が案じてい

るのはこの先にある危機なのか、それとも、清寺さんの安否なんだらうつか。

『何をどうしたところでこちらが圧倒的に不利なことに変わりはない。助けが期待できない以上、逃げる以外の選択肢はないのよ』

「選択で思い出しだけど、彰君の服放りっぱなしだね」

と言つてもそこは彰君なので畳んではあるのだけど。別に今から洗う服を畳まなくてもいいのに。

「……聞いてるよ？ ちゃんと聞いてるんですよ？ ただふと思いつ出したから……つこ」

無言の圧力を受け止めなかつた。いやだつてさ、全然話についていけないんだもの。

『それに、これは希望的観測だけれど 敵がそう安易に襲つてくれるのではないかと思つ』

僕をあつさりと無視して、からすさんは話を進めてしまつ。この人が彰君に服脱げつて言つたのに。

「……どうして？」

無論洗濯のことではなく、からすさんの予想に対しても。さつき自分で僕らの方が圧倒的に不利だつて言つたばかりなのに、それなりにどうしてそんな風に思うのだろう。

からすさんは僕の疑問に何も言わずただ目の前を見つめるだけで

「！ 駄目だからね！ 彰君はもうああいことしないんだから」

『相手がその事情を知る術はないでしょ？』

「あ……まあ、それはそうだけど。でも」

清寺さんの状態だけ見れば、彰君は力を使つことをいとわない、そう思えるのか。

「結局彰君を利用しているみたいで、なんか嫌だな……」

あの時と同じように、この子の助けになりたいと思いながら、この子に助けられている。

急に、彰君が僕の手をぎゅっと握り締める。

「ありがとう」

とびきり明るい笑顔。向けた相手を信じきっている、そんな笑顔。

「ひやつは―――！」誰も僕らの邪魔をちいい

抱きついていたら、さすがに読まっていたのか避けられた。く

そう。でも好き。

『近所に何事かと思われるからも』

「はい……すいませんでした

また怒られた。一度どじめんだ。

ん。  
数え切れないな。

『どうせじばらくは時間が空くのだから、その間に好きだけ遊ん

でもりこなせこ

からすさんは当然、僕に対して言つている。小学四年生に遊んで

高校一年生か……構うものか。僕たつて乾君にまづう!! 膝の上で読んでもらうからな!! 僕が下だけど。

「ジヤあ本業しつ木。廻りでまつ」

卷之二

二の室

この世にあるのか！？

「からすさん僕と会った時本読んでたじやん。ほんとのほんとに

「どうして？」

『あれは参考書よ。それなら多少はあるけれど、あんなもの面白く

はないでしょう》

参考書……か。いや、彰君の話を思い返すと阿貴ちゃんはむしろそういうのを読んでもらっていたのかもしれない……えー、そんなのつまんなーい。死んだ後でそんな知識絶対使わないし。いやまあ、生きている時でも使わなかつたかもしれないけどさ。

『リリ』にある娛樂と言えば、あれこれ

からすさんが指差した先は、テレビの脇に置いてある箱。確かに

「中見てもいい？」

返事がないことを了承の返事として、僕は彰君と一緒に箱に近づき、中を覗き込んだ。

……なんだつけこれ？ 子供の頃にお隣さんの茜ちゃんせんちゃん紅ちゃんいろちゃん家で見た覚えがあるんだけど……名前が出てこない。

「ファミコンだ」

彰君ナイスプレイ！ それそれ。すっかり忘れていた。この白くて赤いゲーム機の名前。

『ファミリー・コンピュータ、と呼びなさい』

「へえ、正式名称はそう言うんだ。これ」

なるほどね、それでファミコンなのか。どうでもいいけど。

『ファミリー・コンピュータも知らないなんて……男のくせに情けないわね』

「この人は何を言つているの？ ほんと、ゲームのことになると執着の仕方がおかしいんだよなあ。

「だけど、僕らがあそまあ、時間が空く間、からすさんは何をしてるの？」

『私は準備をする、と言つたでしょ』

「いやそれは覚えてるけど、具体的に何をするのかなって。僕が好きにしてて大丈夫？」

『ええ。私は私が着替えていた時のあなたと同じ状態になるから。外のことは関係ない』

「……あれですか。なんか心配になつてきたんだけど、ほんとに大丈夫？ 手伝うよ？」

『大丈夫よ』

いつも通りの即答での肯定。いついかなる時でも不平不満など決して口にしない。この人は一体どういう教育をほどこされて育てられてきたのだろうか。逆に心配になつてくる。

『たまには息抜きをさせてもらつから』

からすさん……ほんとはファミコンしたくじょうがないんですね。うん。なんか安心した。

僕らがからすさんの家を発つた頃には外はすっかり暗くなっていた。  
その暗がりの中を、僕らは予定通りまっすぐ?出口?へと向かつた。

文字通り、まっすぐ一直線に。

彰君を抱えたからすさんが進行方向に存在する家やビルなどの障害物の上を、走るというより飛び移つて進んだ。そんなことをすればすぐに騒ぎになつてしまふ、はずなのだけど、でもそうはならなかつた。

周りには僕らが見えていないのだ。駐車場で清寺さんが破壊した車のように、誰も気付かない。

僕には見当もつかないことだけれど、きっとこの数時間でからすさんの力は相当に向上したんじゃないだろうか。建物の上を通るというのは、高層マンションから飛び降りたくらいだから以前にもできたのかもしれない。だけど、周りから認識されなくなるというのは今までまったくできなかつたことははずなのに、今はそれを実行するのに苦心している様子すらない。

あの暗闇の中で、この人はどれほどの修練を積んだのだろう。大変だつたって、それくらいは言つてくれてもいいのに。

でも、それは僕のわがままなんだろうな、そう思い至つたところで僕は、これだつてそうかと、からすさんの家を発つた時から抱えていたことを今ようやく口にして、思つた。

「二人は、このまま進んでもいいの、かな」

僕らは既に?出口?までの道のりの半分以上を踏破していた。今は休憩のために立ち寄つた自動販売機の前でお茶を飲んでいて、そこで僕は、今更だとは思つたけれど、からすさんと彰君にそう聞いた。

『質問の意図が分からぬのだけど』

彰君もからすさんに同意見なのか、困ったような表情で僕を見上げている。

「僕は、あんなたちになりはしたけど　かあさんには大事な人に会えた」

思い描いていた通りではなかつた。あれは思つていたよりもずつと喜ぶべきことで、それがとてもつらくて、でも　だから、それを知ることができて良かつたと、思えるから。

「二人はいいのかなつて、思つてや……」

?外?に出れば、恐らくもうここに戻つてくることはないだろう。  
?外?に目的地があるのでなく?外?に出ること自体が目的なのだから。そして出でてしまえばもづ、誰にも会えない。偶然?外?に出てきてくれて、偶然?外?で出会つ、なんて都合のいいことが起きない限り。

『私に会いたい人間はいない』

「僕も、いいよ」

からすさんが一切の迷いを見せずに告げ、それに続くよつに彰君も否定した。

からすさんは　この人がそう言つのなら、きっとそなんだろう。この人は、自分を偽らない人だ。この人がそう言つてことは、それが本当か、もしくはそう決めたつてことなんだろうと思つから。氣を使うとかそういうことじやなく、自分自身で。だけど

彰君は、彼が今日生まれた際の話をしていた時、家に帰りたいと思つた、そう言つていた。

あれは自分の置かれた状況を知る前のことではあるけれど、知つたからといって、その思いが消えるのだろうか。

この子はまだ親に甘えたい年頃の子供で、だからきっと、そんなはずなくて、

「本当に、そう思つてる?」

しゃがみ込んで目線を合わせると、彼はすぐにそれを逸らした。

僕が人に言えることじゃないけれど、Jの子は嘘をつくのが下手だ

いや、そうじゃないのか。

Jの子は、ほんとは嘘をつきたくなくて、でもそれを我慢して、嘘をついているんだ。

「本当のことを見つたらわがままになる、って思つてるんでしょ」両手で彼の頬を包んでこちらを向かせ、額同士で触れ合つと、彼の体温が伝わってきた。

「違うよ。これは、僕のわがままなんだ。僕が嫌なんだよ」

彼は僕から離れて、今度はまっすぐに僕の目を見て、だけど聞いたこととは違うことを言った。

「でも……じゃあ、新仁さん、は？」新仁さんだって

『私は私が思つたことを思つた通りに言つていい』

からすさんは　と僕が答える前に、彼女自身が彰君の逃げ道をふさいだ。

僕がからすさんの前に立ちふさがつた時のこと思い出す。この人は自分に嘘をつかないだけでなく、人にもそれをさせない、厳しい人だから。

彰君は服のすそを掴んでうつむいて、でもしばらくして意を決したように、顔を上げた。

「……会いたいよ。会いたいけど、そのせいで一人に迷惑がかかるのは、嫌だ……」

『あなたがそう思うのなら、そうしましょう』

彰君の答えを聞いて、からすさんは彼を抱え上げた。それは移動するための準備。彼は目を閉じて体を預ける。彼の望んだ通りの結果に。

「あ、からすや……ん？」

諦めきれなかつた僕がからすさんを止めようとした時、彼女は？

出口？に背を向けた。

「……どうして？」

不思議そうに見上げる彰君。それに彼女は

『迷惑でなければいいのでしょうか?』

そうなんだ。この人は厳しいけどでも、彰君に負けないくらい、やさしい人なんだ。

たどり着いても今までと同じよう、ただいま、とは言えない。それは分かつてる。だけど、僕がかあさんに言いたいことがあったように、彰君にだってそれはあるはずなんだ。

彰君が住んでいた場所は彼の父親が勤めている会社の社宅で、都巿の中心部からはやや離れた位置にある広大な敷地に点々といくつもの集合住宅が建てられていた。

集合住宅にはそれぞれアルファベットが記されていて、AからJまでが等間隔に並んでいる。それらの間には公園や、余裕を持つて野球ができるグラウンド、テニスコートなどが備えられていた。彰君の案内に従つて僕らはE棟の階段を上る。ここに入口にはオートロックの扉のような障害はなく、僕は安心していた。からすさんが力でそれらを破壊する必要が生じなかつたからだ。この人もさすがに他人のものにあんな真似はしないだろう、と思いたいのだけれども。

「もうだいぶ遅い時間だけど、出でくれるかな」

時計がないので正確な時間は分からなければ、もう深夜と言つていい時間だ。既に寝ているか、起きていたとしても、人が訪ねてくる時間ではない。

『出でくなれば、こちらから入つていけばいいでしょう』  
やつぱりあれをやる気なのか……人様の家をあはしたくないから心配してゐるのに。ただでさえ難しい状況なんだからさ。

「ここが僕の住んでいたところ」

四階、建物の正面から見て左端の部屋。彼は緊張した面持ちでその扉の前に立つた。そして、一度目を閉じて深呼吸をしてから、インターホンの呼び出しボタンを続けて三回押した。

しばらく待つて、これは誰も出でくれない からすさんがそう判断してドアノブを握つた時、

『……はい』

インターホンから、不審に思つてこちらの様子をつかがうような声が聞こえてきた。

「お母さん……彰、です」

聞こえた声に、一語一語自分で確認するようにゆっくりと、彼はそう告げた。

それからしばらく経つて、扉の向こうに人が来る気配がしてから、静まり返った廊下に鍵とチヨーンロックを外す音が響いた。その後、恐る恐るという様子で扉が開かれていく。

「彰……」

扉を開けた女性が、己の前に立つ彰君に信じられないものに対する視線を送る。

「……お母さん、僕は、あの」

「とりあえず中に入りなさい」

彰君のお母さんは彼が言いかけた言葉をさえぎって彼を家の中へ招き入れる。僕を一切見ないことを考えると、からすさんがまた周りからは見えないようにしているのだろう。

「何も言わなくても分かっているのよ。あなたの好きにしなさい」

僕も家中に入ったのを確認してから彰君が後ろ手に扉を閉めた途端、彼の母親は、僕にはまるで意味の分からないことを言った。彰君には、分かっているのだろうか。

「僕は……言いたいことがあって、それで帰ってきたの。すんだらすぐに行くから」

「……何を言っているの？」

かみ合わない会話。それはなにも死んだ息子が帰ってきたから、そういう理由ではないように思える。この人はこの状況に驚いてはいたけど、取り乱してもいい。だけど

「僕は、本当は、天野彰の偽物です。だけど、思っていることは一緒だから。覚えていることは……なくなってしまったことがあると思うけど、でも覚えてるから。だから僕は、天野彰の代わりに、僕は幸せでしたって、ありがとうって」

「そつ。あなた彰じゃないの……そつよね。あの子がそんなこと言うはずがないものね」

「ちが、僕は　違うナビ、違うナビ一緒になんだ。僕は本当にそう

」

「本当にあなたが彰だと言つなら、あの子がどうやって死んだのか  
言つていらん下さい」

「……車にひかれて、それで　」

「どうして車にひかれたの？」

「……横断歩道で立ち止まってたから」

「どうしてそんなところで立ち止まっていたの？」

「……お財布を拾おうとしたから」

「その財布は誰が落としたの？」

「……」

「黙つてないで言つなさい！」

「……お母さん」

彰君を前にして、決して喜んでいるようにも見えなかつたのは、  
そういうことなのか？

「この人が彰君と横断歩道を渡つてゐる時に財布を落として、でも  
この人はそのまま歩いていつてしまつて、それに彰君だけが気付い  
て、彼が財布を拾おうとしたところに、車が突つ込んできた。

もしその通りだつていうのなら、だから、この人は分かつて  
なんて言つたのか？　この人は、彰君がここに自分を

「……本当なのね。なら私が憎いでしょ？　あなたは私のせい  
死んだのだから」

「そんなことない……そんなことないよ。僕はお母さんが憎くなん  
かない。誰かのせいだなんて思つてない。僕が悪いんだから。僕が

周りを　」

「嘘をつくな

彰君のお母さんが、彰君を殴つた。振り上げた平手を、彼の頬へ  
打ちつけた。黙らされた彼はうつむいて、でも、もう一度母親をま  
っすぐに見つめる。

今君は、どんな顔をしてお母さんを見ているの？

「どうしたのー？こんな夜中に大きな声出したら近所迷惑だよ」  
家の奥へ通じる廊下から、この場にそぐわないのん気な声を上げて、二十歳くらいの女性が目をこすりながら玄関にやつてきた。いかにも、今まで寝ていたのに、という様子で。

「彰が会いに来てくれたのよ」

彰君の母親は今までの態度が嘘のよつに、笑みすら浮かべて今この場に来た女性に言つ。そして女性は、彰君を見て、

「……おにいちゃん？」

確かに、そう言った。

彼女はどう見ても成人した女性だ。なのに……なぜ小学生の彰君を、そんな風に呼ぶ？

「阿貴……すっかり大人だね」

彰君は、この女性を平然と、妹の名で呼んだ。

「当たり前だよね。もう二十年も経ったんだから」

……誰もこの子が今朝死んだなんて言わなかつた。生まれた、そう言つていただけだ。僕はずつと勝手に、この子も、僕とかりすさんのように最近死んだものと思つていた。

「でもその当たり前が、すごく嬉しい」

違つたんだ。この子は二十年前に死んで、今朝にその時のまま生まれ変わつた。そして、この子自身それを知つていた。あの人達が全部教えてくれた。この子が、そう言つていた。

「お父さん、は？」

「仕事で　出張で、今はいない、の……」

無表情で彰君を見下ろす彼の母親、その後ろには怯えた表情を浮かべた彼の妹。

「そつか……なら、お父さんには一人から伝えて。僕は、僕はね、幸せだつた。お父さんとお母さんの子供で、阿貴のお兄ちゃんだったことが、本当に幸せだつたんだ。だから

その愛する家族に受け入れられない。すべて承知の上で、この子はここに来たのか。

「ありがとう。僕の大切な人でいてくれて、ありがとう……これだけは、言いたくて……」

だからこの子は、こんな拒絶の意思にせらざれても、何も変わらない今まで

「黙れ！ お前はあの子じゃない！ あの子の振りはやめろ！ あの子が私を許すはずがないんだ！ 私があの子を殺したんだから！ あの子は絶対に私を許しはしない！」

肩を震わせて、声を張り上げて、彰君のお母さんは、彰君のすべてを否定した。

彰君は、何も言わない。服の胸の辺りを握りしめて、それでも、母親から田を逸らさない。責めているはずはない。ただ、嘘にしたくないだけなんだ。

「ようやく、あの子がいないことが当たり前になってきたの…… ようやく、あの子のことを忘れられそうなのよ……」

彼の母親はそれに耐えきれなくなつて、床に崩れ落ちた。両手で顔を覆つて、彰君を自分の世界から追い出して、

「お願い……もう許して……」

自分の息子に、小さな子供のように泣きながら、そう懇願した。

「……ごめん、なさい」

彰君はもうお母さんを見ていなかつた。顔を伏せて、服を掴んでいた手をゆるめると、そのまま一度と顔を上げることなく、最愛の家族に背を向けて、外へ飛び出して行つた。

「あなたは……誰なんですか」

天野阿貴さんが僕を見る。そつか……ただ相手にされていなかつただけだつたのか。当然だ。死んだはずの息子が帰つてきたんだ。それ以外のことには執着する理由なんてない。

「僕は 僕らは天野彰君の 友達で、彰君をここへ連れて來たのは、僕なんです」

なんのための、誰のための言い訳なのか、自分でも分からぬ。でも

「あの子は 彰君はすゞしい子で、やさしくて、だから 嘘  
じゃないんです……」

涙をこらえるために、手をきつく握りしめた。そんなことは、許  
されないから。

「……知っています」

初めて僕に顔を向けた彰君のお母さんは、彰君と同じ顔をしてい  
た。

自分が罪を背負った人間だと思つている。自らの罪を認め裁かれ  
る時を待つてゐる咎人。

僕は、この人に何も言つことができない。

無言で背を向けて、僕も外へ出た。後ろ手に閉めた扉、その奥で  
人の動く気配はない。

ただ、僕が傷つけた人の泣く声が聞こえるだけ。

「……彰君を探さないと」

僕が言い終わるのを待たず、からすさんが廊下の塀を飛び越えて  
宙へ躍り出た。そしてあつといつ間に地面に到達し、同じく既に下  
まで降りていた、今も走つて遠ざかっていく彰君の背中を追いかけ  
る。

彰君がからすさん達のような人間離れた身体能力を見せたこと  
はない。すぐに追いつく、はずだけど、からすさんはそうはせずに、  
体の主導権を僕に預けた。いや、預けてくれた。

例え、からすさんのように扱えなくとも僕と彰君の走る速度の差  
は大きい。程なくして、彰君が公園に差しかかったところで僕は彼  
の名を呼んで、その腕を掴んだ。でもその手はすぐに振り払われて、  
だけど立ち止まつてはくれて、僕に背中を向けたまま、うつむいて  
いる。

「……彰君、ごめん。僕のわがままのせい……ごめんなさい……  
許されることじゃない。それは分かつてゐる。それなのに、僕は許  
されたいと願つてゐる。この子なら、きっと許してくれる。そう思つ  
て謝つてゐるんだ。なんて 汚い。

彰君が振り向いて僕を見上げる。僕はさぞ哀れみを講つよがないやらしい顔をしているのだろう。この子や、あの人とはかけ離れた、醜い顔を。

「ありがとう」

「……どうして？」

免罪ではなく感謝の言葉。この場にもつとも似つかわしくない言葉を、彼は口にした。

「嬉しかったから。お母さんと阿貴に会えて、僕は本当に嬉しかったよ。ほんとはもう会えないはずだったのに、それでも会えた。遙さんが行こうって言ってくれたから、新仁さんが連れてきてくれたから、僕はもう一度大切な人に会えた」

彰君が僕に笑顔を向ける。彼を苛んでいる苦痛を覆い隠すための、笑顔を。

「だから、ありがとう」

僕は、この子にこんなことをさせるために、こんなことのために、行こうと言ったのか。

さつきこぼれた涙がまた溢れそうになるけれど、からすさんの体を傷つけるほどに拳を固める手に力を込めて、抑える。

僕はこれ以上、卑怯者になりたくない。

僕が我慢するだけで何もできないでいると、突然手の力が抜けて拳が解かれる。事態を把握する間もなく自由を失った手が振り上げられ、そのままその手が、彰君の頬を打つた。母親に打たれたところを、それよりもさらに強い力で。彼はなすすべもなく、地面に倒れ伏した。

何が起こったのか分からず、倒れたまま戸惑いの表情を浮かべ僕を見上げる彰君に、

「ふざけるな」

からすさんが、鼓膜を震わせる声で言った。

僕は反射的に抗議の声を上げようとしたけれど、話すことができない。何も、できない。

「まだ幼い子供が母親にあんなことを言われて、笑つていられるはずがないでしょー！」

怒つてゐる。からすさんは、本氣で彰君に怒りを覚えていふようだつた。見下ろした先で、頬を押さえている彰君の表情が、戸惑いから怯えたものへと変わつていく。

「あなたはどうしてそんなくだらないことをするの？」

声の調子はもういつもと変わらないように聞こえるけれど、でも、彼女の怒りは消えていない。

そして、まるでからすさんの怒りが伝染したかのように、見上げる彰君の表情も怯えをさらに塗りかえて、怒りに支配される。

「嬉しかったんだ！ 嬉しかったんだから、笑つてもいいじゃないか！ あの人の言ったことは本当なんだ。本当のことと言われたつて何も思わない。僕は、嬉しかつただけだ！」

この子がこれほどの怒りを 感情のままに叫ぶところを見るのは、初めてだつた。

「子供が母親をあの人なんて呼ぶんじゃない」

立ち上がろうとした彰君を、からすさんはもう一度殴つた。彰君はまた倒れて、だけどその目に宿つた怒りは、さらに強さを増す。

「……あの人は母親じやない。お母さん、なんて呼んじやいけなかつたんだ。僕は？創造主？<sup>イグノーブルス</sup>が創つた千十一番目の？<sup>ライティス・レイス</sup>理法の眷属？なんだから……僕は天野彰じやないんだから！」

「それがなんだっていうの？」

からすさんは座つたままの彰君の胸ぐらに手を伸ばし無理矢理に立たせると、そのまま手を離さず彼をほとんど吊るし上げるようにして、彰君の顔を自分の目の前に近づける。

「あなたにとっては、あの人達は間違いなく母親で、妹なのでしょう？ なら、あなたが誰だらうが、何だらうが、そんなものは関係ない」

彰君は、歯を食いしばつて、でもそこにはもう怒りはなくて、ただ耐えている。

「じゃあ、僕は……どうすればいいの?」

「あなたのしたいようこそすればいい。無理に笑うなんじことじま、しないでいい」

からすさんは彼から手を離して、そしてすぐに自分のもとへ抱き寄せる。

「あなたが泣いても、お母さんを責めることにはならないのよ」「彼女の服を掴んで、彼女を見上げる彰君はそれでも、震える唇を引き締めてこらえる。

「やさしい子。あんなことを言われても、お母さんが好きなのね」「そんな彼を見つめて、頭に手を置く。でも彼は嫌がらない。まつり見つめ返していく。

「…………うん。大好き」

もつ声には混じっているけれど、それを認めたくなじようこそ、服を掴む手に力を込める。

「…………つらかつたわね」

頭に置いていた手を後ろに回して、抱きしめた。そのまましばらく時間が過ぎてから彰君はよじやく、我慢するのをやめた。

あれから僕らはもう一度、出口へに向かい、既に田舎とこいつといろまで迫っていた。

僕らはあの後、終始無言だった。

僕は、もう口を利いてもらえないんじやないかと思つて、それを確かめるのが怖くて、黙つていた。

からすさんは、きっと必要がないから何も言わなかつた。

彰君は、泣き疲れて眠つてしまつた。

無理もない。今日生まれてから今まで、この子の心が休まることが片時もなかつたのだろうから。

からすさんはそんな彰君をおぶつて、出口へある橋へ歩いていく。いつもしていると、なんだかこの人がこの子のお母さんみたいだ。本人に言つたら怒られそうだけど。

「あの……からす、さん」

『なに』

僕は彼女が返事をしてくれたことに少しだけほっとして、でもすぐそな場合じゃないことを思い出して、ずっと言おうと思つていたことを、言つた。

「さつきは……あ、いやさつきでもないにせど、その……あつがとう~出口~に着くまでこは言おひ。そんな、男のくせに情けないことを思つていて。そして~出口~を田前にしてよつやく、それだけ口にした。

『礼を言われるようなことはしないでしょ~』

……この人はいつもこう言つんだな。僕を責めているわけでもなく、ただそう思つてる。

「そんなこと、ないでしょ。だって、からすさんがああしてくれなかつたら彰君は今よりずっとつらかったんだし……それで、それは僕のせいなんだから、お礼言つたつて……」

『この子はあなたの責だと思っていない。それでも気に病むところは、よけいな世話よ』

「いや、でも……だつて、僕が言こ出なきやそもやも」

『関係ない。この子は断ることもできた。その上でこの子は選んだのだから』

「そうかもしれないけどさ……どうしても、気にしないなんて無理だよ」

『だとしても、あなたがいつまでもそういうしていれば、それを見たこの子は自分を責める』

「……そうだね。それは、嫌だな」

『この子は自分がつらい時でも人を心配してしまうから、僕はこの子にそんなことをさせたくないから、やう思えれば僕は、もう大丈夫だ。』

ふと、からすさんはああいうかたちで僕を励ましてくれたのだろうか、と思つてもう一度お礼を言おうとしたけれど、でもまた同じことを言われるだらうなと迷つて『この子』

「……うん……ここ、どこ?」

耳元で眠たそうな彰君の声が聞こえて、それに僕は、

「あ、ごめん。起こしちゃったかな」

いつも通りの僕がする反応ができたと思つ。こんなことを思つている時点でいつも通りではないのかもしれないけれど、この子に伝わらなければ、関係のないことだ。

彰君が今まで垂れ下がっていた腕を絡ませて、ぎゅうと身を寄せてくる。

「寒いの?」

からすさんの家を出た頃、この子が少し寒そりしていたことを思つ出して、そう聞くと、

「……うつさ。あつたかい」

からすさんの肩に顔を埋めるようにして、小さな、でもほつきつした声で、そう答えた。

『目が覚めたのなら自分で歩きなさい』

からすさんが急にしゃがんで、彰君の足を支えていた手を離す。  
「もおーーー！　いいじやんちょっとくらい。起きたばっかりなん  
だからやー」

僕は抗議の声を上げたけど、彰君はからすさんに言われた通り背  
中から降りると、すぐに僕らの前に駆けて来て、僕らを見上げて  
「大丈夫。もう歩けるから」

笑顔を見せてくれた。僕がそう思いたいだけなのかもしれないけ  
れど、その笑顔はあの時のような、つらくてたまらないというよう  
なものではなくて、本当の、この子の笑顔。

夜が明けようとしていた。

太陽が姿を現すにはまだ早いけれど、空は白み始めている。ずい  
ぶんかかってしまった。

僕らは、遂に？出口？の前に立つた。

?出口？の橋は鉄筋とコンクリートで建造されていて、全長およ  
そ二、三十メートル程度、片側一車線の道路とその外側に歩行者用  
の通路が配置されている。

その橋の中心辺りの欄干らんかんに人が一人、背を預けて佇んでいた。考  
えつる限り、こんな時間にこんな場所でそうしている理由は、一  
だろう。

僕らを待っていた。僕らの行く手を阻むために。

からすさんは彰君の手を取つて、臆することなく道の真ん中を歩  
いていく。

欄干にもたれていた人物は向かつてくる僕らを見て動き始める。  
僕らの進路へ。

真に橋の中心となる位置で僕らは対峙する。だけど、今僕らの目  
の前にいるのは

?僕？ だつた。

何も、言葉が出ない。無言で向かい合つ。先に動いたのは、から  
すさん。彼女は

「連れてきました」

向かい合っている？僕？に差し出すよつて、彰君の背を押した。

そして？僕？は

「じゃあ、続きをしましょつか」

?あの時？と同じようて、ジャージのポケットからそこそこ収まるはずのない長大な剣を引き抜いて？あの時？と同じようて、地面に突き立てた。

でも？あの時？これを見て「なんで刺しちゃうのかなー」と言つていた人は、ここにはいない。

「清寺さんは、どうしたんですか？」

そんなことはどうでもいい。そう思つている。それなのに、それでも聞いた。

僕の姿をした 加賀晴子。

「子供に興味本位でバラバラにされた昆虫みたいになつてかわいそうだつたから、ちやんと潰しておいてやつたわよ」

それは僕らが立ち去つてすぐか、それとも どうでもいい。これもどうでもいい。でも

「その姿は、なんですか？」

「耕四郎に派手にやられた時、ちょうど近くに転がつてたのよ。なんか手足が短くて動かしづれーんだけど、まあ贅沢は言つてらんねーわよね」

どうだつていはづなのに、どうでもいいから、僕はこんなことばかり

「からすた 鳥文字さんがここに来るつて、知つてたんですか？」

「あの後会つてもいいのに」

『あの馬鹿を始末した後こいつやって連絡したら、ここで待つてくれ、つて鳥文字ちゃんに言つてね。まあ、こんなに待たされるとは思わなかつたけど』

からすさんのような、直接聞こえてくる声。じ丁寧に連絡を取つた時の通信手段を再現して説明してくれた。知つたことじゃないこの

とを。

「ここで、何をするつもりなんですか？」

「だから、続きだつたでしょ。あんたほんと人の話聞かねーわね」

知つてて聞いたんだよ。それを聞くのが怖いから。でも、もつそれ以外聞くことが無い。

「からすさん……からすさんは、知つてたの？ 知つてて、ここに来たの？」

《ええ》

「……なんで、ここに来たの？」

《この子を殺して私の望みを叶えるため》

「……嘘だ。そんなの、嘘だよね？」

《嘘をつく理由がない》

「じゃあ、なんでまつすぐここに来なかつたの？ それが目的なら彰君の家族に会いに行くことなんてなかつたじゃないか」

《最期に会うくらいは構わないでしきう》

「だつたら！ その後は！ どうして彰君に怒つたりしたんだ！」

《ただ気に入らなかつただけ》

「……なんでそんなこと言つの？ ねえ？ からすさん……お願いだから嘘つて言　」「

「もういい」

彰君が僕を見上げている。あの時？と同じ死を望む姿。なんで、またそんな顔をするんだ。

「遥さん、もういいよ。僕も、そうして欲しいと思つてるから」

「そんなはずない！ だつて君は……笑つてくれたじゃないか。あれは、嘘だつたの？」

「……嘘じやない。嘘じやないけど、もういいんだ。僕には、十分すぎたくらいだから」

信じない。僕は、そんなこと信じたくないから、信じない。信じたくないのに

「嫌なんでしょう？一人ともほんとは嫌なんだよね？なんで、そう言う言つてくれないんだよ」

僕だけだったんだ。僕だけが何も知らなくて、僕だけがそなうだと思つていた。

「友達だと思つていたのに！僕には僕なんかには……本当のことは言つてくれないのか！」

「私は、そう思つて『る』

黙々とこねる子供のように叫ぶだけの僕に、からすさんは自分の声で、

「あなたとの子は、私に初めてできた友達だって」

今の僕には信じることができないことを、それでも信じたいことを、言つた。

「……じゃあ、どうして？」

そう思つてくれているのなら、ビ�してあなたはその友達を殺すの？

「こうすることができないと信じているから」

彰君が無言で頷く。嘘が下手なこの子が、まっすぐに僕を見て。……そうか。僕以外の全部は、これが、こうすることが正しいって認めているのか。それも、今に始まったことじゃない。ずっとそうだった。僕が知らなかつただけ。

「分かつた。もう止めない。でも

「そうか。だつたら、僕の本当を隠す必要もない。

「でもさあ、順番でいけば、次は僕の番でしょ？」

僕を見上げる彰君の横をすり抜けて、加賀さんの前へ。コンクリートに刺さった剣はなかなか抜けなかつたけど、程なくして僕の手に収まつた。からすさんが手を貸してくれたのだろう。要は僕の意見に異論はないということか。言いくるめる手間が省けたな。

「あんだけ勝手なことわめいておいて、出した結論がそれ？いい根性してるわねえ」

「あなたには関係ない」

人の無様な姿を見てにやついている人間がまともな振りをするな

まあ、どうだつていい。

加賀さんの前から取つて返して、彰君の元へ戻る。彼はあの時と同じように、もう何も見てはいなかつた。

剣を握る僕の手がわずかに震えている。本当に無様だ。この期に及んでもまだ怖いのか。

なら、思い出してみろ。

どうしてかあさんから逃げた？

どうしてこのまま死にたくないと思った？

どうして彰君の家族に会いに行こうと思った？

戻った時に不都合になることを知られたくないからだ。

彰君を殺せば僕はまたかあさんと暮らせるのに、そう思ったからだ。

加賀さん以外の誰かが迎えに来ることを期待して？外？へ出るまでの時間稼ぎをしたかつたからだ。

……そうだ。僕は、ずっとこの機会を待っていたんだ。

?あの時?のからすさんの動作をなぞるように、僕は剣を頭上に掲げて、構えた。

この子を許す人は誰もない。そう言つたのは、からすさん。

本当にその通りだつた。この子の家族ですら、この子を許しはしなかつた。

誰かが必ずこの子を殺す。からすさんが、加賀さんが、それ以外の誰かが。

なら、僕がこの子を殺してはいけない理由はなんだ？

だから、僕がこの子を殺す。

剣を振り上げたまま対峙していると、突然に、ブラウスの上に羽織つていたカーディガンが消えて失せた。この天野彰という子供の紛い物が、その全能の力を使つたんだろう。

思わず、剣を握る手に力が入り、歯をきつく食いしばる。

あんな殊勝なことを言つっていても、いざとなればやはりこれが…

…まあそれが当然だらうな。やつ簡単に諦めることなんて、できるわけがないんだ。

だけど、せっかくの反撃も不発ではその甲斐はない。この子がまた大切な何かを失くしただけ。持っている力が大きくても所詮は子供、清寺さんが言つていたように、扱いきれないんだらう。

もひ、この子にできることはなにも無い。加賀さんはこの力を立て続けに使うことはできないと言つていた。それはつまり、今のこの子は、本当に　ただの子供だ。

いや、そうじゃなかつたな。この子は初めから、どうでもいる普通の子供なんだかい。

「己を殺そうとする者を殺しそこねた子供は、それでも変わらない死を望む顔をしている。

この子を殺す僕は、どんな顔をしているのだらう？

僕は、剣を、振り下ろす。

金属が硬いものにぶつかつた時の甲高い音が辺りに響いた後、僕の手から剣が落ちた。

僕はその場に崩れ落ちて、彼を見上げる。

僕を、自分を殺そうとした人間を案じている、彰君を。

「…………どうして？　どうして君は、そつなんだ……どうして、あんなことをするんだよ」

彰君は何も言わない。僕をただ心配そうに、申し訳なさそうに、見つめるだけ。

でも、この子の答えを聞かなくとも、理由なんて決まってる。僕が殺しやすいように、だ。僕が？力？を恐れて躊躇しないように、あえてあんなことをした。

「わざと、だよね？　本当は僕を消せたはずなのに、わざと服だけを消して……僕は　僕は！」

彼の肩を掴んで、懇願するように、問い合わせる。そんな資格もないくせに。

「僕は君に殺されようとしたんだ。からすさんが君を殺すのが怖く

て、君が殺されるのが怖くて……だから逃げるために、ただそこから逃げ出すためだけに君に そんなことをすれば君が大事なものを失くすって分かつて、そうなつて欲しくないなんて言つておきながら、そうなれば君が傷つくだけだつて分かつっていたのに

だから僕は君を殺すと、ただ僕のためだけに君を殺すと、そう言った。それなのに

「君は賢い子だから、分かつていたんだりうへ なら、憎んでよ。自分のことしか考えずに君を見捨てた僕を、お願ひだから……嫌いになつてよ」

「……そんな」と、できない。したくなじよ」

彰君が僕をまっすぐに見つめる。一切揺れる」との無い目をして。「僕、言つたでしょ。遙さんのことも新仁さんの中も嫌いになつたりしないつて。だから、ならない。僕は、最後まで一人を好き今までいたい」

それは以前にもこの子が見せた目。嘘偽りの無い本心だと明らかに分かる、そんな目だ。

僕は立ち上がり一度両の拳を固めると、振り返り、「お願いします」

加賀さんを、この子の死を望む人を視界に入れてから、「彰君を、助けてください」

そして、再び跪き、両手をついて、顔を伏せて、懇願した。

背後で何か言いかけようとした彰君を無視して、僕は続ける。

「僕は戻れなくても どうなつても構いません……この子を、殺さないでください」

加賀さんは大きくため息をついてから「まあ、言ひてーことはいろいろあるんだけど」そう、うんざりしたように言つた後、「とりあえず、頼む順番が違うんじゃねーの? ねえ? 烏文字ち

やん?」

すぐに楽しそうな声色で、からすさんに語りかける。

「……からすさん」

『なに』

まるで変わらない気配。この人には何の興味もないことなのかも  
しない。でも

「諦めて、ください」

『何を?』

すぐには言葉が出ない。食いしばった歯をつまみ解けない。でも、  
僕はそれを口にする。

「全部」

自分が何を言っているのか分かっている。全部承知の上で僕は、  
頼んでいる。

「からすさんの全部。今まで築いてきたもの、この先にあるはずの  
もの、全部 諦めて」

『この子を助けるための犠牲になれ、と言いたいの?』

「違う」

そんなこと頼んでない。僕はそんなことを頼めない。僕が頼んで  
いるのはただ

「僕のわがままの、犠牲になつて」

彰君のためじゃない。これは僕のわがまだ。僕が、嫌なんだ。

『……あの子はそんなことを望んでいないといつのに、それでもあ  
なたは、それを望むの?』

「それでも僕は、そうしたい」

彰君が望んでいなくても。何もかも失つても……からすさんを犠  
牲にしてでも。

『分かつた』

思わず伏せていた顔を上げた。ふざけるな、そう言われると思つ  
ていた。それなのに、

『私は私の意志で、その望みのために、私の望みを諦める』

彼女は僕のわがままを わがまだといつのにそれを、受け入  
れてくれた。

「……からすさん、本当にいいの?」

## 『ええ』

迷いのない答え。いつも通りの、あの返事。それはきっと、この

人が僕を今でも

「何を理由にそんな間の抜けた顔をせんのか知らねーけど、私は順番が違つつただけで、殺さねーでやるなんて言つた覚えはねーわよ」

加賀さんが腕を組んで僕を見下ろしてくる。せっかくは一転して、実際に不機嫌そうに。

「どうしても、この子を殺すんですか？ 殺さないで収まる方法は、本当にないんですか？」

「あつたらそつしてるつづーのよ。あんた、私らが好んでその子を殺したいんだとでも思つてんの？」

殺したくはない。だけど、そうせざるを得ない。そうだとこうのなら

僕は一度は落とした剣を拾い上げて、加賀さんから視線を外さないまま立ち上がる。

「方法が無いのなら、僕があなたを殺して、叶えるだけだ」「僕が望むことはただ一つきりだ。それ以外のものは、必要ならすべて犠牲にする。

「はあ、ほんといい根性してるわよあんた。自分さえよけりゃ他人なんだつていいのね」

「そうだ。僕は僕以外のことなんて知つたことじやないんだ」

だから僕は、僕のわがままを押し通す。

不意に僕の指を掴む小さな手。見れば、彰君が泣きそうな顔をして僕を見上げている。

「駄目……だよ。そんなことしないで。僕は」

「ごめ 違う。彰君、僕はもう引き返すつもりはないんだ。終わつたらなんでも聞くし、なんでもするから、それまではここで待つてて」

彼の手を解いて、一步前へ出る。あつとあの手はつむきて、自

分を責めているんだね。」

「だとしても、このまま進む。

「からすさん、さつきは僕がって言つたけど、僕一人じゃ無理だ。

力を貸して」

「……それ、言つて恥ずかしくねーの？ 本氣でどうしようもねー奴ね」

「知つたことか。どうだつていいことだ。そんなことにいちいち構つていられるか。

『あの時のようにしないためには、私は体の維持以外のことをする余裕がない。恐らく、それでようやくまともに動けるか、あるいは

それでも無理か。それは承知していく』

「あの時 清寺さんと戦つた時、か。あの時は突然体が動かなくなつて、なす術もなく敗北した。今はそれを防ぐ 防ごうとする

ことで、からすさんは手一杯になる。それは

「僕にできる 僕がすることがあるんだね」

『私がこの体を動けるようにするから、あなたが動かして』

「……分かつた」

「この人のようにうまくできる。そんな風には思えないけれど、でもこれは僕が始めたことだ。本来、すべて僕がやるべきこと。だから、この人のようにはできなくても

剣を正面に構える。だけど切つ先の所在は定まらず、まっすぐ立つてしているだけでやつと。

「どうしたの？ 私を殺すんじゃねーの？」

それを見た加賀さんがうつすらと笑みを浮かべ、ぶら下げた腕、その両手の平を僕に向け、あえて隙を見せて挑発してくる。

清寺さんの時と同じ、圧倒的優位に立つ者が見せる姿。そしてそれは、恐らくその通り。

剣の切つ先が、加賀さんの眉間にとらえた位置で止まつた。加賀さんの顔から、笑みが消える。

僕がやらないと、そう思つた矢先にまたこの人に助けられている。

でもそれを気に病んでいる暇はない。既に体の主導権は僕に戻っている。僕はからすさんが？教えて？くれた形を崩さず構える。

『首を狙つて。そこがもつとも深刻な損害を与えられる』

「うん。じゃあいくよ、からすさん！」

思い出せ。これまでこの人がどうやってこの体を動かしていたかを。僕は、それを知つていいはずだ。

数歩の距離の先にいる加賀さんへ、駆け出す。

勢いを殺しすぎないように踏み込みながら、一度腰まで落とした剣を首めがけて払う。彼女はわずかに下がつてそれを避け、剣は空を切つた。離れた剣を頭上に構え直して、首の付け根へ振り下ろす。彼女は体を横に向けながららずらし、剣の軌道から外れた。地面に打ちつけた剣の切つ先を、逃れた彼女を追いかけるように彼女の体の中心へ向ける。突き入れるために力を込めた頃には、彼女はもうその先にはいなかつた。通り過ぎる刃の隣に、平然と立つている。

すべて紙一重。ようやくかわしているのではなく、見切られているがゆえに。

「っくそおおおおお！」

叫んで、明確な狙いもなく、体を回転させて全力で難いだ一撃を、彼女はもう避けもせず手の甲で受け止めた。ジャージのそでから出ている剥き出しの手。傷一つ付いていない。

『離れて』

からすさんの声で反射的に後ろへ大きく跳んだ。目の前を、剣を受けなかつた方の手、加賀さんが僕の懷へ潜り込みながら斜めに振り上げてきたその手が、通り過ぎていく。

「この短期間でよもそこまで鍛えたもんねえ」

加賀さんはそれ以上追つてくることはせずに、多少驚いているのか片眉を上げて、だけど、すぐにその表情は馬鹿にするように口の端を吊り上げたものに変わり、

「ただ、使う側がまるで話にならぬーけど」

言い終わるかという時に、どつ、という鈍い音を立てて、僕の左

腕が、地面に転がつた。

斬られた部位、腕の根元辺りを残つた手で押さえてうずくまる。出血がほとんどないことを考えれば致命傷にはなり得ない損傷。でもその苦痛はこれ以上ないほど僕を苛む。からうじて敵を視界から外すことだけは免れたけれど、それだけだ。

『痛みを消している余裕はないの。我慢して』  
「……うん。動けばなんだつていいよ」

派手に悲鳴を上げた後では説得力に欠けるとは思つたけれど、嘘じやない。大丈夫と言えば嘘になるけど、でも今この瞬間だつて、からすさんは僕と同じ痛みの中で、僕の手の届かない戦いをしている。そんなこの人に、これ以上甘えたくない。

落とした剣を拾おうと足元へ手を伸ばす。だけど、いつの間に近づいて来ていたのか、彰君が僕より先に剣を拾い、刃を下に向かた状態で抱えるように持つて僕の前に立つ。

「…………嫌だ」

まるで聞き入れる意思のない僕に苛立ちを覚えたのか、彼は一度うつむき奥歯を噛み締めてから、僕を睨んだ。

「僕はずつともういいって言つてゐるのに……それなのに、なんでこんなことするの？僕のためなんだよね？」

惑だな。僕は、こんなことして欲しくないんだ」

僕のわがままだつて

「……なら、もう頼まない」

彰君は僕をじつと見つめたまま、加賀さんの方へ後ろ向きに下がっていく。剣を持ち替え、素手で刃を握り、その切つ先を己の喉元に突きつけて。

「僕が死ねばいいんでしょう？」  
僕が死ねば、全部終わるんでしょう。

それは僕らにではなく、背後にある加賀さんに投げかけた 確認だった。

「まあねえ。あん時は自分で死なれちゃ困るしつつたけど、正直私はあなたの力になんの興味もねーのよね。周りがうるせーから適当に調べる振りしたけど……そうね、もうこの際そっちの方が手つ取り早くいいかもね」

問われた加賀さんは、食事の予定を変える算段でもするかのように死ねと言った。

「……彰君それは、駄目だよ。それだけは 」

恐怖 なのか、座り込んだまま立ち上がる」ともできず、それでも届くはずのない腕を伸ばし、

「知らないよ。遙さんだって僕が頼んでもやめてくれなかつたじゃないか」

結局、言葉すらも、届かない。

「僕が死ねば、遙さんと新仁さんは助けてもらひ。それができないなら、全部消してやる」

「何をもって助けることになんのかは知らねーけど、いいわよ。なんだろうが破格の対価であることには変わりねーだろ?」

僕を無視して二人の話は進んでしまつ。待つて……嫌だ。

それだけは、嫌なんだよ。

立ち上がろうとして、立ち上がれなくて、倒れこむようしてなんとか彼の前にたどり着くと、届かなかつた腕を、届かせた。剣の先端、彼の首に迫る刃を掴む。

「彰君……怪我、してるよ? 危ないから、手を離して……お願いだから」

「……いいよ」

剣を持つ両手から流れる血が刃を伝つて滴つてている。それが苦痛だつたのか、彼は素直に手を離してくれた。彼が腕を無造作に下げてから、彼の手が届かないように剣を離す。

「僕はそんなもの使わなくて、簡単に死ねるんだから」

一切の濁り無く、心の底から自分自身を拒絶して、そして彼は笑つた。

偽りではない笑顔。そこにあるのは無理矢理じゃなく、本当の、  
愉悦。<sup>ゆえつ</sup>

僕は、ただ僕がそれに堪えられなかつたから、それをやめさせるために彼を、彼の頬を打つた。

倒れるほどではなかつたけれど、彼は一瞬放心して、すぐに歯を食いしばつてうつむいて、小さく嗚咽を漏らす。とめどなく溢れる涙が、赤い頬を濡らした。

「つ……」めん。彰君……僕、は……「めん……」

僕が考えれば考えるほど、僕が動けば動くほど、この子を傷つけただけ。

彰君が顔を上げる。その目に宿つているのは憤怒でも、悲哀でも、愉悦でもなく、憂慮。<sup>ゆうりょ</sup>

「……遙さんのお母さん、泣いてたじやないか。あのままいいの？」遙さんは、お母さんが泣いてるのこ、放つて置くの？

「この子は 彰君は、やっぱり同じまでも、彰君で、だから僕は

「よくないよ。全然よくない。できることなら、今すぐこでも帰りたい」「だつたら

「だつたら」

「でもね。僕は、もう死んでるんだ。死んだ理由なんか関係ない。死んだら、そこで終わらなきゃいけないんだよ。でも僕は卑怯だからさ、それでも帰りたいって、今もそう思つてる」「だつたら、なんで！ 遥さんは戻れるじゃないか！」

「君は生きているから。確かに一度は死んだのかもしれないけど、今の君はその時の君とは同じだけど、違うんだ。だから君は、自分は生きていちゃいけないなんて、思わなくていいんだよ。それに？力？のことだって、君が悪いんじゃない。君が自分を責める理由なんて無いんだ」「

「……どうでもいいよ。そんなこと、どうだつていいんだ！　僕は僕がもういいって言つたのは、そんなことじゃない。僕は、こうして生きていることが嫌なだけなんだ。沢山の人が僕が死ぬことを望んでて、僕が生きてればその人達は不安になる。僕がいなくなりさえすれば、大好きな人達がもう一度家族と一緒に暮らせるのにそんなことを思いながら生きるのが、嫌なんだよ！」

双眸に涙をたたえたまま、彼は許しを請うように、僕を見る。

「……僕にこんなことを言う資格は無いのは、分かってる。でも、無いけど、僕は」

彼を抱き寄せて、ひとつになつてしまつた腕で彼の頭を搔きいだ抱く。

「君が好きだよ」

僕に体を預ける彼が震える。離れようとした彼を、さらにも強く抱きしめる。

「君とは今日会つたばかりで、僕は君を……犠牲にして、見捨てて、逃げ出した。だから、信じてもらえないだろうけど、でも、好きなんだ。君はいつでも優しくて、自分より人のことばかり気にかけて、つらくても平気な振りをして、自分を殺す相手にさえ、君はつ」  
彼に回した腕から力を抜くことができない。苦しんでいるかもしない、そう思つても。

「僕は　僕らは、そんな君が大好きだ。だから、僕らは君に生きていて欲しいんだよ。わがままだけど、君がそれを望まなくとも……生きて、欲しい。だから　だからさ、彰君……」

我慢が崩れそうになるけれど、それはできないから、だけど僕はやつぱり卑怯者で、

「もういいなんて、言わないでお」

彼に頬を寄せて、代わりをもうつ。

「僕らだけじゃ足りないかな。これだけじゃ君は、生きたいって、思つてくれないかなあ」

彼は僕らにぎゅうとしがみついて、だけど抱きしめる僕らの腕に

逆らい首を振つて、

「……そんなことない。そんなこと、ないよ」

それだけを、僕らが何よりも求めた答えを、くれた。

乾いた拍手が鳴り響く。ただ一人が緩慢に打ち鳴らす称賛。その主へ、視線を向けた。

「なんていい話なのかしら。本当、素晴らしいハッピーエンド。でも

？僕？の顔が満面の笑みに包まれていた。手を打つのを止め、その両腕を広げる。

「残念だけど、まだ終わりじゃないのよ？ だって、私がまだ、この最高にくそつくだらない茶番の見物料を払つていらないんだもの」 僕はこんなに不快な笑い方ができるのか。死ぬまで 死んでも知らずにいたかつたな。

「今思うと、腕を斬り落としたのは失敗だつたわね」

僕の腕を奪つた右手を目の前にかざして、その瞬間を思い返すよう手刀にしてから、握りしめた。

「もつと細かく刻んでいくべきだつたわ。でも大丈夫かしら、まだたくさん残つているものね。本当、楽しみだわ。どれくらいになつたら泣いて命乞いをしながら、僕にあの子を殺させてください、つて頼むようになるのかしらね？ そこまでされたら私だつて

「黙れ」

からすさんが、立ち上がつた。固められた一つきりの拳が震えている。

「なあに？ 馬鹿なお友達を馬鹿にされて怒つているの？ でも、安心してちょうだい。私はちやあんと、あなたのことも馬鹿にしているから。会つた時からずつとそう思つてはいたけれど、あなた、本当にどうしようもないお馬鹿さんなのね」

「確かに、私は救い様の無い愚か者だ。だけど

拳に込められた力が一瞬、わずかにゆるめられ、

「私の友達は 怖がりで、間が抜けていて、すぐに調子に乗つて、

でも変に強情で、今笑つたと思えばもう落ち込んでいて、子供より子供のような振る舞いをして、何があるたびに泣きそうになるような、そんな人なのに

「…………」

でもまたすぐに握りしめられて、そしてそのままさらりと負荷は上がり、

「今まで信じてきた正義も、裏切られてさえ友達だと信じたい人も、大好きな人の意思も、自分のために泣いている母親も、そのすべてを犠牲にしてでも　　全部、自分が一番傷ついているくせに……それでも！　それでも守りたいと叫んだ私の友達をお　　」

爪が皮膚に喰い込んでいき、血がにじむ感触がしてよつやく僕は、

「お前はもう泣いて命乞いをしても許さない」

からすさんが体の制御を忘れるほど、すべてを差し置いて怒っていることに気がついた。ありとあらゆることを無視して、怒つてくれている。

「そう。なら見せて？　私をどう許さないのか」

笑みを崩さない加賀さんへ、からすさんが突進する。その笑みを碎くように加賀さんの顔面へ掌を伸ばして　届かずに、停まった。からすさんの膝が折れ、体が沈む。それを見てから、加賀さんは腕をゆっくりと掲げ、振り下ろす。

紙一重、とはいかなかった。既に腕を失った左の肩に裂傷が走る。でも体が真つ一つになるよりは余程いい。

攻撃の瞬間、からすさんは体の主導権を取り戻し、僕に預けた。僕はほとんど寝転がるくらい上体を反らして手刀をやり過ごすと、即座に後ろへ飛び退いて距離を取つた。

「あら、もうおしまい？　ずいぶん友達思いなのね」

「彰君、剣、取ってくれないかな」

敵の言葉は無視して、着地した後、手探りで剣を探したけれど見つかないので、彰君に頼んだ。彼女は自分から攻める気は無さそうだけど、視界から外すわけにもいかない。

『私は…………ごめんなさい…………』

「なんで謝るんだろうね？」「

からすさんではなく、剣を引きずるように持つてすぐに隣に来てくれた彰君に聞く。

「なんでだらうね

そう言つて彼は笑つて、でもすぐに心配そうな顔に戻つて、剣を差し出してくる。

「……待つてるから。一人とも、無事に帰つてきて」

僕は一度彼の頭に手を置いて笑つてから、その剣を受け取つて、立ち上がる。

《ええ》

「うん。じゃあ、行つてくる」

それでも心配そうな彰君に背を向けて、僕はもう一度加賀さんと対峙する。

「もういいの？ ちゃんとお別れできるまで待つてあげるのに。今生の別れなんだもの」

全速で迫つて、胴を狙い左に下げた剣を水平に払う。彼女は後ろに下がつてそれをかわして、剣が通り過ぎると逆に間合いを詰め、僕がしたように僕の胴へ腕を振るう。でも、僕は彼女のよう避けることはできない。体をひねりながら下がつて、胴が両断されるとだけは免れたけれど、代わりにわき腹を深々と裂かれた。僕はひねつた体をその勢いのまま回転させ、今度は首を狙つて打ち込んだ。が、彼女はそれを造作も無くかわし、なのに、背後へ大きく引いた。誘つている……いや、僕が早々に諦めないようにあえて、勝ちの目を示している、のか。

今、加賀さんの後ろにあるのは？ 出口？ の、その先？ 外？ だ。

そこへ出てしまえば、誰も彼も常人同様となる。加賀さんも例外ではないだろう。なら、彼女だけを追いやることができれば、境界を挟んで対峙することができれば、身体能力の差、反応速度の差、それ以外のすべて、なにもかもが逆転する。そうなれば、勝てる。間違いない。

つまり、絶対的な自信があるということだ。そうはならない、とう。

好都合だ。それはまぎれもない隙なのだから。遠慮なく突かせてもらひ。

僕は加賀さんに向かっていく、その度に僕の攻撃はかわされ、その度に僕の体は切り裂かれ、だけどその度に彼女は？外？へ近づいていく。

「無様ねえ。あんなに懸命に振り回したのに、切れたのはあなたの体と息だけだなんて」

？外？まで一、三メートルという所で、肩で息をして睨む満身創痍の僕を見て、笑っている。

消耗が激しい。それだけからずさんのが荷が高いといふことか…なら、そろそろいくか。

「……そうでもないでしょ。あなたを追い詰めたんですから」  
「そうやって好きだけ笑つていればいい。思い通りに運んでいるのは、こっちも同じだ。

踏み出し、同時に体をひねって打ち払いにいく　もう何度かわされたか分からぬ攻撃。だけど、今度はそれ以前に、間合いが遠すぎる。かわすまでもなく、届きもしない。僕が動き出した時点できそれが分かるほどに。

加賀さんはそれは楽しそうに僕の失策を眺めて、そして、体の重心をこちらへ傾けて

この人は、このためにここまで下がってきたはずだ。勝てる、身の程知らずにもそう思つた雑魚を、思う存分せせら笑うために。その雑魚が今、これ以上ない失敗をした。

そうだ。それなら当然、これを黙つて見てるわけないよなあ！

剣から手を離す。放たれた剣はこちらへ迫つてきていた彼女の喉元へ。彼女は表情一つ変えずその刃を掴み、止めた。その頃には、僕はもう動いている。地に触れるほど体を沈めて、彼女の懷へ潜り込む。それを彼女は蹴りで迎撃しようとして足を振り上げた。顔を

狙つて放たれたその蹴りを、さらに踏み込んで胸で受け、それを利用して体を浮かせる。

僕の手は、彼女の足首を掴んでいる。蹴った方ではなく、彼女を支えていた足。今、彼女を支えているものは何もない。支えを無くしたものは、倒れる。どんな強者だろうと例外はない。彼女が背中から地面に落ちる。それが確実になつてから手を離し、掴む。

彼女に持つてもらつていた剣を。その切つ先は、いまだ彼女の首を狙つている。掴んだ剣に全体重を乗せた。その首を貫くために。人間が転倒した時の反射、彰君の血で濡れた刃、剣は彼女の手をすり抜けしていく。倒れた彼女は、動かない。

「……あなた、今ほつとしたでしよう？」

動かずに、じつと僕を見つめている。そこには、これを楽しんでいる気配はない。

剣は、彼女の首、その寸前で止まっている。

「あなたは、結局怖いだけなのね」

僕は必死で剣を押し込もうとするけれど、まるで動いてくれない。

「あの子のことが大事だとか、そんなことではなくて、ただあの子を殺すのが怖かつた」

たつた一人が無造作に片手で掴んでいる剣が、コンクリートに刺さつていた時よりも。

「怖いから守る振りをして逃げた。そして、その逃げた先で私を殺すことからも逃げた」

反撃するわけでもなく、ただ見つめてくる彼女の目が、いつか見たものと重なつた。

「本当、無様な子」

つまらなそうな目。向けている相手に一切の興味を失つた目。

「気が変わったわ」

彼女は剣を掴む手を軽くひねつて、そつやつて小枝でも折るようにな簡単に、剣が折られた。それを支えとしていた僕はなすすべもなく、彼女へ向かって倒れ込む。

「死ね」

突き出した彼女の右腕が、倒れる僕の体を貫いた。

あぐうがふつ

心臓、それに片側の肺が壊された。盛大に血を吐き出して、僕を見上げる？僕？の顔を紅く染める。急速に体から力が抜けていき、折られた剣が手からすべり落ちていった。

「お馬鹿さんたゞ」と新仁ちゃんを失ふのはかよこと情じし氣かするのよねえ……今だつたら怒らないでおいてあげるから、こつちに来ない?」

かくさんは「に残っていた血を吐きかけて答えた。

加賀さんは立ち上がった後、ようやく僕から腕を引き抜き、もう満足に立つこともできなくなつて倒れかける僕の首を掴んで無理矢理に立たせ、後ろを向いた。

「わた、しは……自分の意志で、と……言つた、でしょ?……」  
息も絶え絶えにからすさんは言つ。だけど、そんなものはまるで  
意に介さず、加賀さんは僕を掴む腕をだらりとぶら下げる、そち  
らを見据える。

「はる、かあ！」

からすさんが僕の名を叫んで、それが消えもしない内に、加賀さんは僕を放り投げた。  
？外？へ。

?外?  
^。

何の抵抗もできず、僕は？外？の地べたに這いつくばる。

境界は田の前。たけど、指一本動かない。今までからはさんか止めていたであろう血がとめどなく流れ出していく。それは僕にひとつはついこの間の感覚。死が忍び寄つてくる感覚。

叫び声。彰君、か。感覚が鈍つてきていてよく分からぬ。何を、

しているの？

「そんなんにお馬鹿さん達が大事なの？ 变な子ねえ。ふつん、それじゃあ」

かすむ視界の中だから、じて確認できたのは、踏みつけられる彰君だった。

僕らを助けようとしたのか。逃げて欲しかったけど、そりだね。君は、そういう子だったよね。

「さつきの取引の続きをしましょうか」

キン、という金属がこする音がしてから、続いて、抵抗していた彰君が押し黙る気配。

「死になさい」

……お前、何を言つてるんだ？

「あなたが死ねばあの二人は助けてあげる。早くしないと、間に合わないわよ？」

折れた剣の先を手にした彰君が、見える。喉元に刃を突きつけた姿。

「だ、め…………だ……」

かすれた声。きつと腫いていない。でもさつきまでのよつには、体が動いてくれない。

「…………嫌だ」

彰君は手にした刃で自分を押さえつけている足を突き刺そうとして、突き立てられた加賀さんはそれに何の反応も見せず、つまらなそうに、刺された足で刃を蹴り飛ばした。再び、地面に折れた剣が転がる。

「まあ、そうよねえ。あんな子達のために死ぬなんて、馬鹿馬鹿しいわよねえ」

加賀さんが笑う。それでいい。なんだつていいんだ。あの子が生きてさえくれば。

「……好きだつて、生きて欲しいつて、言つてくれたんだ……どんな人にも、ここにお前の居場所は無いつて、邪魔だから消えろつて、言われた僕に……言つてくれたんだ！」

「で？」

踏みつける足に力を加えて彰君を黙らせる。もう笑っていない。歯を軋ませている。

「あなた達って、一人残らず口先ばかりなのね。本当、気分が悪い押し殺した泣き声が聞こえる。彰君が、泣いている。泣いているのに、なんで僕は

「なら、なぜ私を殺さないの？ もうそれができる程度の時間は経っているでしょう？」

「……あの二人を、イケイブルス・ワイズ忘れたくない」

「？……ああ？ 創造主の権限イケイブルス・ワイズ？」の対価ね。だけど、そんなもの膨大な中の一握り 消えるものが自分で選べないとは言え、考慮にも値しない可能性でしょうに。大事なものを失うことよりも、そんなものが恐ろしいの？」

「怖い、よ。消えないかもしないってのは、消えるかもしれないってことなんだから。僕は遙さんを、新仁セイジンさんを この人は誰なんだろう、なんて思いたくない。あの二人が僕に言ってくれたこと、してくれたことを僕は、絶対失くしたくないんだ！」

「だから、仲良く心中するの？」

「だから……だから僕は！ 僕だけの、天野彰としての力だけでお前を、倒してやる！」

「……さっき言ったこと、あなたの分は取り消すわ。いいわねえ。それは本当、いい覚悟だわ。あそこで寝てるお馬鹿さんにも見習つて欲しいくらいのね」

「ああ、そうだな。まったくその通りだ。僕には、まるで足りていなかつた。

「どうかしている。そんな程度の覚悟で犠牲になってくれなんて、よく言えたものだ。」

それでも、からすさんは決めていたんだ。もう、あの時に。

僕だけがそれを分かつていなかつた。

「本当、殺すには惜しい子

彰くん以外のすべてを犠牲にしてでも。そう決めた、つもりになっていた。それは、すべてなんかじやなかつたのに。僕のすべてには、からすさんが入つていなかつたのに。

からすさんが僕のせいで人を殺すということを、僕は考えていない  
かつた。

だけどそれは、そんなことは  
な。いや、そうじゃないか。こういう時は、ありがとう、だな。僕  
はあの人にそれを使うべき時、いつも言いそびれている。

「だからこそ、今ここで殺す」

加賀晴子が彰君を掴んで目の前にぶら下げる。彼はもう泣いていなかつた。戦つている。

さつき、体が動いてくれない、なんてことを思っていたな。

三郎の感覚が無二。アーティスト同士の会話

手足の感覚が無い どこか何かも分からぬ  
だから、さっさと動け！

伸ばした右手の、その指先が、境界を、越える。

! !

いびつな絶叫を上げて、僕らは走り出した。

加賀晴子がこちらに振り向こうとして気を逸らした隙に、彰君が彼女から逃れる。彼はすぐに落ちている折れた剣、僕らが持つていた方の剣を拾つて、こちらに放り投げる。

間合いを詰めてきた加賀晴子が難いだ腕を体を回転させながら屈んでかわし、放物線を描いて飛んできた剣を受け止める。そして、立ち上がりざま払つた剣が敵の首へ、届いた。

「あれ、私があげたのよ?」

首が繋がったままの加賀晴子が、心底呆れたように言った。

僕らが振り抜いた手に収まっていたはずの折れた骨には跡形もなくなっている。

伸びきつた僕らの右腕を、加賀晴子が振り上げた左腕が、宙に斬

り飛ばした。

「そんなものでよく殺せると思えたわね」

心臓を抉った時のよつとつまらなそうな目をして、空いている右腕で僕らの腹部を貫く。

「思つてねえよ」

まあ、ついさっき彰君が気付かせてくれたことだけだ。  
それにしても、本当に素晴らしい緩手の連續だ。この人のことだから、ああすれば早々に首を刎ねにくると思っていたのに。買い被つていたな。あんな、もういらないものをわざわざ斬つて、こんな、僕らに都合のいい状況をわざわざ作ってくれて。

貫かれたままさらには接近する。互いに触れ合ひほどどの距離へ。彼女が気付く。もう遅い。

こんなことを思うのは生まれて初めてかもしれないな。

ああ本当に、僕は、背が低くて良かつたよ。

僕らは体を前にかたむけて、口を開いた。並んだ十四対の刃が？  
僕？の首に触れる。

血の味。筋張った肉を噛み締めたような不快な感覚。不味い。こんなのが鮮明にしないでくれないかな。

首を食いちぎるつもりだったのだけど、加賀さんは僕らを貫いていた腕を使って僕らの重心をわずかにずらし、首が切断されることは避けた。それでも深手ではあったのか、即座に腕を引き抜くと、僕らから大きく距離を取った。

「無事つて見た目じゃないけど、ただいま」

彰君の前に立つ。頭をなでたかっただけど腕が無い。代わりにしゃがんで額を触れ合わせる。

「……おかえりなさい」

声に涙をにじませて、彰君が抱きついてくる。ほんとこの子は、どこまでも、だな。

ドンッ、という低くて、でもやたら大きな音が辺りに響いた。見ると、すでに傷が癒えた加賀さんがコンクリートの地面を踏みつけ

て陥没させている。

「なあに、それ？ 千載一遇の好機を逃しておいて、よくいちやつ  
いていられるわね」

いい大人が構つてもらえないからってイライラしないで欲しい。  
しうがない人だな。

「千載一遇つて……確かに千年に一度、でしたつけ？ サッキのが、  
ですか？」

「それ以外に何があるの？ まあ、実際の可能性で言えばもつと低  
いでしようけど」

この人……人の話なんにも聞いてないんだな。人の「ことば」いう  
言えないじゃないか。

「なんの意味があるんですか？ その可能性、っていうのは」「は」  
さつき彰君が言つていたでしよう、あなたが始めた話の答えとし  
て。

「千に一つなら、万に一つなら、臆に一つなら 謹める理由にな  
るんですか？ その逆なら、信じる理由になるんですけど？」

そうなるかもしけないっていうことは、そうならないかもしけな  
いつていうことだ。

「同じことでしょう。だつたら ただ、そつすればいい  
考慮にも値しない。あなたが言つたことだというのに。」

「僕らはもう決めたんだ。だから、あなたはもう終わりだ」  
勝利を確信、じゃない。既に決定されたことだ。ただ、まだ起こ  
つていないと、いうだけ。

「仮に千年の間これを繰り返せば千年の間ずっと、あなたが死ぬだ  
けですよ。？ 可能性？ が千載一遇だらうが」

加賀晴子は、笑つてゐる。

姿こそ？ 僕？ だけど、今までこの人が見せた笑顔が全部偽物に思  
える、楽しそうな笑み。

「……よつやくだ。よつやく面白くなつてきた」

言つてから両手を地につき、獣が獲物に襲いかかるために伏せる

よつな構えをとつた。もつねこに笑みはない。ぎしづ、と奥歯を軋ませ、その双眸に僕らをとらえる。

「やつてみろ」

全力を出してやる、といつゝとか。好きにすればいい。同じじ」となんだから。

最後の対峙。同時に動いた、その瞬間

僕らと加賀さん。一人とも、倒れている。

二人とも、駆け出してすぐに、転んだ。手を着くこともできず、とても硬い地面におもいきり顔から突っ込んだ。

『あー、ごめんごめん。驚かせちゃったかなー』

そんな僕らの様子を見て? 再び頭の中に声が響いてくる。からすさんと同じ会話の仕方。でも聞こえてきた声はからすさんのそれじゃない。

……これって、ええと、確か

「耕四郎おおお————!!」

起き上がった加賀さんがその名を絶叫する。うん、だよね。清寺さんだよね、これ。

僕らが動いたあの瞬間、今と同じ声が頭の中に響いてきたのだ。『ハルちゃんストオオオオオ————ツプ!!』

という、ものすごい大声が。

僕らはそれに驚いて、つまづいて

「あんたあ……ハルちゃんって呼ぶなつッてんでしょおおお——  
————!!」

そのくだりもういいよ! あの人絶対やめねえよ! って叫ぶつかなんだよこれ!?

「いい加減にしろつづーのよ……よつやくよ~・よつやく面白  
なに、これ……?」

『んー? どうしたの?』

怒り心頭だった加賀さんが、唐突に自分の体を見下ろして、なぜか絶句している。

「泥……だら、け。わた、しのジャージ……大事な、ジャージ、が

泥に……

……ああ、確かにわざと転んだ時ちょうど水たまりに突っ込んだ

みたいだけど、  
た。

加賀さんは僕らと対峙していた時より激しく、ぎりぎりと歯をかみ合わせた後、叫んだ。

「私のジャージをお、よ／＼もむねねおおおお――――――――――」

……この人は、どうしよう……いや、まあ、仮にや、仮にだけ、百歩譲つてジャージがこの状況よりも大事だとしてもだよ？　とにかくに血やなんかで汚れまくってるんだからさ、今更泥がついたくらい気にならないだろ。

「血は人間の情報に直結してつからいじりやすいの！ 土や水はもつとずっと階層の低い領域に設定されてつからいじんのめんどくせーの！ 洗濯しなきやなんねーの！ 痛むの！」

なんでこの人は人の心を読むんだ。  
相変わらず何を言つてるので  
全然分からぬし。

帰る。帰つて寝る。

加賀さんはそう言って、僕らに背を向けて去っていく。  
いやいやいや、ほんとに帰る。本当に帰っちゃう

事があるだろ。

『晴子ちゃん、たら、むかせ直るんだからそんなのどうだ？』  
『じゃない。それよりほら、あの子達きよとーんつてなってるわよ？』  
放つて置いちゃかわいそうよ』

誰!? この人誰!?

急に知らなし人の声が聞こえてきたんだ  
けど。どうなつてんだよもう!

「ああ、そういやそう。  
そんなの？」「そんなの、二二二た今？  
何

「なんであんだだちせじゅんじゅうじゆこじでぐれないんですかあ  
いつづもこいつもおおおおー。」

「え？ 何？ なんて？」

つたじやない》

「は？ あんたこいつが言つたこと分かつたの？」

《いーえ。なあんにも》

《兎川君はまずそのびばじば出してる鼻血を拭いた方がいいんじゃないかなー》

「……ぶげまぜん」

清寺さんに言われて拭こいつとしたけれど、腕が一本とも無い」とを思い出し、断念した。

「遙さん、僕ハンカチ持つてるから僕がやるよ」

少し前の僕のように啞然あせんとしていた彰君が、今まで本氣の殺し合いをしていた人間達のやり取りとは思えない光景に氣後れしながら、おずおずとからすさんのスカートを掴む。

「……止まらないね」

「だね……」

屈んで、彰君に拭いてもらひつ。のだけど、相当強く打ち付けたのか、鼻血は一向に止まる気配がない。

「あんた、一回立ちなさい」

僕の状態を見かねたのか、加賀さんがため息をつきながら僕と彰君のそばへ来る。気付けば、なんだかおかしな空氣になつてているけれど、それでも今までのことを考えれば氣を抜くことはできないと思いつつ、僕が腕が無いながらも身構えつつ加賀さんの前に立つたところで 首を刎ねられた。

「ぎこやああああああああああああああ！」

「ううわああああああああああああ！」

「いぢいぢうるつせえーーーのよつこの馬鹿つ！」

思わず悲鳴を上げた彰君と、首が無いのに悲鳴を上げた僕に、加賀さんは心底うそぞぞりしたような顔をして、さうに僕にだけは蹴りまで入れてくれた。

蹴られたのに……痛くない。

……首を切断されたからすさんの体を眺める僕……これって、戾

つたのか

幽霊に。

「死なないんですか僕らー!?　いや死んではいるんですけども  
「死んだ奴が死ねるわけねーでしょ」

いや、まあ、うん。理屈としては、理に適っている……のか?  
もつ全然分からぬ。

「ほ、ほんとに、平氣なの?　遙さん?」

「う、うん。たぶん、だけど。大丈夫、だと思ひ」

驚いたように、心配するように、彰君が幽霊となつた僕を見上げ、  
僕の生返事を聞くやいなや

「! 新仁さん! 新仁さんは! ?」

からすさんを探して、辺りを見回す。

からすさんは 幽霊のからすさんは、無残な姿で倒れている自  
分の体の隣、懐かしい感すらある黒いセーラー服姿で、地に手をつ  
いてうずくまつていた。

それを見た僕と彰君が慌てて駆け寄るけれど、彼女は顔を上げることすらできないようだった。

「からすさん……大丈夫?」

「……え……い……じょ……ふ」

絶対大丈夫じゃないよね? 見れば分かることを聞いた僕が悪い  
んだけど。

「まあなんつーか、限界超えて思いつきり走り続けたみてーなもん  
だから。今はきついでしようけど、時間が経てばなんでもねーよう  
になるわよ」

加賀さんが僕と彰君に交互に視線を送りながらぱたぱたと手を振  
つて、構うなというような仕草を見せた後、

「で、あんたさつき何言つてたのよ?」

視線を僕に固定して、僕が鼻血を出しながら叫んだ時の内容を尋  
ねてきた。

「何つて……えっと、だからその、説明をして欲しいなあ、と。思  
つたんですけども……」

「ふうん。さつぱり分かんなかつたけど。で、なんの説明が聞きてーのよ?」

この人が珍しく、なのが普通に答えてくれる姿勢を見せてくれたので、僕はもつとも気になつていてることを こんなことをしても意味がないと思いつつ、彰君の盾になるように立つて、聞いた。

「今の、この状態を見ると……加賀さん達は朝君の敵じゃなし、よ  
うに見えるんです、が？」

何をもって離とされるのが知られ一にと  
この子やおのれが通をどんじ  
「うしょうつて氣はねーわね」

んだから。でも、だつたらなんで

तु? ८८

「……ああ、ドサリ。ドサリ。だーいせーこーるー。つでせ

「うれしかんなー。」

てんの、この人達。

『人としてないじやな』

「ですよねえ知らない人。いくらなんでも今のはないよね。  
『やつてることは大して変わんねーんだから別に構わねーでしょ』

『「アガル」するかしないかの問題である。もう二つとあるのかしかし、5』

「あの、少し話は逸れるのですが……あー、なんて言つか、その人  
? は 誰なんですか?」

どうやら、この人達が彰君と敵対する気が無いのは間違いないよ

うなので、僕はその詳しい内容よりも先に、ずっと気になっていた声だけが聞こえてくる知らない人のことを尋ねた。知らない人、だよね？

「ああ、そう<sup>ライティス・レイス</sup>言えばこいつとは会つてねーんだつけ。こいつはあれ

よ、？理法の眷属？の その子と同じグループの……まあ、偉い

奴よ。私を監視するために最初からくつついではいたんだけど、そ

りやあんたには分かんねーわね」

『申し遅れました。私、綾小路佳那恵と申します。よろしくね、遙

君。新仁ちゃん。彰君は ごめんなさいね。あの時はひどいこと

をしてしまつて』

きれいな姿勢でお辞儀をする綾小路さんに、僕も「はい。こちらこそ」とお辞儀を返した。もつとも彼女の今の姿は？僕？なので、なんだか変な感じになつてているのは否めないのだけど。それはそれとして

「彰君は、会つたことあるんだ？」

あの時のひどいこと、というのをあえて聞こうとは思わないけれど、この人の口振りからすれば恐らく、あるのだろう。

「……たぶん。でもあの時はいっぱい人がいたから、あの中のどの人なのかよく分からぬけど……」

「場違いなひらひらした格好した上にまだ暗い内から日傘差してた変な女がいたでしょ？ あいつがそうよ。つたく、これから荒事だつて時にあんな気の抜けた格好して来る奴の気が知れねーわ」

『あら。本当、失礼ね。どこへ行くにもジャージの人には言われたくないんですけどー』

「へえ、あんた私のジャージに喧嘩売ろうつっての？ いい度胸してるわ。だつたら望み通り 』

「えーとですねえ、話を逸らした僕がこんなこと言つのもなんですが、そろそろ本題の方へ戻つてきてくれませんかねえ？」

同じ体を共有してる人達がなんで殴り合いを始めようとしちゃうのかな……もしかして、できるの？

「だからドッキリつったでしょうが。相変わらず人の話を聞かね  
ー奴ねえ」

『私達がしていたことはね、彰君が私達の脅威になるかどうかを見  
極めるための 試験のようなものだったの。だから私達のしたこ  
とを許してくれ、なんて言えないけれど、ね』

綾小路さんが、もう加賀さんには任せおけないと思つたのか、  
代わりに説明してくれる。

『この子の力は大きすぎるでしょう？ それを無闇に使われるところ  
まで保ってきたバランスが簡単に崩れてしまう。全部私達の都合  
だけど、それでも放つてはおけないの。だから、この子が力を自分  
の意思で制御できるかどうかを知りたくて……追い詰めた』

……確かにあつさり納得できる話じゃないけど、でもそれだけな  
ら別に

「なんか、目的だけ聞くと僕とからすさんはまつたく関係ない気が  
するんですけど」

「ねーわね。たまたま変なのがいたからついでに使ってみるか、つ  
て思つただけよ」

変なのって。実際変なのなんだらつけど。しかしそうか、僕ら  
完全におまけだつたのか。

「あ、関係ないと言えば……さつきの話を聞いた限りでは清寺さん  
が反逆だとなんとか言つて加賀さんと戦つてたのは別にいらなか  
つた気がす」

あれ？ そう言へば、た……

「清寺さんつて死んでませんでした！？」

氣付くのおつそいなー僕。もつ散々話しちやつたぞ。なんで最初  
に声を聞いた時に気付かないんだよ。

『やだなー、兎川君と一緒にしないでよー。僕はこの通りぴんぴん  
してゐよ?』

直後に、目の前にいる？僕？が両腕をぶんぶんと振る。今更だけ  
ど、この人達は一つの体に三人もいて不便じゃないのかな。下手し

たらもつといふのがもしれないけど。

「あー、今思えば当然と言えば当然ですけど、嘘だつたんですね。加賀さんが殺したつて言つてたの」

「別に嘘なんてついてねーわよ。私は潰したつつつただけで、殺してなんて言つてねーでしょうが」

「潰したら死ぬでしょう、普通。まあ、この人達は普通じゃないけどさ。」

「えつと、じゃあ改めて聞きますけど、あのやり取りは一体なんだったんですか？ 目的からは外れてる気がするんですが。まさか本気で清寺さんが裏切った、ってことじゃないですよね？」

「あれはこの馬鹿が、こっちの方が面白くなりそうじゃない？ だとか意味の分からねーことをあの段階になつていきなり言い出したからよ。この馬鹿が！」

『えー、ちゃんと説明したでしょ。せっかく鳥文字君と兎川君に来てもらつたのにあれで終わっちゃつたら一人に悪くないかなー、つて』

「人を串刺しにする前に言えつつてんのよー。」

「ある意味ほんとに反逆だつたのか。でも、そのおかげでいろいろあつたから、僕は感謝してるけど。」

『もー、機嫌直してよハルちゃん。僕がハルちゃんのこと大好きだから知つてるでしょー？ ハルちゃんはもう僕のこと嫌いになつちやつたのー？ ねー、ハルちゃん？ ねーつてばー』

「……うるさい」

「なんか……ハルちゃんハルちゃん言いまくつてましたけど、それはもう諦めたんですか？」

「言われるたびに烈火の如く怒つてたのに。むしろもつと早い段階で諦めるべきだつたとは思うけど。」

『そもそも、どうして晴子ちゃんは耕四郎君にハルちゃんつて呼ばれると怒つてたの？ 晴子ちゃん昔からハルちゃんつて呼ばれてたじゃない』

そうなの？ 何それ？ 訳分かんない。遅れてきた反抗期だったんだろ？

「これを始める前は もつと真剣つづーか、緊張感が必要だと思ったのよ。だから、これの間はやめろつたの。ハルちゃんにて呼ばれてる奴はどう考えても怖そじやねーでしょ？ つだつーのに、結局まるでやめねーわ、いつも通りなれなれしく接してくれるわ……ちゃんと上司と部下って立場をわきまえろつたの」「その辺は清寺さんだけの問題ではなかつた気がするけど……なるほど、そういう意図だつたのか。

「はあ、でも意外ですね。清寺さんって加賀さんの部下だったんですけど」

「なんと書つかこう、もつと近しい関係だと思つてたんだけど」

『僕は部下じゃなくて、ハルちゃんを守る騎士だよ』

「騎士、ですか」

上司と部下つて関係よりは、思つていたのに近いかも。でもどつちかつて言つと

「つつても、耕四郎より私の方がつえーけどね  
ですよね。もちろんそんなことは僕には分からぬことなのだけど、でもそつちの方がなんかしつくじくるんだよなあ。清寺さんは悪いんだけさ。

『晴子ちゃんと比べたらかわいそつよ。晴子ちゃんより強い人なんてほとんどいないぢやない』

「それを差つ引いてもよえーでしょ。耕四郎は『

『ハルちゃんはいつからこんなひどいこと言つようになつちやつたのかなー。昔はいつも僕の後を追いかけてくるような子だつたになー』

『昔の晴子ちゃんは本当、健気でかわいらしかつたわよねえ』

？僕？が遠い目をしているのは誰の意思によるものなんだろ？ひょっとしたら加賀さん、だつたりするのだろうか。

「あのー、それで話は戻るんですけど、なんと言つか今更な感はある

りますが 肝心の試験の結果は、結局どうなったんでしょうか? 「こんな感じになつてんだから、当然問題無しに決まつてんでしょ。うん。あんた、お子様の割に根性あんじやない。そういう奴は嫌いじゃねーわよ」

加賀さんが彰君の頭をぐしごとで。それを彼は嫌がる、といつよりは戸惑つていた。まあ、さつきまで殺すだのなんだのと言つていた人が急にフレンドリーになつたらそんな感じになると思う。それを見て素直に良かつたと思う、だけでいいのかも知れないけれど、でも

「……問題があると判断していたら、どうするつもりだったなんですか?」

今はたまたまこの人達の都合のいい方に転がつた。でも、この先是? これ以降にそろはならなかつたら、どうするんだ。

『殺すか、この子が死ぬ危険をおかして力を奪うか、だつたでしょうね……でもね』

僕の表情が変わるので見てか、僕が言つ前に綾小路さんは続ける。『晴子ちゃんは 晴子ちゃんだけは何があつてもそんなこと許さなかつたと思う。それだけは、信じて欲しいの……』

「? なんですよ?」  
『晴子ちゃんが自分でそんなこと言つの! ? いつこいつ」と言つて晴子ちゃん嫌がるだらうなと思ったから控えめに言つたのに! だつたらもう全部言つちゃうんだからね! 』

……なんなんだよもう。ここ女子高かよ。僕女子高なんて知らないけどや。  
『最初はね イケノーブルス ああ、その前にまずこれかしら。何て言つか、私達のような? 創造主? の眷属の総意を決める少人数の議会のようないものがあるのだけど、そこでは最初、問答無用で彰君を殺してしまおうつていう意見がほとんどだつたの。この子は、力は強くても戦いに長けているわけではないでしょ? だから今のうちに、つて。でもでも、晴子ちゃんはそれにものすごく怒つたのよ? この

子は力が少し強いだけの子供だって、そんな理由で殺してたら人類皆殺しだろうがあーーー！ って。でね、納得できないなら私が丈夫だつて証明してやるつて晴子ちゃんが言い出したから、こうなつたんだから。ね？ 晴子ちゃんいい子でしょ？』

「言い出したつづーか、そもそも決まりに？ 新しく創造された者には我々の争いが終結したことを告げ、我々に恭順するならばこれを迎え入れる？ つてのがあんでしょうが。その辺を無視していきなり殺そうとするあの連中の頭がどうかしてんのよ」

『この二人は始めつからずつとそただけど、温度差がすげえな。

『でもねー、いざ始まつたらね、この子にほんとは自分が味方だつてばれたら駄目じやない？ だからこの子に状況なんかを簡単に説明したらいきなり、これからあんたをぶつ殺してやるわ、なんて言つて、そんなことした自分にすごく落ち込んでたのよ？ あの時の晴子ちゃん本当、かわいらしかつたわあ』

「こんなちつちえー子供相手にぶつ殺してやるなんて言えば誰だつてげんなりすんでしょーが」

『それにはそれにね、さつきだつてね、途中でいきなり、もうあなた達をいじめるのがつらいから代わつてくれつて言つて戦うのやめちゃつたのよ？ でもそこまでしておいて今更止める訳にはいかなかつたから、仕方なく私がその役を引き継いだんだけど。私ただの監視役だつたのに……でも、急にそんなことになつた割には結構ラスボスっぽかつたでしょ？ 私一生懸命頑張つたんだから』

『私がない加減めんどうになつてきたつたら、あんたが勝手に始めたんでしょ。だから丁度いいと思つて手え引いただけよ。あんなかつたりー事やつてられつかつづーのよ』

確かに途中で、急に話し方とか変わつたなあとは思つたけど……  
ところで、らすぼすつて何？

『ふうん、じゃあなんで最後はまた自分がやるなんて言い出したの？ いいところだつたのに！』

『あんだけやられといてよく言つわ。あんたじや無理そうだつたか

ら代わってやつたのよ」

『ひつどい！ この体が小さいからやりづらかっただけだもん。 私  
だつてちゃんとできたもん！』

すいませんねえ。でもできればそういうことは僕に聞こえないよう  
に言つてくれませんかねえ。

「……えーと、要するにですねえ、加賀さんは何があつても彰君を  
守つてくれる、でいいんですか？」

「別に守つてなんかやんねーわよ。ただ普通に生活できるように手  
え貸すだけで」

そういうのを守るつて言つと思うんだけど。まあいいか、この人  
はそういう人みたいだし。

「つつーわけで、あんたは今日から家の子になんのよ。まあ、嫌だ  
つつーなら別の手考えつけど」

加賀さんが彰君を赤ん坊でも扱うように抱え上げる。彼はやはり  
戸惑つて、僕とからすさんの方へ不安そうな顔を向けてくる。

そんな彼に僕は、頷いて見せた。

思い出したから。この人が迷子になつた彰君を連れてきた時、す  
ぐ怒つていたこと。

さつきも嫌いじゃねー、なんて素直じゃない言い方をしていたけ  
れど、この人も 彰君が好きなんだ。

「……あの、よろしく、お願ひします」

彰君が加賀さんへ向き直つて、まだ少しの不安を残して、でもそ  
れを決めて、頷いた。

加賀さんが彰君を抱きしめる。これまでこの人が見せたことのな  
い、やさしい笑顔を浮かべて。

「はー！ はい加賀さん！ 僕にもそれやらせてくださいー！」

考えてみれば僕、からすさんの体でしか彰君をぎゅうつとしたこ  
とないんだつた。うん、今すぐしたいぞ。

「はあ？ 嫌に決まつてんでしょ。馬鹿じやねーの」

くつそおおおおおーーーーーーーー 少しふくらこ考えてくれて

もいいじゃねえかよおお！

「いいじゃですかちょっととくらい……これで、最後なんですか  
ら」

彰君を試すための 結局加賀さんはそれも本気じゃなかつたけ  
ど そのための駒。その役目も、もつおしまい。ずっとこのまま  
ではいられない 清寺さんはそう言つていたのだから。

「なんで、最後だと思うの？」

加賀さんは彰君を下ろして、僕と向かい合つ。

「役に立てば願いを叶えてやる。私はそう言つたわよ。」

……この人は確かにそんなことを言つていただけれど、やつままで  
の話を考えればあれば僕らをこの試験に使うために言つた方便、だ  
つたと思うのが……でも、それが本当なら

「ただし、元通りになれんのは一人だけ、だけど」

加賀さんは大きくため息をついて、目を細める。

「なんとかしてやりてーのは山々だけど、ぎりぎりまで引っ張つて  
もどうしても届かねーの。そこはもう私が手を出せる領域の外だか  
ら」

以前にこいつの話をしていた時とはずいぶん様子が違つて、真剣  
な表情。

「さあ、あなたの願いはなあに？」

そう思つていたのに、魔王はやつぱり、あの時のように笑つた。

「……意地悪ですねえ。言わなくとも分かるでしじうに」

僕の願いはもう叶つたのに、それでも、もう一つと言つのなら  
そんなのは決まつてゐる。

「加賀さん、清寺さん、それと綾小路さん、彰君のことをお願いし  
ます」

？僕？の姿をした人達に頭を下げて頼んだ。？僕？は手をかざし  
てそれに応えてくれた。

「加賀さんにいじめられたらすぐからすさんを頼るんだよ？ 我慢  
しちゃ駄目だからね」

彰君の頭をなでて、笑った。彼は一瞬顔を曇らせたけど、でも、笑つて頷いてくれた。

「からすさん……」

まだ起き上がるのできないからすさんの中にいる。

「じめん……最後まで僕のせいだ　あ、いや、そつじゃなくて僕は

僕は言おうとして、だけどそれをやめるよつて、彼女が顔を上げて、何事かを僕に言って、そしてすべての感覚が断たれた先の、無限に広がる暗闇へ落ちていく。……これで、終わり？ そんな、待つてよ。僕はまだあの人と言いたいことが

あるんだ。

.....?

? ? ? なにこれ?

三途の川？ 三途の川……なのかな。これ。

だとしたら、がつかりだぞ。通学路の脇に流れてた汚いドブ川と  
変わらないし。がんばつたら飛び越えられそつなんだけど。これに  
渡し賃はいらないよなあ ん？ 向こうに見えるのって……

う、う、ん？ ここ、川が一緒つて言つか 全体的に通学路そ  
のまんまなんだけど……

なんだろう、あの世つていうのは本人の記憶に依存して形を変え  
るとかなんとかなのだろうか？ 加賀さん達がいれば分かるよ  
うに説明してもらえ……たかどつかは疑わしいけど、どっちにしろ  
いるわけないし。むう、困ったなあ。じゃあとりあえず  
……からすせんは、なんと言つていた？ 暗闇に落ちひる前のあの  
時、確かに、口が動いて

振り向いた。

勢いをつけすぎて転びそうになつたけれど、なんとか踏み止まる。目の前に、驚いた顔をした女子高生がいる。

僕を、殺した、少女だ。

彼女は、一瞬呆然としていたけれど、すぐに我に返り 僕を追い越すように駆け出した。僕はとっさに彼女の腕を掴んで、聞いた。

「君は、僕を殺した？」

「……は？」

めちゃくちゃなのは自覚しているけれど、他に聞き方が思いつかなかつた。

「君は僕を殺したのか、と聞いてるんだ」

「……なにそれ、流行ってる口説き文句？ 気持ち悪い。なんで私があなたなんか」

「ああ、もういいよ」

彼女を見てすぐに思い至つた突拍子もないことを確かめたかつただけだから。

これが、僕が殺される前なのか、殺された後なのか。刃物を突きつけようとした人間が振り向いたから驚いたのか、それとも、自分が殺したはずの人間が目の前にいるから驚いたのか。

だけど、この反応を見て確信した。

今は、僕が殺される前だ。

今が殺された後ならば 口説き文句なんて反応はありえない。

僕は彼女の腕を離し、背を向けて駆け出した。けれど、はたと気付いて振り返る。幸い少女はまだそこにいた。今すぐに確かめたいことがあるのに、よけいな世話だというのは分かっているはずなのに、それでも 知らぬ振りをするのは卑怯だと、思ったから。

「君！ もう一つだけいいかな？ あー、なんだっけ、確か シ

ンヤ君、だつたつけ？ その人を殺すことに君が人生を懸けるほどの価値はあるのかな？ 僕は君達のこと何も知らないけど、でも僕は、無いと思うよ」

少女は口を開けて放心したように僕を見ている。でも、丁寧に説明している余裕なんか無い。

僕は今度こそ少女に背を向けて、ここまで歩んできたであろう道を戻り、駅に向う。

振り向いて。

最後の瞬間、あの人は確かに、そう言った。おかげで僕は、一度も殺されずにすんだ。

元通り、だ。

この上なく元通り。僕だけでなく、恐らく世界のすべてが元に戻つた。それなのに

だつたらどうして加賀さんは、戻れるのは一人だけ、なんて言つたんだ？

からすさんだつて元通りになつてゐる、はずだろう。これが分からぬけど 時間を巻き戻したような状態だというのなら、何故その後あえてからすさんだけを取り除く必要がある？

……全部戻つたのに、僕が今日起きたことを覚えているのはなぜだ？

そういうことなのか？ 今日の記憶を残すことが、一人にしかできない？

それなら、その一人が、なんで僕なんだ……僕は、僕は加賀さんに……

からすさんは、こうなることを知つていた そう考えなければ今の状況が成立しない。知らなかつたのなら、あんなこと言うわけがない。あの人は、あの時には全部知つた上でああ言つたんだ。

僕を助けるために。

あの人は、今頃駅のホームで電車を待つてゐるのか？ 寝ぼけながら？ その先は

だったら、止めればいいんだろう。抱きつこうが蹴り飛ばそうが、どうにでもなるさ。

間に合いでさえすれば。

そうだ。これはきっと、あの人人が初めて僕を頼ってくれたんだ。  
考えてみれば、寝てる状態じゃ 意識が無い状態で記憶が戻つた  
つて、どうにもできない。だから、動ける僕に止めてくれつて、自  
分のところまで来てくれつて、そのために一人だけの一人を、僕に  
したんだ。

息が苦しい。たいして時間が経つたわけでもないだろうに。でも、  
全力で走り続けるには、少しばかり長い時間な気はするかな。  
知るか。

駅はもう目の前だ。

昔々あるところに人よりも少しだけ背の低い男子高校生がいました。ある日彼は駅のホームで電車を待っていた女子高生に突然抱きついて、烈火の如く怒り狂ったその女子高生に足蹴にされながら、男のくせにとののしられて、そのまま「ぐ自然な流れで痴漢扱いされて、駅職員にこっぴどくしぶられて、警察のご厄介になっているところを彼の母親が怒りながらもそれを押し殺して、申し訳なさそうに身柄を引き取りに来たのでした。めでたし、めでたし。そんな風になるんだと、思っていた。

でも彼女は、バラバラになってしまった。

もうどれくらい経つたのか、僕は彼女と初めて会った時の、駅のホームにある長椅子に腰を下ろしたまま、動けずにいた。

僕が駅にたどり着いた時にはもう、彼女はそうなっていた。それも、あの女子高生に構つていなければ間に合つた、なんて程度の差ではなく。

駅員に確認すれば、今朝僕が乗つた電車がこの駅に着いた頃には既に、そうなつていたらしい。

僕はその時、いつもと同じように　かあさんは早く会社の近くに引っ越せばいいのになあ、そう思いながら頭に英単語を詰め込んでいて、反対車線のことなんてまるで気にかけていなかつた。

……なんだこれは。

戻つた時点が、からすさんが死んだ後じゃないか。

加賀さんが言つていた、ぎりぎりまで引っ張つてもどうしても届かない。あれは、からすさんが死ぬ前の時点には戻せない　そういう意味だったのか？

もしそしたら、初めからからすさんが元に戻ることなんて、できなかつたってことじゃないか。

おかしい。辻褄が合つていない。

からすさんは最初からずっと、僕のわがままを聞いてくれたその前まではずっと、元に戻ろうとしていた。その目的を果たすために、あの人は加賀さんと共に行くことを選んだ、はずだ。そしてそのことは、加賀さんだって承知していたんだと思う。

私達に利点はあるのですか 彰君を殺せ、そう言われた時にからすさんが聞いていた。それに加賀さんは、願いを叶えてやる。でも死人の望みなんて一つだろう そう答えた。

あれはからすさんの望みを知っていたから、だからあんなことを言つたんじゃないのか？

僕はずっとからすさんのそばにいたんだから、からすさんが直接その望みを伝えていないことは知っているけど、でも加賀さんはたまに、僕が口に出さずただ考えているだけのことを読み取っているとしか思えない行動を取ることがあった。

加賀さんはそうやって僕にしたようにからすさんの望みを知つて、その上でからすさんに対し言つたんだ。

あそこには僕だつていたけど、でも僕は あの時の僕は、生き返りたいなんて思つていなかつたんだから。

でも…… そうなるとやっぱり辻褄が合わなくなつてしまつ。なら、仮に、あの時はからすさんも元に戻れるはずだつたけど、でも途中で 彰君の試験の途中でこの状態にならざるを得ない何かが起きた、と考えればからすさんの行動も……いや、違う。これは無い。加賀さんは最後の最後まで、戻れるのは一人、そう言つただけで、からすさんが戻れない、とは言わなかつたんだから。

加賀さんはそんな からすさんを騙すようなことはしない。あの人はそんなことをする人じゃない。

じゃあ、からすさんは最初から かどつかは分からぬけど、少なくとも願いを叶えると決めた時点では既にこうなることを知つてた？

これはこれで、訳が分からぬ。だつたらあの人は

あの時と ここに座つてからすさんと話していた時と同じよう

に、音楽が鳴り響いた。機械的な音の、聞こ覚えのある曲 それは、僕の携帯の着信音。

「もしもしー！」

加賀さん？ いやもしかしたら さつまつて慌てて電話を取る。  
そこから聞こえてきた声は

『無事……なのよね？』

かあさんの声、だつた。心配する、とこつよりは疑つてこいつ  
な。

「えつと……う、うん。無事、だけど……どうして？」

かあさんは、僕が今日死ぬはずだつたことなんて知るわけ無いの  
に、なんでこんな電話を掛けてくるんだろう？

『どうして？ ジゃないわよ。学校から電話があつたわ。鬼川君が  
連絡も無く休んでいるんですがつて。あなた、今どこで何してるの  
？』

うわあ、やつちやつた。学校のことなんて完全に忘れてたか  
らな。今氣付いたけどすっかり明るくなつてる。これも当然あの時  
と同じ 秋晴れと書つてふさわしい、澄みきつた空。

「ごめん、かあさん。今は駅にいる。学校の方の。こじりちょっと  
考え事してたんだ」

『そう。ならないけど』

いいのかな？ これ。絶対に良くはない、と言つか悪こと思つな  
ど。まあそんなことはどうでもいいんだ。

「かあさん。今更だけど、今日学校休みた 休むから」

『分かつた。じゃあ学校には私から連絡しておくわ』

相変わらずだな。理由も聞かないとは。今までこんなこと一度  
も言つたことないのに。かあさんはなんでこつ いや、でもかあ  
さんは……なら、なんでなんだろ？

「……あのさ、かあさんは、どうしていつも何も聞かないの？」

『聞いて、それを私が納得できなくて、だからそれをやめろって言  
つたら、やめるの？ あなた、やめた試し無いじゃない』

「え？ いや、そんなこと、ないでしょ？ やめられて言われたら……やめる時もあるよ」

『なり、私に合わせて朝早く家出のやめなさい。後、家事やめてその分勉強しなさい』

「……それは、やめないけど。でも」

『ほらみなさい。あなたがいつと決めたことを変えたことなんて無いんだから。ただの一度だつて』

「ええ……そんなわけないと呟つたけどなあ。むしろ結構変えてる気が……」

『自覚なかつたの？ あなた。そんな風に思うのはいつも変にあちこち寄り道してるからでしょ。でも結局あなたは、自分の決めたところにしか行かないわよ。いつもいつも』

そんな自覚まったくないんだけど。ほんとかなあ？ わつぱり納得いかない。

「でもさ、じゃあそれを……なんで怒らないの？」

『なんで怒らなきやいけないの？ 別にいいじゃない。あなたが決めたことなんだから』

そういうものののかな。正直よく分からぬけど、だけど

「……ありがと。かあさん」

『？ なにそれ？ まあいいわ。何してもこいけど、ちやんと帰つてくるのよ？ じゃあ』

切れちやつたよ。しかし、なにそれ、はないと呟つただけどなあ。まあいいや。仕返しに今口はよけいに手間のかかる夕飯作つてやる。でもその前に、確かめに行かなきゃな。

時刻が十三時を少し過ぎた頃、僕は辺びな土地にそびえる六十階建ての高層マンション 加賀晴子さんの住居にたどり着いた。

駅でのかあさんとの通話の後、僕はすぐにここへ向かつた。

もつとも、言うまでもなく僕の携帯の電話帳に魔王の番号は登録されていなかつたので、まずはここがどこなのか調べるところから始めたのだけだ。

ただ、こんな所にこんな規模の建物はこれしかないので、思いのほか早く所在を特定することができた。

フロントに控えていた係員の女性に取り次いでもらうと、あつさりと六十階まで通された。そして家の扉の前、以前案内された時は逆の出入り口で僕を待っていた加賀さんと簡単に挨拶を交わし、その後彼女に案内されるまま家中を進むと、結局はある広大なりビングの端にある六畳間を模した一角に落ち着いた。

「こういう時、はじめてましてつつべきなんかしら」

ちやぶ台を挟んで向かい合つた加賀さんが、僕にお茶を差し出しながらそんなことを言った。

「さあ、言わないんじゃないですか？ よく分かりませんけど」

こんな経験はしたことないからな。でも一応お互い知つてゐるわけだし、それはなんか違う気がする。確かに初対面、ではあるんだろうけど。

「ま、なんだつていいわね。んで？ あんた何しに来たの？ 彰に会いに来たんだつたら、いねーわよ。今耕四郎があの子連れて挨拶回りしてつから。ここにいんのは、私だけ」

「それはそれで残念ではあるんですけど、でもここに来た目的は彰君のことじゃないんです」

「……あんた、ずいぶんと簡単に信じんのね。ほんとはぶつ殺したんじやねーか、とか思わねーの？」

「思ひませんよそんなこと。これでも僕は加賀さんのことと信用して  
るんですからね」

加賀さんが「つまんねーわねー」とそれでもどこか楽しそうと言  
つてから、続ける。

「じゃあ、なんの用なんかしら？　ここにあの子以外の用があると  
は思えねーけど」

「……あのやたら大きな穴、ふさがってましたね」

反射的に、本当に聞きたいことではないことを聞いてしまう。こ  
ういうことをしてゐるから、かあさんに寄り道してると言われるんだ  
らうな。

「ふさがつたつづーよりは、空かなかつたつづーべきね。要は、あ  
んたと同じよ」

確かに、僕はここに来るまでの間に一度死んでその後生き返つた  
わけじゃない。死ななかつただけだ。

「こんな風に時間が戻つた　のかそんな感じのことになつたのは、  
やつぱりあの穴をどうにかするためだつたんですか？」

「そりゃあね、あんた一人のためだけにこんな大掛かりなことはや  
んねーわよ。あれは普通じやねー　私らが普通にやるやり方とは  
まったくちげーやり方で空いたから、そのやり方を解析しながらち  
まちま直すよりは全部まとめて戻したほうがマシつづーことになつ  
たのよ。まあ戻すのだつて乐ぢやねーんだけど、でもこれはあんた  
が言つたように時間を巻き戻すようなもんだから、あの穴を空けた  
方法を理解しなくていいつづーのがでかかつたわね」

「あれは彰君が空けて、でも空く前の時点に戻つて、その後もう一  
度空くことがなかつたつてことは……彰君も今日あつたことを覚え  
てる、んですね？」

「元々あの子の意思で空けたもんでもねーのよ。あの子が生まれた  
時の　なんつーか、事故ね。あの子の意識が定まる前に力だけが  
暴走した、とでも言えばいいんかしら。まあそんな感じよ。だから、  
あの子が生まれてから穴が空くまでの間にあの子の意識がはつきり

とそれを拒みさえすれば」「

「穴は空かない。つまり彰君は、全部覚えている、ということです  
ね」

「そゆことね」

加賀さんが僕をここへ普通に招きいれてくれた時にきっとそうだ  
ろうとは思つていただけど、この人の口から改めてこれを聞いて、安  
心した。

彰君が僕のことを忘れていても、彼が無事に生きていけるならそ  
れで構わないと思っていた。でも、そう思つてもやっぱり、覚えて  
いてほしいという気持ちは消えなかつたから。

「最後にあの橋にいた人は 清寺さんと綾小路さんもやつぱり覚  
えてる、と思つていいんですか？」

「あそこにはいたつづーか、私ら イーウィル・プラッド ?混沌の御使いライティス・レ?理法の眷  
属イス?は全員そつよ。むしろ、そうじゅねーのに覚えてるあんたが例  
外なのよ」

僕が、か。僕だけが、例外。それはつまり

「……からすさんは 烏文字さんは例外には含まれなかつた、と  
いうことですか」

長い寄り道を経てようやく僕は、目的地に足を踏み入れた。

「そうね。戻つた時点が既にあの子が死んだ後だつたから、記憶を  
戻す先がなかつた。先がねーんなら、戻しようがねーわ」

「どうしても、どうしてもあの人が生きている時まで戻すことはで  
きなかつたんですね」

今更こんなことを言つたつて、この人を責めるようなことをした  
つて でも僕は……

「戻すことそれ自体は、できたわよ。それでも結構ぎりぎりの領域  
だつたけど。でもね」

思わず僕は言いかけて、でも加賀さんはそれをさえざるよつて言  
葉を繋いでいく。

「戻す時点は、彰が生まれてから穴を空けるまでの間に設定しねー

と、さつき言つたことができねーでしょ。起きたことの順番は鳥文字ちゃんが死んで、彰が生まれて、穴が空いた、なのよ。鳥文字ちゃんが生きるところまで戻せば、今度は彰の記憶の戻る先がねーの。だから、あそこしかなかつた

言い終わつて、ため息をついて、つまらなそうに僕を見つめてくる。僕が今どんな顔をしているのか自分でも分からぬけど、加賀さんはそれを見てもう一度ため息をついてから、言つた。

「それともあなたは、彰を大量殺人者にしてでも鳥文字ちゃんを生かせつづーのかしら?」

僕にそんなもの選べるか でも、あの人はそんなこと絶対に許さない。だからこれは、あの人が望んだ通りの結末、なんだ。

「あの人は、何か言つていませんでしたか? 僕に、じゃなくても。何か

「なにも」

「そう、ですか……」

あの人らしい。あの人ガ、僕のように未練がましいことをするのは似合わない。でも、そうして欲しかった そう思うのは、僕のわがままだ。結局あの人は僕のわがままで

そう、だ。それじやないか。僕が知りたかったのは、それなんだ。  
「加賀さんは、あの人望みを 僕のわがままのためにあの人が諦めた望みを、知つていますか?」

あの人は自分が元に戻れないことを知つていたはずなんだ。だつたら

「それを聞いて、どうしようつての?」

この口振りからすれば、加賀さんは知つている。なら僕にだつてどうするかなんて決まつてるんだ。僕が犠牲にしたあの人願い、それを

「それを僕が果たしたい 果たすんです。そんなこと、あの人があ望んでいなくても

「相変わらずわがままな奴ねえ。でもなんにしろ、もうその必要は

ねーと思うわよ?」

「……僕にはできない やりようがないことだつて、言いたいんですか?」

「んや、むしろあんたにしかできねーことなんだけね」「一体、この人は何を言つているんだ? 当然にそう思つて加賀さんを見つめる。訳が分からぬ。僕にしかできないけど、もう必要ない?」

視線の先の加賀さんが腕を伸ばして、僕を指差す。そのまま僕を射抜くように、まっすぐに。

「あの子の望みつてのは、あんたよ」

……僕? 何、それ?

「……どういう意味なんですか? それは、僕が あの人との、望み?」

「だから、最初つからあの子の望みはあんたが元通りになることだつた、つづつてんの」

あの人は、ずっと僕のために動いてくれていた? なんで……いや、でもそう、か。あの人は僕のために本氣で怒つてくれるような人だ。僕がかあさんに会いに行つたりしたから、あの時僕が泣き言を言つたりしたから、だからあの人は

いや、いや待つて。おかしい。それはおかしい、だろ?。

「失礼ですけど、今言つたのって……加賀さんが適当に考えませんでした?」

「本気で失礼な奴ね。なんで私がそんなことしなきゃなんねーのよ」

「いやそれは……だから、その、僕を励ますため、とか……」

「だから、なんで私がそんなことしなきゃなんねーのよつづてんのよ」

「だつて、おかしいじゃないですか。あの人気がここで彰君を……願いを叶えようとした時にはそんなことは望んでいなかつた、はずです」

僕らがかあさんに会いに行く前に、あの人人が僕のために、という

のは納得がいかない。あの時はまだそんなことをする理由が無いんだから。

「なんでそんなことが言えるのよ？ あの子に直接聞きでもしたつての？」

「聞いてはいませんけど……でも、そんなはず……あ！ そうだ。あれは あの時加賀さんがあの人の望みを知つてたつて言うんだら、なんであんなこと言つたんですか？ 変ですよ。どう考へても」「は？ なによ、あんなことって？」

「あの人何か利点はあるんですか？」 つて聞いた時に、願いを叶えてやるけど、死人の望みなんて一つだらう、つて言つてたじやないですか。あれつて生き返らせてやるつて意味だつたんですね？ あの時点でもうあの人人が僕のために、だつたのなら、あの人になんかこと言わないのでしょ？」

「はあん？ 私そんなこと言つたんだっけ？ いまいち覚えてねーけど……でも言つたんならあんたに言つたんでしょ。鳥文字ちゃんにはそんなこと言つ理由ねーし」「僕つて……そんなわけないじやないか。だつて僕は

「僕はあの時、生き返りたいなんて思つていませんでしたよ。それなのに、僕に言つたんですか？」

「知らねーわよそんなの。私はあんたが生き返りたいと思つてると思つたんでしょ。覚えてねーけど」

「知らないって……加賀さんは人の考へてることが、こう 直接分かるんじゃないんですか？ そりや一から十までなんでもかんでもつてことではないのかもしだれませんけど。でも何回も僕の」

「……なにそれ？ 他人の考へてることなんて分かるわけねーでしょ？ あんたは相変わらず残念ねえ」

「え……いやだつて、僕が口にしないで考へてるだけのことに対して反論したりしてたじやないですか？」

「ああ、あんなもんは 勘よ。当たる時もあれば外れる時もあるわ。現にさつき言つてた、あんたが生き返りたいと思つてなかつた、

つてのは分からなかつたわけだし。つつても、あんたは人に比べて考えてつことがあからさまに顔に出るから、それで当たることが多かつたつてだけでしょ」

……言われてみれば、そうだ。そんなことができるなら、そもそもこんな会話になるわけがないんだ。

「なんだ……そだつたんですか。僕はてつきりよく分からぬいで覗いてるんだと思つてましたよ」

「へえ、あんたは私がそんな悪趣味なことする奴だと思つてんのね。さつきは信用してた、なんつつてたくせに。私今とつても悲しいわ」

「すいませんでした……つて、いや、今のは以前の話ですかうね？ 信用しますよ？ ほんとですよ？」

加賀さんは既にぬるくなりかけているであろうお茶をすすつた後、「はん、どうだか」と、でもやつぱりどこか楽しそうに言つた。

僕も、せつかく淹れてくれたのだし、と思いお茶を口にする。うん、やっぱりぬるくなつてるけど、僕はこれくらいの方が好きだし。やうやつてお互ひ一息いれた時、僕には別の疑問が生じてきた。

「あれ？ でも加賀さんが人の心を読めないのなら、どうやって鳥文字さんの願いを知つたんですか？ まさかそれも表情で、なんて言つませんよね？」

「言わねーわよ。そもそも鳥文字ちゃんはあんたみてーに顔に出るタイプじゃねーし。私は最初つからつつたでしょ？ 私がそれを聞いたのは、一番最初にあんた達と会つた時よ」

と言つひとは……あれか？ あの頭に直接響いてくる声。あれでいやいや、あれができるよになつたのだったついでに田た後だ。うつん？ ジヤあ一体どうやつて……

「あの時つて、そんなこと話してましたつけ？ あの時は幽靈がどうとか魔王がどうとか、そんな話しかなかつたと思いますけど」

「……あー、そうね、あれ会う前だわ。実際会う前にあんた達と電話で話したでしょ？ あん時に鳥文字ちゃんには死んでるけどもう

元には戻れねーこととか説明して　さすがに時間が戻るってこと  
までは言わなかつたけど。んでもあの子その辺の理由なんかなんにも聞かずに、あんたのこと聞いてきたのよ。あんたは元に戻れるのか、つて。まあ、あんたは見ての通りだから、できるわよつった  
ら、それ以上なんにも聞かれねーし。そんなんだからあん時はあんた達が知り合いだと思つたんだけど、会つてみたらそんなことねーし。あればほんとさつぱりだつたわ」

あの時点で、もう？ 加賀さんと電話で話した時なんて、僕とか  
らすさんだつて会つたばっかりだぞ。

「あんたにも心当たりねーの？」

あれより前にあつた事……僕があの人に怒られて、呆れられて、  
でもその後

「……あの人には頼んだんです。かあさんに　母に、伝えて欲しい  
ことがある、つて」

僕を心配するように、それを聞いてくれた。

「ふうん。それであの子は、ならいつそあんたを母親の下へ帰して  
やううと思つた、つての？」

「おかしいですね。そんなことだけで、あんなことするなんて。  
でも……それ以外には何も……」

「さあねえ。何をもつて大事とするかは人それぞれつてもんだから、  
それでいいんじゃねえの」

「でもあの人は、彰君を手に掛けようとまでしたんですよ？　たつ  
たそれだけのことで、あの人がそんな……」

「あれに関してはあんたのためだけつて訳じやねー氣がすつけど。  
でもまあ、結局その辺はあの子自身にでも聞かなきや分かんねーん  
でしょうね」

からすさん自身、か。でも、あの人もういない。だから、確か  
めることなんてできない。

だけど、確かめることはもうできなくとも、もしかしたら　僕  
がしたかつたことは、それはまだできるかもしない。

「……鳥文字さんは、優秀だつたんですね？ その、加賀さん達から見て」

「そうね。言うなら 希代の天才、つてとにかくしらね」

だつたら、それほどの才能があつたのなら、きっとからすさんは今頃

「あの、加賀さん言つてましたよね？ 私達は死んだ人間を仲間にする、そういう仕組みがある、つて。あれは 実際彰君だつてそ うなんだから、本当のこと、なんですね？」

そうやつて再び生を受けたからすさんは、僕のことなんか知らないんだろうけど、でも、からすさんがからすさんとして生きているのなら、僕は

「言つたわね。あれは確かにその通りよ。私達は死んだ人間の中から適正のある奴を選んで仲間にする」「だつたら」

「でも、あの子は駄目だつたわ」「……どうして、ですか？ だつて 天才なんでしょう？ それ

なら」「

「私はあの時、自分で死んだ奴は問答無用で除かれる、とも言つたでしょ？」

自分、で？ 何を言つているんだこの人。だつて、からすさんはそんなこと、していない。

「からすさんは寝ぼけてて、だから、そこに誰かの殺意はないんで しそうけど、そんなの」

「あんた、本気での子がそんな間抜けだと思つてんの？」

……嘘だ。そんなのは嘘だ。あの人は、しない。あの人は強い人 なんだから。それなのに

「どう、して？」

「だから、あの子にしか分かんねー わよ」

そんな憐れむような目を向けられて、僕はそれにどう応えればいい？ 分からない。何も。

「僕は……言いたいことが、ある人に言いたいことが、あるんです。言えたはずなのに、言わなかつたから、伝えられなかつたことが。だから僕は、それをどうしても、言いたい、のに……」  
もう、叶わない。その機会は永遠に失われてしまった。僕と、あの人自身の手によつて。

「なら、言えばいいんじやねーの？」

うつむかせていた顔を上げる。交差した視線の先、加賀さんの目が憐れみから楽しんでいるようなそれへ変わる。

「あんたが知る人間の中でただ一人、かどうかは知らねーけど、少なくとも一人は、この世界のすべてを思い通りにできる人間がいるでしょ？　そいつに頼んでみりやいいんじやねーの？」

僕は、笑つた。最初は抑えよつとしたけれど、でも抑えきれずに、声を上げて笑つた。

まったく、この人は本当に、意地が悪い。

「僕があの子の力を求めた時は、僕の敵になつてくれるんでしょうね？」

「当然でしょ。私の家族よ？」

今はもう真剣に見つめる僕に、彼女もまた真剣な顔をして、そう告げた。

「それを聞いて安心しました」

加賀さんがまた、つまらないとこぼして、楽しそうに笑う。それを見て僕も、今度は無理矢理に、笑つた。

「んで、もう大概話した氣がすんだけど、まだなんか聞きてーことあんの？」

「……傘、貸してもらえませんか？　今日これから雨降るでしょう？」

もうここを辞する。加賀さんは僕のその意図を汲んでくれて、「構わねーわよ」と言いながら立ち上がつた。それを見て僕も立ち上がり、この部屋へ来た時と同じように案内する彼女の後を付いて行き、玄関にたどり着く。

「どれなら借りても大丈夫ですか？」

玄関の傘立てに十本ほど差さっている傘を前に、僕がそう聞くと、

「こいつがいいわ」

加賀さんがそこから婦人用の傘 恐らくは加賀さんの を一本抜き取り、僕に差し出した。

別に他の真っ黒なやつとかで良かつたんだけど そんなことを思いながらも、借りる身分としてはこれ以上厚かましいことは言えず、素直にそれを受け取り礼を言つと、

「それ、気に入つてんのよね」

そんなことを、言われた。

「……はあ、なら ええと、特に大事に扱いますね」

他のにすればいいのに、と言いかけて、でもこの傘は加賀さんが自分で選んだことを思い出して、だから、この人の意図はよく分からぬけれど、これを使わせてもらひことにした。

「今日はありがとうございました。では、失礼します」

最後に加賀さんにもう一度礼を言つてから頭を下げて、こじを出るために背を向けた時

「気に入つてつから、さつさと返しに来いつつてんのよ。今度は彰と一緒に待つてやつから」

僕は、振り向く前に笑つてしまつた顔を直そうとしたけれど、でもこれは当分戻りそうもなかつたから、

「はい、すぐ返しに来ますね」

そのまま振り向いて、なんだかいつもと違う 照れくさそうにしている加賀さんにそう言つてもう一度頭を下げた後、僕は今度こそ加賀さん宅を出た。

そうだな。あの人気が意地悪だつていうのは、保留かな。

あれから、当然と言えば当然に、何も変わらない日々が続いている。

今日もいつも通りの早すぎる登校の後、いつも通り他にやることがないので、予習をしていた。

僕が登校してから既に結構な時間が経っているので今の教室には多くのクラスメイトがいるけれど、僕の席は窓際の最後尾、それも一つだけ浮いた小島のような席なので、周りは大して気にならない。

「いやう、ラビ。お前相変わらず朝だけは真面目っ子だよな」

関係の無い雑談は気にならなくても、自分に向けられた声まで無視するつもりはないので、僕は勉強の手を止め、声のした方を向きながら答える。

「朝だけ、はいらないよ。僕はいつだって なにしてんの？」

顔を向けた先には僕と同じクラスの一人、学級委員の南山君と、僕の家のお向かいさん、霧威家の長男である智宏君が、それぞれ持つていた椅子と机を僕の席の隣に置いた。

「権谷センサーに呼び出されてさ、教室まで持つてけって言われたんだよ。そしたら口頃の行いが良い俺は途中で霧威に会って、こうやって手伝つてもらつたつてことだな。センキュ霧威！」

「だったらなんで智君が机持つてたのさ……」

「教室に来るついでだつたからだ」

重い方を持つ理由になつてないじゃない。智君はかあさんほどじやないけど細かいこと気にしないからな。

「はあ……それで、なんでこんなものこんな所に置くのさ。邪魔なんだけど」

「おいおいおい。そんなこと言つていいのかラビィ？ こいつをどかしたらお前、すぐにその言葉を後悔することになるんだぜえ？」

「朝からテンション高いなあ。なんだっての？ 一体

「転校生が来る、そうだ」

「転校生？ こんな時期に？」

「一学期が始まって一ヶ月なんて半端な時期に転校とは、余程の事情でもあるのだろうか。

「し、か、もだ。ただの転校生じゃない。び、じ、んの転校生なんだぜ？ 見たわけじゃねえけど、もう転校生と会つた権谷センセーから聞いた話だから、間違いねえよ」

ほつたらかしにされたことを微塵も気にした風もなく、変わらぬハイテンションで攻めてくる南山君に、僕はいたつていつもと変わらないテンションで返事をする。

「だったらこれ、自分の席の隣に持つていけばいいのに」「そういうわけにもいかねえんだこれが。そりや俺だつてそうしたいのは山々なんだぜ？ だが、俺の学級委員としても矜持きよじがそれを許さねえのさ！」

「権谷先生がここに置けと言つたらじい」

「イヤア！ ラッキィボオウイ！ ラッキィボオイラビィ！」

「鬱陶しいなあ。こいつこいついつも思つんだけど、南山君つてなんで学級委員なんかやつてるの？ 絶対そつこつに向いてるタイプじゃないよね？」

「うわなんつてこと言つやがんだよ。俺はどんな時でもこのクラスの平和について考えつゝてのに」

「考へてるだけですよ」

「考へるのは上の仕事、実行するのは下の仕事。オオケニイ？」

「オッケイ、じゃないよそんなの。自分で全部やつてよ」

南山君はこれに対して特に何かを答えることはなく、

「んじやな。転校生を口の目で見んなよ」

と黙つて軽く手を挙げて、自分の席へ戻つていつた。それと同時に、智君も自分の席 僕の前の席に着く。

それで話は終わつたと思ったので、僕は予習を再開しようとして教科書に向かい、でも智君の「遙、お前」という声にまた顔を

上げると、

「失恋したのか？」

目の前の智君が、大真面目な顔をしてそう言つた。

僕らは無言で見つめ合つて。でもすぐにその均衡は崩れた。僕が爆笑してしまつたから。

「なんだ、やつぱり違うのか」

智君が笑い続ける僕を見て、拍子抜けたような、でも心配するような顔になる。

ただ、僕が笑つたのは見当違ひなことを聞かれたからではなく、言われた瞬間 そうなのかも、と僕自身が思つたことに対してだつたのだけど。

僕は誰かに恋心を抱いたことすらないから、正直失恋なんてどういうものなのかよく分からない。

でも、これはきっと、そういうのじゃない。

「どうしたの？ 急に。智君、変なものでも食べたんじゃないの？」

ようやく笑うことをおさえることができた僕は、智君に失礼なことを聞いた。それに智君は平然と、

「食べてない。そういうのはむしろお前の方じゃないのか？ お前、最近おかしいぞ」

今僕には耳が痛いことを言つてくれる。

「そうかな？ でもそれでさつとはあんなこと聞いたんだ。いきなり何かと思つたよ」

「学校に来る時に茜莉と紅莉せんり じゅりが言つてたんだよ。最近遙の様子が変わらないか、もしかして失恋もしたんじゃないか、遙だつてお年頃なんだしそれくらい、だとかな。歳はあいつらだつて変わらないはずなんだが。女の考えることはよく分からん

「茜ちゃんと紅ちゃんまで僕が変だなんて言つてるの？ 心外だなあ

「それはおかしくないだろう。どう見たところで今のお前は変だ」

「失礼だなあ。南山君はなんにも言わなかつたじゃない。智君達の

「気のせいだよ」

「付き合いの長さが違う。少なくとも俺達は、今のお前がいつも  
のお前には見えない」

普通にしてる、つもりなんだけどな。やつぱり、そつ簡単にはい  
かないか。

「……敵わないね。智君にはさ」

諦めて、思わず薄く笑って智君を見る。智君は、変わらない真剣  
な表情。怒っているわけじゃなく、心配してくれているから。

「何があつたのか、聞いていいのか？」

「いいけど、うまく説明できる気がしないんだよね。それに、それ  
で困ってるわけじゃないんだ。もう全部終わった後なんだよ。だか  
ら今は 時間が解決してくれるのを待つ、って言つのかな。そつ  
いう状態」

「それでも何が、俺にできることはないのか」

「そう思つてくれるだけで十分すぎるくらいなの。それこそ、良い  
ことだつてあつたんだよ？ なんて言つのかな 僕に弟、のようと  
な子ができるんだ」

「……今日子さん、再婚するのか？」

また、僕らは無言で見つめ合つて、すぐにまた、僕は爆笑した。  
たつぱり一分くらいは笑つてたんじゃないだろうか。腹筋が痛くな  
るくらい笑つてからようやく、僕は智君へ向き直ることができた。  
「いやー、今日の智君は面白いなあ。こんなに笑つたの久しぶりだ  
よ」

「……お前、感じ悪いぞ」

「あはは、『めんじめん』。でもさ、今のは智君が悪いよ。智君だつ  
てかあさんがそういう話をするとものすつじく怒るの知つてるでしょ  
？ 理由はいまだに分かんないけど、それはなによ」

「お前が弟ができたなんて言つからだ」

「僕は、のような、つて言つたじやない。戸籍上でどうこうつてこ  
とじやないよ」

「じゃあ、お前がおかしい原因は今日子さんのことじゃないのか」「そりゃそうだよ。かあさんは再婚しないんだからさ。それどころかいたつていつも通りだよ」

はあ、と智君がなんだかびうと疲れたようにため息をつくと、それとほぼ同時に予鈴が鳴り、教室の扉が開かれた。

「おはよーう、生徒諸君。席に着きたまえー」

一いちらもいたつていつも通りの、担任の櫂谷先生が教壇に立ち僕らを見て頷いている。この人なんでいつも予鈴と同時に教室に入ってくるんだろう。廊下で予鈴が鳴るのを待ち構えてるのか？

僕ら生徒が日直の号令による起立、礼、着席をすませると、櫂谷先生は嬉しそうに僕らを見回して、

「早速だが、君達に良い知らせだ。今から君達の新しい友人を紹介する 入ってきたまえ」

そう言って、廊下に向かつて手招きをする。

転校生が来る。そういうこと言つていたな 隣に置かれた机を見ながら南山君の話を思い出して、そして、櫂谷先生の隣に立つ転校生を見て絶句した。

確かに、すごい美人、だな。

どう見ても男だけど。

あの人を工口い目で見るのはかなり難しいなあ。後ろからだからよく分からぬけど、南山君も驚いてるみたいだから、彼も知らなかつたんだろうな。

そうか、櫂谷先生は女性だしな いやでもなあ、それでも男を美人とは言わないと思う。

まあ、どうだつていいことなんだけど。

智君にはもう大丈夫、みたいなことを言つたけど　僕は今日もまた、ここに来ている。

まるで頭に入つてこない授業がすべて終わり放課になると、僕はまっすぐに駅へ向かつた。

家に帰るためではなく、あの人と初めて出会つたあの長椅子に座るために。

こうしてあの時と同じ場所で、あの人腰掛けっていた長椅子の端を、見つめている。はたから見たら危ない人かもしれないけれど、知らないよ。気付いたらこうしてるんだから。

これで四日連続か。

ここに座っている間、僕が考えることは一つだ。

あの人気がどうしてそうしたのか　ということではなく、あ的人は　もしもの話だけど、僕があの人を止めたら、それをやめてくれただろうか、ということだ。

そんなこといくら考えたって意味は無い。そんなことは分かつてる。だけど……

あの人は最初から僕のために行動してくれて、そうだったからきっと、僕のわがままを受け入れてくれたんだ。

なら、そんなもの関係なれば？　そんなものとは何の関係も無い僕のわがままは、聞いてくれるだろ？

彰君は僕らのわがままを聞いてくれた。なら、からすさんも僕らが頼めば　それとも、それでも……？　その立場が僕なら……  
答えは出ない。それを知る人は、もういない。

……一体何がしたいんだろうな、僕は。こんなことをして、どうなるんだよ。

こんなことを繰り返している間に、今日も空は赤く染まり始めた。  
この四日間、こうなつてからようやく重い腰を上げられる。いい

加減帰らないと、かあさんが帰つてくるまでに夕飯が作れないから。それに、明日は学校が休み。それを利用して加賀さんに借りた傘を返しに行く。いつものような早朝ではないけれど、早く帰つておくに越したことはない。

あの時はすぐに、と言つたけれど、帰り道それでも平日は難しそうだと考えていたら、帰宅後加賀さんから電話をもらい五日後つまり明日来いと言われたのだ。学生の僕に気を使つてくれたのだろう。あの人はあれで

思い出すと、思わず顔がほころんでしまつた。

「さて、帰ろう」「うう

一人でそう呟いて、足元に置いてあつた鞄を手に取る。

振り向いて  そう言われたけれど、振り向いてばかりはいられないよね。

ちょうど電車がホームに入つてきて、それが止まるのを待つてから、僕はドアの前に立つた。

ここはホームの最先端、降りる人も乗る人も、改札口から遠いこんな位置を好んで選ぶ人はいなかつたので、僕はドアが開いてすぐ電車に乗り込もうとして、だけできなかつた。

僕がホームで立ち尽くしている間に目の前で音を立ててドアが閉まり、電車は僕を乗せないまま発車してしまつた。

背中、心臓の裏側に鋭利なものを突き付けられている感触。懐かしさすら覚える不快な感触。ついこの間のことなのに、もう遠い昔のことのよう。

相手は、知らない人間だつた。

電車のドアのガラスに薄く映つていたのは、見覚えの無い女。反射的にもしかして、と思ったあの女子高生でもなかつた。

なんだつていうんだ?

また人違ひなのか。それとも本当に僕を狙つてきたのか。狙いが僕だつていうなら……そうだな 彰君達のことを知つてゐる普通の人間がいることを良しとしない存在がいる、とかかな? 加賀さ

ん達だとは思わないけど、あの人は彰君を問答無用で殺そうとした人達がいると言っていたし、その辺りで

どうでもいいよ。そんなことは知ったことじゃないんだ。

かあさんは僕が帰つてることを望んでる。そして、僕がそうすることが、からすさんの願い。明日、彰君と加賀さんが僕が来るのを待つてる。だから

相手が誰で理由がなんだろうが、殺されてなどやるものか。

「ねえ、君は」

話しかける素振りを見せて相手の気を逸らす。成功したかどうかなんて分からぬ。こつちは後ろを取られているから相手の様子なんて知りようがない。

だから即座に動く。からすさんと一緒に戦つた時の感覚が、僕の意識を飛び越して、体を駆動させる。

刃を押し込まれても致命傷を避けられるように右に身体をひねりながら、その勢いを利用して拳の甲で相手を打つように腕を振る。そして、僕の放つた起死回生の攻撃は 相手がわずかに上体を反らしたことでいつもたやすく空を切り、襲撃者は回避と同時に僕の足を払つた。自らバランスを崩していたような状態で支えを失えば、派手に転倒するに決まつていて。

倒されながらも僕は、手はあえて地面に着かず鞄で体、空いている腕で首を守り、起き上がりつつ後ろに下がろうとして腰を浮かせて 呆気に取られて、もう一度尻餅をついてしまつた。

振り向いて、はつきりと視界に入った襲撃者が手にしていたものが どう見ても定規だったからだ。

……なんだこれは？

この人が定規の角を僕の背中に押し当てていたつてこと、なのか  
？ まったく意味が分からぬぞ。

それに、この人もよくよく見れば女子高生だ。しかも僕と同じ高校の。ということは……この人は僕のことを知つていて、のだろうか？ だとして、その上僕に恨みか何か持つてゐるんだとしても

いきなり背後から定規を突き付けてくる理由なんて見当も付かない。

……胸のリボンが緑色つてことは、この人一年生なんだな。ううん……やっぱり知らない、よなあ？

「あの」

「まさか、また腰が抜けたなんて言わないでしょうね」

いや、別に立とうと思えば立てるけど。でもなんか機を逸したといふか　また？

見知らぬ上級生は「男のくせに」と言いかけてから、突然何かに気付いた様に、はつ、と息をのむと、不思議そうに見上げているであろう僕に、

「『めんなさい』私、なんであんなこと……『気付いたら、なんて言つのか』はしゃいでしまつていて……本当に『ごめんなさい』……立てる？」

「」ひちが申し訳なくなるくらい恐縮しながら謝罪した後、手を差し伸べてくれた。

僕は差し伸べられた手をしばらくの間じっと見つめて、だけどその手を取ることはせずに、もう一度視線をこの上級生と交わらせる。どう考へてもそこに行き着いてしまつある結論。あり得ないその答えを、僕は口にする。

「からすさ……なの？」

「……誰だと思っていたの？」

誰、って言われても……見ず知らずの人だよ。そんなの。からすさんだと思った上で殴るわけないだろ。

「だつて……その、全然……違う、よ？」

顔のつくりも、髪の色も、体型といつかスタイルも、からすさんとこの人は似ても似つかない。

「あなた、数日前に加賀さんを訪ねたのでしょうか？　その時に聞かされていないの？」

「加賀さんは……からすさんはもう、戻らないって……」

これを聞いてからすさん　らしき人は呆れたように、

「あの人らしいと言えばらしいけれど……」

そう嘆息交じりに呟いて、眉間にしわを寄せている。

「……どういう、こと?」

「体は変わったけれど人格は同じ、といつことよ。加賀さんが、死んだ人間を自分達の仲間にすることがある、と言つて聞いたでしょう? 今の私はそうなつて、彰と一緒に加賀さんの家でお世話になつているの」

「え、でも、からすさんはそういうのにはならなかつた、つて加賀さん……からすさんは、その……自分で、だからつて……それに、それならなんで、僕のこと、覚えてるんだよね?」

あの仕組みで仲間に加わつたとしても、四日前 僕にとつての四日前に死んだからすさんは、僕のことは知らないはずだ。それなのに

「すべて覚えている。あなたのことも彰のことも、あの日あつたすべてのことを。だから私は 今の私はここで死んだ私が生まれ変わつたわけではない。あなたと同じようになつた最後のあの時? からずつと続いて、ここにいるのよ」

それつてあの 振り向いて、と言つていた?あの時?だよね。

でも、じゃあ

「つまり、世界が元に戻る前に一度仮の領域に移されたところまではあなたと同じ。でもその後、戻つた後は、あなたは今までと同じ領域に戻されたけれど、私は別の領域を 死んだ人が生まれ変わる時そうなるのと同じように、<sup>1</sup>混沌の御使い?としての領域を新しく『えられたの。それで……分からぬわね。私は清寺さんのようには説明できないから』

疑問符を浮かべている僕を見て説明してくれたのだらうけど、彼女の言う通り分からぬ。そもそも、あの人の説明だつて僕はよく分からなかつたし。

でも 確かに分からなかつたけど、でも、あれがおかしいってことだけは分かる。

「だつたら、さ、加賀さんはなんである時、戻るのは一人、なんて言ったの？」

「あの人は……底意地が悪いところがあるから、そういう言い方をしただけ。私は元通りになつていないでしょう？　以前と同じ人間として生きているわけではないもの」

そう、か。確かにそうだけど。なら、だつたら、何度見ても見た目は全然違うけど

「じゃあ、ほんとに……ほんとにからすさん、なんだよね？　からすさんが、今ここにいるんだよね？」

「ええ」

そう言つて頷く姿はやつぱり見知らぬ人だけど、でもその気配、その雰囲気は間違いなくからすさんのそれで　からすさん、だからすさん。からすさんからすさんからすさんからすさんからすさんからすさんが　ここに、いる？

「……からすさんは、加賀さんに何を叶えてもらつたの？」

あの人気が言つていたのは　役に立つたら願いを叶えてやる、だ。なら、あの人はからすさんにだつてそれを聞いたはず。だけど、この人の願いは最初から一つで、だから僕がこつしているのなら、だつたら……

からすさんは何も言わない。目を閉じて、深くため息をつく。  
僕の願いは　でもこの人はそうすると決めたのに、それを僕が勝手に　だから、ここに……

結局僕はまた、僕のわがままで、この人を犠牲にしたんだ。

そう思つても、僕はどこまでも自分勝手で、だから、言いたいことがあって　僕はこの人に言いたいことが、あつたはずなのに、それなのに全然それが、出てこない。声にならない、どころか頭の中で言葉にすらなつてくれない。

僕はただ、泣くことしかできなかつたから。

うつむいて、声にならない声を押し殺して歯を食いしばる。だけど、抑えられない。

「泣くようなことではないでしょ?」「う

彰君にほんじたいようにすればいいって言つたの。やつぱりからすさんは容赦がない。そんなこと言われても、僕には

「……無理、だよ」

座つたままもう一度顔を上げて、崩れそうになるのをじらえて、なんとか言葉をつむぐ。

「だつて……だつて、嬉しいから」

これを聞いて、この人はどう思つのだらう? そう思つても、とめることができない。

「僕はからすさんが生きていることが嬉しい。からすさんが望んでなくて、それをもう嫌だつて思つって、全部僕のせいだ それが分かつてゐるのに、それなのに、それでも、嬉しいんだ」

この人を犠牲にしたと知つた後でも、どうしても、僕はそう思はずにはいられない。

「僕は、ほんとにわがままばかりだけど……だから、無理だよ。嬉しいんだから。からすさんがここにいることが、嬉しいんだから。僕は……嬉しい……うれしいよ……」

もう、無理に抑えることもできなくなつて、僕は声を上げて泣く。からすさんは一瞬だけ困つたような顔をして、でもすぐに僕の目の前に屈んで、言つた。

「ありがとう」

それは、僕がからすさんに言つたかった言葉で、だけど、やつぱり僕はそれを言えなくて、されるがまま、彼女がポケットから取り出したハンカチで顔を拭われていた。

そうやつて小さな子供のように扱われている間、僕はそれが情けないとか、恥かしいなんてことは思わず、ただからすさんが、初めて笑つてくれた そんなことを、考えていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4920z/>

---

十二世界の戦後史

2011年12月16日19時52分発行